

第44回少年の主張全国大会

—— わたしの主張 2022 ——

報告書

今、思っていること。
今、伝えたいこと。
中学生のわたしだから、
形にできる思いがある。



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

はじめに

第44回少年の主張全国大会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するため、令和4年11月1日～11月30日までの期間、WEBページに主張発表動画を掲載して開催し、開催の様子は佳子内親王殿下にもご視聴いただきました。

本大会は、中学生が日頃の生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動したり感銘を受けた経験、更には将来への決意などを自分の言葉で表現し、同世代のみならず社会に向けて発表する場として、昭和54（1979）年の「国際児童年」を記念してスタートしました。爾来、この大会を通して、多くの中学生の共感を呼び、また大人の方々に現代の中学生に対する理解と関心を深めていただきたいとの思いも込め、毎年実施されています。

今年は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも全国3,748校の中学校から、約39万人の中学生が応募してくれました。

そして、全国大会では、各都道府県大会により選抜された47名の中から、有識者や過年度大会受賞者等で構成される審査委員会により選ばれた12名の中学生の発表映像を視聴した上で、優秀発表の選考を行いました。

内閣総理大臣賞を受賞した山梨県代表の前橋 真子（まえばし まこ）さんは、「あなたの声、心に届け」と題し、重度難聴の妹がハンディキャップを乗り越えて明るく元気に生活する姿から、障がい者というフィルターを通して妹を見ていた自分に気づき、その人自身や心に寄り添っていくことが大切であることを主張しました。

文部科学大臣賞を受賞した長崎県代表の赤川 明信（あかがわ あきのぶ）さんは、「日本を耕す」と題し、兼業農家の父に言われて手伝っていた農作業の中で、作物を育てることの喜びに気づきましたが、いわゆる3Kといわれる厳しさで農業離れが進むことを憂え、ICTやAIを活用した「新しい農家の働き方」を提言しました。

国立青少年教育振興機構理事長賞を受賞した栃木県代表の阿久津 結花（あくつ ゆうか）さんは、「私が育てる「結」」と題し、父からもらった小さな田んぼで無農薬、無肥料、自然栽培でコメ作りに取り組み、収穫した米を通じて地域の中で様々な人たちとつながり、自分の世界が広がっていくと感じ、小さな一歩を踏み出すことの大切さを主張しました。

このほかにも、緊急地震速報をきっかけにバリアフリーの大切さに気づき、支え合う社会の構築の必要性を訴える主張や、何世代にも渡って受け継がれてきた「水餃子」を題材に、人の生きた証が未来に繋がっていくという主張など、今大会も多種多様な発表が見られました。

この報告書では、全国大会で発表された12作品をはじめ、各都道府県の代表となられた47作品全てを掲載しています。いずれも中学生らしい澁刺とした感性豊かな文章で綴られています。一人でも多くの方々に彼らの主張をお届けできれば幸いです。

最後に、本大会の開催に当たり、応募して下さった全国の中学生、地方大会の開催に多大なご協力をいただきました各都道府県並びに青少年育成会議、ご後援、ご協力を賜りました内閣府、宮内庁、文部科学省をはじめとする関係機関、団体等の皆様に心から感謝を申し上げます。

令和5年 1月
国立青少年教育振興機構
理事長 古川 和



もくじ

祝辞	1
審査委員長講評	2
少年の主張都道府県大会風景	3
少年の主張全国大会出場者の発表作品	4
＜内閣総理大臣賞 山梨県代表 前橋 真子さん＞	5
＜文部科学大臣賞 長崎県代表 赤川 明信さん＞	6
＜国立青少年教育振興機構理事長賞 栃木県代表 阿久津 結花さん＞	7
＜審査委員会委員長賞 宮城県代表 浅野 友希さん＞	8
＜審査委員会委員長賞 滋賀県代表 田島 桂さん＞	9
＜国立青少年教育振興機構奨励賞＞	10
少年の主張全国大会努力賞受賞作品	17
実施概要	53
審査委員の感想	57
少年の主張全国大会を振り返って＜参考資料＞	63
第45回少年の主張全国大会 開催のお知らせ	73

祝辞



「第44回少年の主張全国大会～わたしの主張2022～」が開催されますこと、心からお喜び申し上げます。

本大会は、中学生が身の回りのことや世界のことを題材に自らの考えを発表する大変貴重な場であると聞いています。この機会を通じて、全国約39万人の中学生が、全国各地で社会や世界に向けての意見や提案などについて素晴らしい発表をしてくれました。

代表となった12名の皆さん、誠におめでとうございます。家庭や学校生活の中での気付きや未来への希望や提案など、心のコもった皆さんの熱い思いが伝わってきました。また、惜しくも出場することが叶わなかった皆さんの発表も、それぞれが日頃の思いを精一杯伝えようとする大変素晴らしいものだったと聞いています。

これからの世の中は、社会のデジタル化、グローバル化が急速に進展し、更には、新型コロナウイルス感染症の影響により、複雑で予測困難な時代となっています。そのような中で、皆さんのような全国の中学生たちが、学校生活や日常生活の中で考えたことや伝えたい思いなどを発表することは、多様なものの見方、考え方を養うものであり、正に、これからの社会を生きていく上で、一生の財産となるものと考えています。本大会が、これからの社会へ羽ばたいていく皆さんにとっての大きな一歩になることを願っています。

文部科学省としても、我が国の将来を担う人材の育成のため、教育政策の充実に努めてまいります。

結びに、御指導に当たってくださった教職員の皆様、また、応援して下さっている御家族の皆様には厚く御礼を申し上げますとともに、御参加された皆さんのこれからのますますの御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

文部科学大臣 永岡 桂子

審査委員長講評



伝えるということ

満員の客席から固唾を飲んで見守る同年代の生徒たちを前に、広いホールに響く声で堂々と、あるいは切々と主張を繰り広げる。そんな緊張と高揚の最終審査会がコロナ禍でできなくなって3年。代わりに事前送付された動画を審査することになった。

世の中がすっかりリモートに慣れた昨今だから、対面のリアルタイムとさほど変わらないかと思いきや、正直言って今年の審査では若干の違和感を覚えた。2次、3次での作文審査と最終審査で拝見した動画との印象に落差があったのである。作文に込められた熱い深い思いが、総合パフォーマンスである最終動画にそのまま伝わっていないケースがままあったのだ。

若い世代ならSNSも使いこなし、メディアはほとんど空気のような存在かと考えていたが、印象でいうなら、カメラの向こう側で聴いている私達一人一人の顔を思い浮かべてくれているか不安になったとでも言おうか。コミュニケーションとは心を相互に伝え合うプロセスであるが、それが一方通行に感じられたとでも言おうか。不特定多数ではなく、一対一で繋がる通信の特性なのかもしれない。

メディアはメッセージである、というマクルーハンの古典理論があるが、まさにメディアは人間拡張の手段であり、その使い方そのものもまたメッセージなのだ、とこんな時代だからこそ改めて思う。若者たちにとって、既にメディアは拡張された部分での「自己」として独り歩きしているのかもしれない。その意味では、例年多いネットいじめやフェイク情報などを巡るテーマが今年あまりみられなかったのも特徴といえそうだ。

むしろ、対人関係やジェンダーの悩みや手触りの農業など生物としての人間の生身のテーマが多かったのが印象的だった。ハンディがあったら華やかなスタイルをしてはいけないのか、制服も校訓もダイバーシティに対応しているのか、覚悟を決めた主張には心打たれた。水餃子にこめられた歴史の重みを感じたり、自らの苗字や沖縄でのナイチャーという言葉から世界を眺めたり、足元の気づきが大きな時代背景の理解へと繋がっていることにも一人一人の将来へ向けた無限の可能性を感じるものだった。

また、父親とのコラボレーションによる研究や、挨拶から発する近所の人たちへの心配りなど、優しさと思いやりを心に秘めた活躍も眩しくうつつた。

本格的なAI時代を前に、多感な中学生たちがメディアを使いこなしてどう人間らしさを発揮してってくれるのか、これからの日々を期待をこめながら主張を受けとめた。皆さんが伝えようとしていることが、メディアを超えてちゃんと伝わっているように願いを込めながら。

第44回少年の主張全国大会 審査委員長
宮崎 緑 (千葉商科大学・国際教養学部教授)

少年の主張都道府県大会風景

秋田県大会



秋田県代表 高田 菜花さん

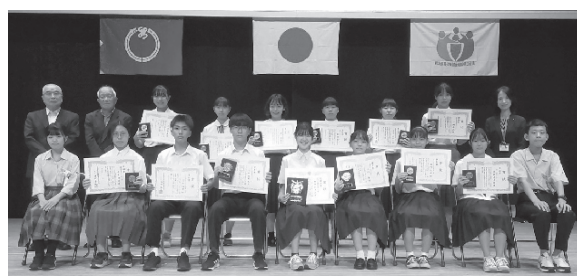


秋田県大会 記念撮影の様子

新潟県大会



新潟県代表 阿部 彩実花さん

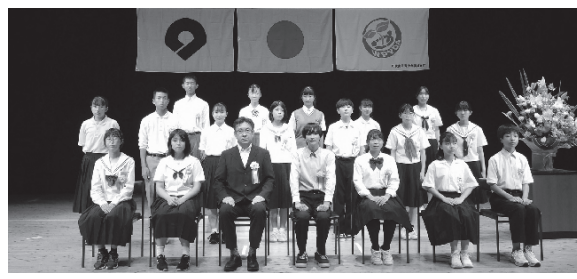


新潟県大会 記念撮影の様子

和歌山県大会



和歌山県代表 園部 暢也さん



和歌山県大会 記念撮影の様子

愛媛県大会



愛媛県代表 保岡 優奈さん

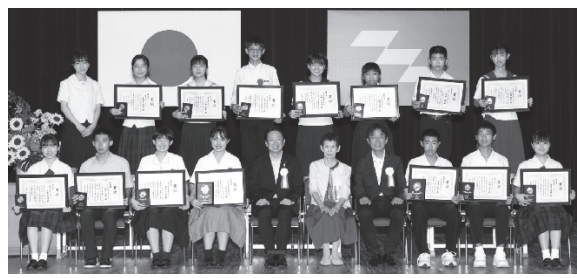


愛媛県大会 記念撮影の様子

宮崎県大会



宮崎県代表 平屋 文郎さん



宮崎県大会 記念撮影の様子

少年の主張全国大会出場者の発表作品

- 誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。
- 全国大会出場者全員に、国立青少年教育振興機構奨励賞が授与されました。

内閣総理大臣賞

【関東・甲信越静岡ブロック】

山梨 北杜市立甲陵中学校 3年
前橋 真子 『あなたの声、心に届け』

文部科学大臣賞

【九州ブロック】

長崎 大村市立玖島中学校 3年
赤川 明信 『日本を耕す』

国立青少年教育振興機構理事長賞

【関東・甲信越静岡ブロック】

栃木 大田原市立親園中学校 3年
阿久津 結花 『私が育てる「結（ゆい）」』

審査委員会委員長賞

【北海道・東北ブロック】

宮城 塩竈市立玉川中学校 3年
浅野 友希 『私のスタートライン』

【中部・近畿ブロック】

滋賀 米原市立米原中学校 3年
田島 桂 『水餃子』

国立青少年教育振興機構奨励賞

【北海道・東北ブロック】

北海道 江別市立大麻東中学校 3年
金 美怜 『込められた意味』

【関東・甲信越静岡ブロック】

神奈川 平塚市立春日野中学校 3年
角野 理望 『ナイチャー、そう言われた日から』

【中部・近畿ブロック】

愛知 あま市立美和中学校 3年
飯田 春佳 『当たり前前の日常に向かって』

【中部・近畿ブロック】

岐阜 各務原市立鶴沼中学校 3年
平田 菜々花 『地域で支え合う』

【中国・四国ブロック】

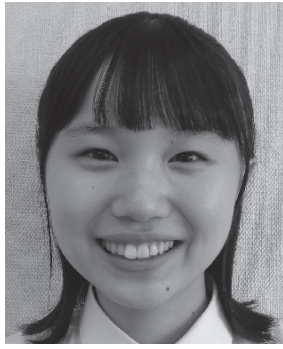
島根 出雲北陵中学校 3年
高橋 ゆかり 『二度の出会い』

【中国・四国ブロック】

広島 広島県立広島中学校 2年
中島 千夏 『平和な世界を・・・』

【九州ブロック】

鹿児島 鹿児島大学教育学部附属中学校 2年
川上 悠来 『「雄飛」を「勇飛」に』



内閣総理大臣賞受賞

あなたの声、心に届け

山梨県 北杜市立甲陵中学校 3年

前橋 真子

「真子ちゃん、きょうだいいるの?」「妹と弟がいるよ。」「妹かぁ。羨ましい。」羨ましいなんて……。私は妹の存在を口に出すのをためらうことがあった。

私の妹は生まれつき音が聞こえない重度難聴だ。左耳に音を増幅させる補聴器、右耳に脳に音の信号を送る人工内耳を付けている。発音も上手ではない。私が小学生のとき「妹、障がい者なのに元気だね。」と友達に言われた。なんとも言い表せないモヤモヤが私の心に渦巻いた。障がいのある妹が明るく元気なのは普通のことではないと思い、恥ずかしさを覚えた。そしていつの間にか妹のことを口にするのも、一緒に出掛けるのも辛くなった。

この春中学校入学を控えた妹は、補聴器を新調した。私も一緒に店に行った。そこには色とりどりの補聴器が並んでいた。お店の方は、好きな色を選ぶよう言った。私は「真紀ちゃん、黒か茶色を選んだら?」と勧めた。強く勧めた。黒か茶色なら髪の毛と同調して、あまり目立たない。みんなと変わらない見た目でいられる。恥ずかしい思いをしなくてすむように、何度も言った。しかしそんな私を見て妹は言ったのだ。「誰になんと思われても、これは私の耳なの。私は黄色い補聴器の私を見てもらいたい。」妹に言われてハッとした。障がいにこだわっていたのは私自身だったのだ。

聴覚障がいのある妹が、明るく元気なのはおかしいのか。いや、妹は妹だ。妹が笑顔を絶やさないのは、今まで本当に沢山の努力をしてきたからだ。私と同じ小学校に行くために、人工内耳の手術を受け、手話が無くても友達と話せるように病院やろう学校に通って、発音練習を頑張っていた。誰にでも優しいのは、自分がされて嫌なことや辛かったことを痛いほどに知っているからだ。私は、今まで辛くて、悔しくて泣く妹を何度も見た。でもその度に努力してハンディキャップを乗り越えていた。そんな妹の努力を一番近くで見ているのは私だ。障がい者というフィルタを通さず、ありのままの妹を見て欲しい。手話や口話、筆談、テレビの字幕も全部、社会と繋がるコミュニケーションツールの一部だ。それが妹の全てではない。

聴覚障がい者は、一度見ただけでは耳が不自由かわからず、接し方に戸惑うことがある。でも耳の不自由な人がみんな、相手に手話を望んでいるわけではない。聴覚障がい者が困っているときは、その人の正面から「何か手伝えることはありますか。」と口を大きく開け、ゆっくり話しかけてほしい。

「思いやりのある言葉は、たとえ簡単な言葉でも、ずっとずっとこだまする。」これは貧困や病に苦しむ人の救済に生涯を捧げた、マザーテレサの言葉。心のバリアフリーの精神を表している。まずは聞こえないことについて知ろうとしてほしい。その思いやりでどれだけ救われる人がいることだろう。

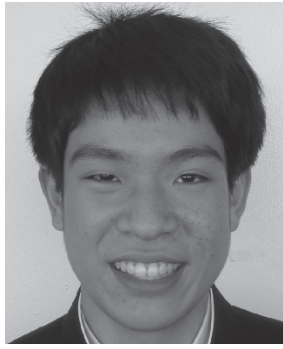
妹は毎日黄色い補聴器をつけ、お気に入りのテニスラケットを持ち元気に登校している。先日友達に「妹さん明るくて、部活のムードメーカーで、頑張っているよ。」と言われた。ありのままの妹を見てくれていると分かり心が温かくなった。そんな妹は私の誇りだ。

私たちにできることには限りがあるかもしれない。それでもあなたの身近にハンディキャップを持つ人がいたなら、そのハンディというフィルタ越しではなく、その人自身や心に寄り添ってほしい。障がいのある人への理解が進むことで、一人またひとりと笑顔が増えていくと確信している。

妹の耳に、あなたの声は聞こえないかもしれない。でも、あなたの気持ちは妹の心に確実に、届いている。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの作品を社会を生きる全ての人に届けたいです。この社会には様々な人が暮らしています。時に助けが必要なこともあるはずですが。それを見過ごすのはとても簡単ですが、相手を理解したり心のバリアフリーとして言動に移したりするのはとても勇気のいることです。この作品が一人でも多くの人の勇気を、後押しできますように。その勇気が誰かの笑顔に繋がることを願います。また、この作品を書くにあたり協力してくれた妹。妹の心にも私の声が届いていますように。



文部科学大臣賞受賞

日本を耕す

長崎県 大村市立玖島中学校 3年

赤川 明信

僕の夢は「日本の未来を明るくすること」です。僕は幼稚園の頃から日本地図や歴史のマンガを読むのが好きでした。2000年以上続く歴史、多様な風土と文化、美味しい和食、大好きな長崎くんちなどなど日本の素晴らしさを知って「日本ってすごいなあ」と思うようになりました。小学校高学年になるとニュースにも関心を持ち始め、少子高齢化、過疎化といった大きな問題に日本が直面していることも知りました。僕はそんな日本の持つ大きな課題をどうにか解決したい、僕にはなにができるだろうと考えるようになりました。その答えは僕の家の中にあったのです。

僕の父は消防署で働きながら、家業である農業にもはげんでいます。いわゆる兼業農家です。お米、はっさく、夏はなすびやきゅうり、冬は大根やはくさい、神棚に飾る榊までたくさんの種類の作物を作っています。そんな家に生まれた僕は、田畑の野焼きや農薬の散布、田植えなど休みの日はよく駆り出されます。手伝っていて感じるのは多くの作業に「キツイ」、「汚い」、「危険」の農業の3Kがあてはまることです。束になった藁や30キロある米袋を担いで数十メートル先まで運んだり、田植えの時は足は焦げ茶色に染まり、時には顔まで泥まみれです。また、チェーンソーや草刈り機。油断して使ってしまうと命に関わる事故にもつながります。

これを考えれば、農業をしたいという若者が減っているのも納得してしまいます。僕は忙しい父からの「苗は植えんばけんが、外に來い」といった言葉に聞こえないふりをすることもよくありました。僕はそれほど農業の手伝いをするのが嫌でした。

ところがある日、野菜の種を植えた数日後畑に水をやりに行くとき「すげえ」一つだけかわいい小さな芽が出ていました。これが、たったの二ヶ月で自分のふくらはぎよりも太くて、食べるとほんのり甘い立派な大根になるのです。植物の生命力は本当にすごいものです。そして、作物はその種や苗を植えて、手入れをする人がいなければ、成長することはできません。農業では作物を数ヶ月で「立派な大人」に育て上げ、いわば植物の「親」になることができるのです。

それ以来僕はよく植えた野菜をじっと見つめるようになりました。

「この前、植えた大豆がこんなに大きくなっている。」

見ていると本当に心が落ち着き、勉強の気分転換にもなります。僕はペットを飼ってないし、アニメやアイドルの「推し」もいません。そんな僕にとっては作物こそが自分を癒してくれるペットや推しに代わるような存在であり息子であり、一つの大切な命なのです。

また、僕はもう一つ気付いたことがあります。世間では3Kと思われるような仕事でも、農家のように感動や喜びを得たり、多くの人から感謝を受けて誇れる仕事なのではないかということです。だから父もツラくても、忙しくても仕事を続けられるのでしょう。

この二つのことに気付いてから僕の農業に対する考え方は大きく変わりました。そして、「日本の未来を明るくする」ということについて改めて考えました。

今、コロナ禍によってリモートワークが増えたり、副業が解禁されたり、多様な働き方が増えてきています。また、日本の食料自給率は2020年度カロリーベースで37%です。これは外国と比べても、低い水準で農家の高齢化や若者離れで更に下がるかもしれません。耕作放棄地も増えています。我が家でも祖父がなくなってからは広い土地を父一人で管理しています。雑草は三ヶ月で伸び、落ち葉や枯れ木が落ちるので手入れは本当に大変で、限界だと思えます。このような現状を踏まえ、僕は農業の新たな形への改革が必要だと考えます。ICTやAI、自動運転といった日本の誇る科学技術を用いて、農家の負担を減らして、他のことにもチャレンジができる「新しい農家の働き方」です。

僕はこれまで「絶対に将来農業には関わらない」「この田舎から解放されるまであと五年もあるのか」と思っていました。でも、農業の素晴らしさを知った今では、農業に関わり続けたいという思いが強くなっています。農業の感動、おもしろさを伝えていくことで、若者がワクワクしながら畑も日本の未来も耕していくそんな「未来」になるのではないのでしょうか。「新しい農家の働き方」それこそが「日本の未来を明るくすること」の第一歩だと信じて。

この主張をどんな人に届けたいですか？

特にこの主張を届けたいのは、以前のぼくのように農業のネガティブな部分しか知らない人でも農業には「キツイ」「汚い」と思うような場面もあれば、感動したりおもしろいと思うことも多くあると知ってほしいです。また、農業は国の基です。多くの人に農業の現状を知ってもらって、これからの農業と日本の未来の形を考えてもらえたらうれしいです。



国立青少年教育振興機構理事長賞受賞

私が育てる「結（ゆい）」

栃木県 大田原市立親園中学校 3年

阿久津 結花

お米は、私をたくさんの人と結んでくれます。私の父と祖父は、お米の食味を競う国際大会で最高賞にあたる金賞を受賞しています。ギネス世界記録に認定された「世界最高米」の原料にも選ばれ、日本中からお米の注文が殺到しています。気がつけば、私の夢は世界で一番美味しいお米を栽培することになっていました。

米作りの知識や技術は、もちろん父と祖父から教わりました。苗を強くするための苗踏みや、田植え機やコンバインの運転の仕方。見ていると簡単そうに見えても、自分でやってみるととても難しいのです。背丈が低く根は白く長い稲の方が台風や病気に強いなど、知れば知るほど面白くなっていきました。

小学六年生のとき、小さい田んぼを父から貰いました。お米は原種に近いほうが美味しいと知り、ササニシキの親にあたり、原種に近い「ササシグレ」をそこで作りたと思いました。父の知り合いで会津でササシグレを栽培している人から種を分けてもらえることになり、私の「ササシグレ」作りはスタートしました。苗作りからこだわり、無農薬、無肥料、自然栽培で育てています。毎朝学校へ行く前に除草をしています。作り始めたあとで、「ササシグレ」は血糖値の上昇が穏やかで、米アレルギーの人も症状が発症しにくい、体に優しいお米であるということも知り、一層思い入れが強くなりました。私の「ササシグレ」は年々食味値が上がり、美味しくなっていると感じています。

みなさんは、農業に「つらい」「汚い」というイメージをもっていませんか。実際に農業に触れてみたら、農業の楽しさがわかるはずです。私の田んぼは手植えなので、人数が必要です。去年は私と父と友達一人の三人でしたが、今年はさらに増え、三人の友達が田植えを手伝ってくれました。素足で田んぼに入ることを躊躇していた友達も、終わった頃には「楽しかった」「来年も手伝うよ」と言ってくれました。

こんな風に心を込めて育てた私の「ササシグレ」は、今、自然食品を扱うお店で販売しています。販売することが決まったとき、私はパッケージをデザインしました。無農薬、無肥料、自然栽培のイメージをシンプルなデザインで表現しました。このお米が人と人を結ぶことを想像し、稲が輪を描くようにイラストを書きました。そして、「結」と名付けました。

「新米のように美味しい」「また買います」店頭に並んだ私のお米を買ってくださった方からのメールが届きます。会ったこともない人が私のお米を食べて、「美味しい」と言ってくれる。こんなにも嬉しいなんて。本当にお米が人と人とを結んでくれました。生産者が販売者を通して消費者と繋がれるとき、たくさんの人が幸せになれると知りました。もっともこの喜びや幸せを広げたい、そう思いました。

私のお米は、地域の食材を使った料理をキッチンカーで提供している方とも結んでくれました。前回のイベントで好評だったので、次も声をかけてくれそうです。

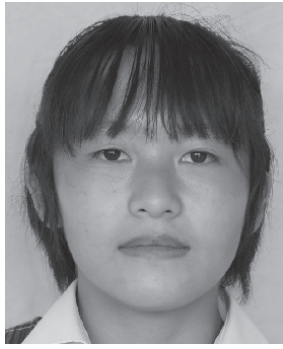
今、私にはやりたいことがたくさんあります。自分のお米を使った料理を提供するキッチンカーやレストラン。米粉のお菓子の販売もしたい。農作業の体験を通して子どもたちに農業の楽しさを広めたい。いろいろな企画はSNSで発信して、たくさんの人と繋がり、人と人を結びたい。

私を取り巻くこれらの繋がりを作ってくれた父に、繋がりを広げるコツを聞いてみました。「何かを決めると、物事は動き出すんだよ。小さな一歩を踏み出すことで世界は広がっていく。」と話してくれました。

私も一歩を踏み出します。これからは、自分の考えていること、取り組んでいることを、自分でどんどん発信します。私は、田んぼを照らす太陽のような笑顔と、相手にエネルギーをもたらす魅力的な人になって、人と人を結んでいきます。そこで出会えた人との「結」を大切に、笑顔になる人を増やすために。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

夢の実現のために、大学に進学し、農学部で農業や経営、社会科学を学びます。常識に囚われず、変化することに積極的に挑戦し、たくさんの小さな一歩を踏み出していきます。早速、今年収穫するお米で、キッチンカーでおむすび屋さんを知人と一緒にやります。小さな一歩かもしれませんが、小さな一歩をいっぱい踏み出して、お米で人と人を結び、笑顔を広げ、お米とともに成長していきたいです。お米が地域の誇りになれるように貢献していきたいです。



審査委員会委員長賞受賞

私のスタートライン

宮城県 塩竈市立玉川中学校 3年

浅野 友希

「あ、地震。」

就寝して間もなく、突然の揺れ、枕元に置いたスマートフォンから流れる耳ざわりな音に、私は飛び起きました。

東日本大震災から十一年が経過した今年三月十六日。福島県を震源とする、マグニチュード七、四の地震が、私の住む宮城県を襲いました。すぐに家族と声を掛けあうと心が落ちつきませんでした。

「緊急地震速報の音、本当すごい。」

「超うるさい音だね。熟睡していても絶対気付く。」

家族と交わした何げない会話が、ふと、私の心にひっかかりました。

「この音を聞くことができない人は、地震の時どうしてるんだろう。」そんな疑問が頭から離れず、気になった私は調べてみることにしたのです。

日本には、いったいどれ位の聴覚障害者の方々がいるのでしょうか。その数は約二十九万人とされています。この数を聞いて、多い・少ない、どう感じたのでしょうか。

私は、人数の多さに驚きました。というのも、私は今まで、聴覚障害者と呼ばれる人達と接することが無かったからです。

このことを父に話すと、父は、

- ・ 東日本大震災の時にも、様々な障害を持つ人達の避難や対応が問題になったこと。
- ・ 聴覚が不自由な人は、自治体等の防災無線や避難警報の音を聞けず、災害の時に、正しい情報を入手できないまま、逃げ遅れてしまう可能性があること。
- ・ 父自身、仕事で知り合った聴覚障害者の方と筆談や身ぶり手ぶりを交えながらコミュニケーションした経験があり、手話の必要性を実感したこと。

そして、社会の中で、ハード・ソフト両面で、バリアフリーの必要性があることを教えてくれたのです。

さらに、父は、私を外へと連れ出しました。

父と一緒に目にしたのは、歩道上の点字ブロック、車椅子や高齢者の為のスロープ付きの通路。エレベーターや案内板の点字表示、そして、視覚障害者用の音響式信号機。

日常社会の中にあふれる、様々なバリアフリーを目のあたりにして、私は、日本に既にある優しい社会環境に気付かされたのです。

私には、多様な人々が暮らす社会への理解がまだまだ足りない。

そんな私の思いに気付いたのでしょうか。

父は、

「互いを思いやり、わかり合おうとしようとするのが大事だよ。気付いた時に、どうするかを考えて、行動に移せばいい。」と言ってくれたのです。

地震のあの日、聞いた、緊急地震速報。

私は、その音を聞いた事をきっかけに芽生えた疑問から、自ら調べ、父と学び、様々な障害をとりまく社会の一部分を知りました。

そして、今の私にできることは何かと考えた時、一人一人が誰かを支えあえる社会を担う人間になりたいと思ったのです。

まだ知らない誰かを思いやり、行動する。

きっと、ここが私のスタートライン。

私は、手話を学び始めました。

テレビや本など、学び場を探しながら、独学で勉強中です。

私達の暮らす、これからの社会が、より良い未来になるように、今、自分にできること。

少しずつでも一歩ずつ、前に進めるように。

私は、これからも、自ら考え、学び、行動していきます。

みなさんも、何か始めてみませんか。

そこが、あなたのスタートラインです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

今年の3月16日に大きな地震があり、その際にスマホから鳴る緊急地震速報の音を聞いたことや、手話に興味があり、聴覚が不自由な方は災害の際にどうやって避難・対応をしているのか、などということが気になったことがきっかけになりました。



審査委員会委員長賞受賞

水餃子

滋賀県 米原市立米原中学校 3年

田島 桂

我が家では、水餃子を作る時、大抵皮作りから始めます。小麦粉に水を入れ、力いっぱい捏ねて、麺棒で一枚一枚皮を作ります。ムチムチで食べ応え抜群なのにサッパリとしていて、いつの間にかお腹がはち切れそうになる程美味しい我が家の味です。この餃子、作るのはいつも父で、私は毎回手伝いに呼ばれます。

先日、いつものように一緒に作っていると、父がポツリと言いました。

「最期に食べる物はこの水餃子がいいな。」

はて？と思いました。確かにこの水餃子は美味しいけれど、他にももっと美味しい物はあるのに…。すると、父が続けて言いました。

「去年、お父さん、心臓悪くして入院した。その時ちょっと気が弱くなって、死ぬ前にしたい事とか行きたい所とか考えていて、思ったのがこの餃子。」

「でも、病気のときは自分で作れなくない？」

「いや、最期に食べたいのは、桂ちゃんが作ってくれる予定の水餃子。そこが重要。」

なんで私の？と聞いていくと、我が家と餃子をめぐると長い話が始まりました。

父の餃子は、父の母、つまり私の祖母から習ったそうです。そして、祖母はその父である、私の曾祖父から習ったのだそうです。明治42年生まれ、曾祖父は、戦前満州で菓子屋を営んでいました。手先が器用で、美味しい物が好きだった彼は、その地の中国人からとある水餃子のレシピを教わったそうで、今私が食べているのも、その時のレシピ通りのものだそうです。中国の伝統の餃子が、百年近い時を経て、自分たち家族の食卓に上っていたなんて、思いもせませんでした。

父はこのような由来を語った後、「最期にこの水餃子を食べたい理由」を、「歴史が繋がる感じがするから。」と言いました。満州の中国人から曾祖父へ、そして、その曾祖父は戦後命からがら満州から引き揚げて、日本で何とか生き延び、祖母にこの味を伝えました。父は、両親が共働きだったので、早くから料理を覚えたそうです。そのレパートリーの中に、祖母が教えた水餃子のレシピがあったのです。だから、父にとって、それを受け継いで自分の娘が作った水餃子こそ、最期の食事にふさわしいのだと、話してくれました。

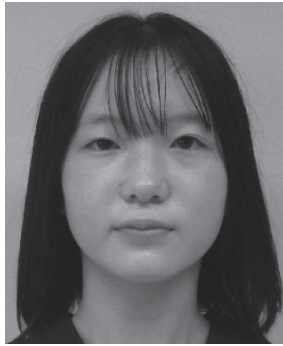
時々、私は、「私が死んだ時、何が残るのだろう。」と考えます。もし何も残らなかつたら…、誰からも忘れられてしまつたら…と思うと、とても怖くなります。例えば、美術や文学の美しい作品を創ることができれば、それはたくさんの人の心に残り続けることでしょう。あるいは、歴史に残るような発見をすれば、生きた証が残せたと満足できるでしょう。けれども、そんな人はほんの一握りです。自分とは関係のない話のように思えてなりません。

けれども、この水餃子の話を聞いて、少し考えが変わりました。この水餃子のレシピを伝えた中国人も、海を渡って百年後の日本で作り続けられるとは思っていなかったでしょう。それがいろいろな偶然が重なって、今こうして我が家に伝わっているのです。

「なんでもない」人の「平凡な」営みが積み重なり、私たちに伝わり、今度は私たちが次の世代に伝える…。それはほんのささやかなことかもしれませんが、自分の名も残らないかもしれませんが、けれども、私たち一人ひとりの生きた証は、必ず残り、未来へと繋がっていくのです。水餃子一つで何だか大げさなようですが、改めて身の回りのものに目を向けてみると、そこには幾つもの、「なんでもない人」の生きた証が刻まれているのだと気づくことができました。私たちの将来は「特別な人」か「無価値な人」の二択では決してないのです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私と同じ普通の中学生です。私ぐらいの年頃は、つい人と自分を比べてしまい、落ち込むことが多いです。少し得意なものがあったとしても、今はSNSが普及しているので、全てにおいて自分の上位互換を見せつけられます。その中で、自分の存在意義を実感するのは、とても難しいことです。だから、人と比べるのではなく、自分の足もとを見ることで、気持ちが楽になることもあと伝えたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

込められた意味

北海道 江別市立大麻東中学校 3年

金 美怜

あなたは、「人と違う」ことを恥ずかしいと感じたことはありますか。あなたにとって「普通」とは何だと思えますか。私の父は韓国人で、俗に言う「在日韓国人」です。私の「金」という苗字も、父のもです。

この苗字を聞いた時、多くの人は、物珍しそうな目で私を見ます。そして、何かを悟ったような顔をします。私は、それを見るたびに、うんざりしました。区別されている気分で、居心地が悪かったからです。

小学生の頃は、苗字をいじられることも多く、基本、笑って返していましたが、やはりいい気分ではありませんでした。友達には悪意がないことを分かっているにもかかわらず回数を重ねるごとに、「私は人と違う」「私は普通じゃない」という思いが強くなっていきました。

こうしたことが度重なり、いつからか私は自分の苗字が嫌いになっていました。自分で名乗ることも、誰かに呼ばれることも、全てが嫌で仕方ありませんでした。

もちろん、親に話すことなど出来ませんでした。話せば、悲しい顔をさせてしまう、困らせてしまう、と分かっていたからです。

親には言わない、そう決めていたつもりでした。ですが、ある時、母に本音をぶつけてしまいました。「皆は普通の苗字なのに、どうして私は普通じゃないの？何で私だけいじられなきゃいけないの？こんな苗字なんか、嫌いだ！」

言い過ぎたと思った時には、もう手遅れでした。母は、悲しそうな、困ったような顔をしました。「そんな顔をさせたかった訳じゃないのに」私はすぐに後悔しました。その半面、私の中には、明確な答えが返って来なかったことに対するモヤモヤした気持ちが残りました。

何も変わらないまま、ただ時間が過ぎて、私が中学生になってしばらくした、冬頃でした。父が、ニュースを見て、「この人、在日じゃないかな。」

と、呟きました。疑問に思い、父に聞いてみました。

「どうして苗字を変える人が多いの？」

父は、少し顔を曇らせてから、話し始めました。

「昔は、今よりも差別が酷かったんだ。その名残みたいなものかな。隠すためだよ。」

父の口から、このことを聞いたのは初めてでした。そして、私に、父が中学二年生の時に書いた生活体験文を見せてくれました。

読み終えた時には、涙が頬を伝っていました。あまりにも残酷で衝撃的過ぎる内容を受け止めきれませんでした。所々違う送り仮名や決して上手じゃない表現も、今は私の涙を誘うだけでした。この時、初めて知りました。差別やいじめに耐えられず、叔父が自殺しようとしたこと。父が日本に来てから苦労した数え切れない程、沢山の事。これまでの父を思うと、涙は止まりませんでした。父は淡々と話しました。

「俺は、苗字を変える必要なんてないと思ってる。悪いことじゃないんだから。これから先、この苗字で嫌な思いをすることもあるかもしれない。それでも、堂々と生きなさい。」初めて苗字に隠された父の思いを知りました。解消されることのない私の中のモヤモヤは、その言葉で消えました。

苗字を変えるか、変えないか。この選択に正解はないと思います。ただ、一つだけ言えるのは父がこの選択をしてくれて、良かったということです。

私は、それ以来、隠すことをやめ、父の望む堂々とした生き方をしたい。と思えるようになりました。父のおかげで、私には他の人よりも広いルーツがあるのです。それは、何にも代えられない、私の宝物です。

そして、同じような立場の人が生きやすい世の中になって欲しいな、と思います。「人と違うことは何も悪いことじゃない」と、誰もが言える世の中であってほしい。そう強く願います。私自身、違いを排除するのではなく、理解し、寄り添おうとする生き方をしていくつもりです。

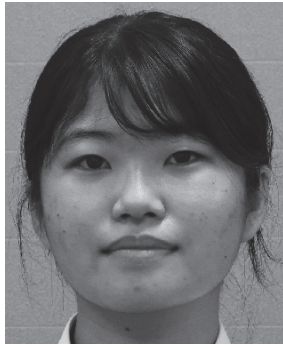
皆さんも「人と違う」ことをマイナスに捉えるのではなく、プラスに捉えてみて下さい。

違うことを気に病んだりせず、自分だけがもつ、「かけがえのない一面」と考えてみませんか。きっと、視界が広がって、色々な思いを知ることが出来ると思います。

私の思いが少しでも多くの人に伝わると嬉しいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

多様性が認められつつある世の中ですが、今も尚差別に苦しんでいる人、社会での生きづらさを感じている人、たくさんの方がいると思います。私はそんな多くの人に、この想いを届けたいです。きっと誰しも、周囲には理解してもらえない悲しみや葛藤があるでしょう。ですが、それは誰もが経験できることではありません。それこそが「人と違うこと」の喜びであり、誇るべきことなのです。私は多様性が当たり前認められる世界を信じています。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

ナイチャー、そう言われた日から

神奈川県 平塚市立春日野中学校 3年

角野 理望

沖縄では、本土の人のことを方言で「ナイチャー」と呼ぶ。私が、沖縄で過ごす中で最も印象に残った言葉の一つだ。私は、小学四年生の時、父の仕事の関係で沖縄に引っ越した。そこで日々を過ごす中で「ナイチャーだからか」そう言われたことがある。当時の私は、意味こそわからなかったが悪い感じで使われていることはわかった。家に帰った私は、母に尋ねた。「ナイチャーってどういう意味？」それに対し、母は、「本土の人に対してあまり良くない意味で使われる言葉と聞いたことがあるよ。」と答えた。なぜ、良くない意味で使われるのかそこではあまり深く考えなかった。しかし、今となっては、歴史が深く関わっているとわかる。

沖縄で過ごした四年間、毎年平和学習で沖縄戦について学んだ。実際に、沖縄戦を生き延びた方からもお話を聞く機会もあった。その中で、沖縄戦でアメリカ軍の侵攻はもちろんのことだが、日本兵が沖縄の方々を傷つけるような行動をとったことを知り、沖縄の方々は深く傷つき、憎しみの感情を抱いているのだと思った。また、戦後も沖縄は本土よりも長くアメリカの統治下に置かれたことを知った。理解が深まるうちに、ああ、日本はこんなことをしたのか、「ナイチャー」というという言葉のもつ重みがだんだんと分かってきたのだった。周りの子が、戦争を体験したおじいちゃん、おばあちゃんから直接話を聞き、骨の髄までわかって書く平和についての作文は私の心をチクチクと刺し、これは一生かかってもわかりきれない、わかったと言ってもはいけない領域にあるものとしていつしか私の心の中に染み付いた。そして、中学二年生になる春には神奈川へ戻ってきた。

神奈川では、平和学習はなく、このまま沖縄戦についてのあの生々しい記憶が薄れていくのではないかと。そう危機感を持った私は、去年、読書感想文で戦争についての本を選び、少しでも記憶に留めようと、必死に書いた。そして、その作文は市内で入賞してしまった。もちろん、自分の作文が認められたことは嬉しかった。しかし、「ナイチャー」の私が、沖縄戦について書いていいものか悩みながらも書いたものだったので、それ以上に素直に喜べない気持ちが膨れ上がった。ずっと悩んでいくうちに最近、一つの答えに辿り着いた。わかりきれないけれど、沖縄戦についての記憶を留め続けること、わかりきれないことをわかりきれないなりに考え続ける、それが私のやること、やるべきことだとそう思った。そして、今も考え続けて書いている、この作文で。

神奈川で沖縄戦について知る人はそう多くはないだろう。また、戦争について考える機会がかなり少ないと中学生の私には感じられる。「戦争で甚大な被害があった地域の子供だけが戦争について学び、平和への一歩を踏み出そうとすべきなのだろうか。」私は絶対に違うと思う。もちろん戦争について知ることは本当に辛い。沖縄で初めて、平和学習を受けたときは、涙が出そうほど辛く、夜は思い出して起きてしまうこともあった。しかし、平和の階段は、一人一人が戦争について自分ごととして知り、もう二度と戦争は起こさないぞという強い意志でしか登れない。でも、このままでは人々の記憶から戦争が薄れ同じ過ちを繰り返してしまうのではないかと不安に思う。だから、もっと学校などの教育の場で戦争について知る場を、考える場を作るべきだ。未来へは、戦争ではなく平和を必ず残したい。また、私も平和を繋ぐ役割ができないかと考えたことはある。しかし、ナイチャーで沖縄戦についてわかりきることのできない私が、周りの人に沖縄戦を伝えていいものか分からず神奈川に戻ってきて一年間、家族以外と話したことはない。この作文を書くこと自体、申し訳ない気持ちになる。また、戦争がなくなることを願うだけでは、祈るだけでは平和が訪れないことをロシアがウクライナを侵攻し、戦争が始まったことで思い知らされた。私が平和を祈り願ったことは無駄だったのだろうか。私は祈り願うこと以外に何ができたのだろうか。そんな疑問ばかりが私に残る。

「ナイチャー」、そう言われた日から始まった私の葛藤。これだけは、大人になっても歳をとっても考え続けていくことだと思っている、ずっと。そして、私は一人ではなく、この作文を読んでくれる人達をはじめとする世界中の一人一人と共に、平和の階段を登りたい。一人一人の意志が大きく、強くなるほど平和に近づくはずである。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

自分の沖縄戦や平和に対する悩みや葛藤を、作文にぶつけてみようと思ったことがきっかけです。答えがなく、何が正しいか分からないなかで、それを自分の中で最大限に考え、自分なりの考えを主張させていただきました。そして、沖縄と神奈川で平和学習について大きな温度差を感じたので、私にしか伝えられないこの感覚をできるだけ多くの方に、特に、教育現場に携わる方々へ届けたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

当たり前前の日常に向かって

愛知県 あま市立美和中学校 3年

飯田 春佳

何が起こったの。体に電気が流れたのかと考えてしまうほどの衝撃だった。

中学二年生の夏休み。制服に着替えようとしたとき、強い違和感を覚えた。久しぶりだからか。と、深く考えずにスカートを履いた瞬間、強い吐き気や鳥肌、体が震え始めた。急いでスカートを脱ぐと、体の力が抜け、座りこんでしまった。溢れてくる涙を拭いながら、そばにあった鏡で自分の全身を見つめた。成長していくにつれて、女性になっていく自分の体に嫌気がさし、鏡を割ってしまいそうになった。この日、僕はLGBTQ+という言葉を知り、自分のことが分からなくなってしまった。

このことを両親に話すことができなかった。話してしまうことによって、両親への裏切り、環境や友人関係に変化があるのではないかと感じてしまったから。そして、馬鹿にされたり、暴言を吐かれたりしてしまうことが怖かったから。我慢すれば幸せ。この言葉を自分に言い聞かせ、カミングアウトを避けてきた。

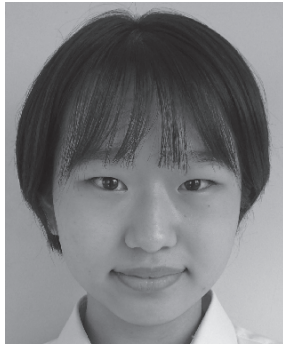
こんな僕を助けてくれたのは、スクールカウンセラーの先生だった。スカートが履けないこと、両親に話せないこと。僕が悩んでいるものを受けとめ、改善策を一緒に探してくれた。打ち明ける一歩が踏み出せない僕の背中を押してくれた。僕は、スカートが履けないことを両親に打ちあげた。涙が溢れて、今までの記憶が走馬灯のように駆け巡った。辛い、苦しい。心の声をはっきり聞こえた瞬間だった。話し終えた後、両親からの「話してくれてありがとう。」という一言で、僕は今までにないほどに安心し、声が枯れるほど泣き叫んだ。心なしか、涙が温かく感じた。

制服を変えてから初めて学校に登校した日。僕は友達の反応を見るのが怖くて、逃げ出してしまいそうになった。しかし、スクールカウンセラーの先生が背中を押してくれたこと、両親の温かい愛情を思い出し、踏み止まることができた。友達が登校し、僕を見た瞬間、「かっこいいじゃん。」と言った。僕は唾然とした。驚いたり、理由を聞いたりしてくると思ったから。それと同時に、心が温かくなったような気がした。嬉しい、安心した、などの気持ちが多く感じられた一日だった。僕は幸せ者だ。

このような経験から僕は、性別についての悩みの声をもっと聞いてほしいと思った。LGBTQ+の理解は増えているが、SNSでは、いじめ、悩み、中には「死にたい」という呟きも多くなっていると感じた。誰にも言えない悩みがどんどん重荷になっていき、「本当の自分」を見つけられなくなってしまったら、元も子もない。性別が変わろうと、一人の人間なのに、なぜ拒否をする人がいるのか。人間にとって失うことのできない権利、「人権」を奪ってしまうなんて最悪だと思う。苦しめていい理由なんて一つもない。周りの人が性に対する悩みを受けとめてほしい。僕達はこの問題と共に生きていく。LGBTQ+を「触れてはいけないもの」扱いから、「理解できるもの」に変えてほしいのが僕の主張だ。この先、「なんでそんな格好しているの。」と聞かれたときに、胸を張って「これが本当の自分だから。」と言えるような、世の中になってほしい。

この主張をどんな人に届けたいですか？

LGBTQ+を知らない人、理解しようとしている人。そして、同じ悩みを抱えている人にと届けたいです。悩みをもつことで、周りの反応に敏感になり、気分も落ち込んでしまうことがありました。誰かに助けてもらいたいけれど、それができない。そんな人に少しでも、一人ではないことを知ってほしいなと思いました。僕の主張を聞いてくださったときに、考えるきっかけにしてほしいと思います。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

地域で支え合う

岐阜県 各務原市立鶉沼中学校 3年

平田 菜々花

昨年の6月、同居していた祖母が亡くなった。仕事が忙しい両親の代わりが祖母だった。私にとってかけがえのない存在だ。14年間一緒に過ごしてきた祖母の死に、私はひどく落ち込んだ。玄関を開けて、「ただいま」と言っても返事はもうなく、家の中は静まり返っている。テストでいい点数を取っても、「ご褒美に、唐揚げこしらえてあげるでな」と言ってもらえない。祖母の死を実感し、寂しさは日に日に増していった。

そんな時、下校中に近所の人に言われた「おかえり」という一言が心に残った。何気ない挨拶だったが、まるで祖母に言われているように、暖かく、優しく、安心感があった。

学校で、「地域の人と積極的に挨拶をしましょう」と言われても、納得できない人は多いだろう。しかし、実はとても大事なことだ。挨拶は信頼関係を築き、支え合うための第1歩だからだ。

私の住む団地には様々な人がいる。物知りでなんでも教えてくれる人、会う度に「大きくなったねえ」と山でも見上げるように言う人、名前を間違えて、いつも私を「ななこちゃん」と呼ぶ人……。

I子さんは、散歩が好きなおばあさんだ。ある日の下校中、雨の中を傘もささずに歩いているところを見かけた。私はどうすればいいかわからず、そのまま通り過ぎた。I子さんから遠ざかるにつれ、私の心では、後悔が風船のように大きく膨らんでいった。

この出来事を母に話すと、
「I子さんには、頼れる家族がすぐ近くにいないから、私たちで見守れるといいね。まずは、毎日挨拶をすることが大事だよ。」

と言われた。私の頭は疑問でいっぱいになった。どう考えても、「挨拶」と「見守る」ことが関わり合っているとは思えなかったからだ。しかし、とにかく、I子さんに挨拶をすることにした。Iさんは私が声をかけると、「はーい」と言って微笑んでくれる。その顔に、私も自然と笑顔になる。そのうち、団地の人にも挨拶をするようになった。初めは、「おかえり」と言われると何だか恥ずかしかったが、「ただいま」と明るく返せるようになった。それから5年ほど経った今では、「最近見かけないな」「前より痩せてしまっているけれど、体調が悪いのかな」などと、変化にも気づけるようになった。母が言っていた、「挨拶」が「見守る」ことに繋がり、団地の人を自分の家族のように大切に思えるようになった。

ある日の朝、近所に住むY子さんから電話があった。Yさんは、声を震わせて
「ななちゃん、本当におめでとうね。おばさん、涙が出てきたわ。」

と言った。この日の新聞には、私が絵画コンテストで賞をいただいたことが掲載されていた。それを見て、すぐに電話をくれたのだ。私は、Y子さんの声がとても暖かく感じた。

今でも祖母を思い出すと、涙が出ることがある。けれども、団地の人が毎日声をかけてくれたり、一緒に喜んだりしてくれる。優しく見守り、近くで支えてくれている人がいる。

このように、地域の人との関わりは、互いを支えることに繋がる。安心して生活できる環境を創るだけでなく、災害時に助け合ったり、離れた場所に住む家族の心配を減らしたりもできる。私は初め、挨拶をすることが何に繋がるのかわかっていなかった。しかし、団地の人に声をかけてもらう中で、安心でき、家族のような信頼関係を築けることに気がついた。

私はこの団地が大好きだ。この各務原が大好きだ。これからも挨拶の輪を広げていくことで、より多くの人と支え合える地域を創っていきたい。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は小さい頃から、団地に住むお年寄りと関わる事が多く、それが当たり前になっていました。しかし現在、新型コロナウイルスの影響で祭りやスポーツ大会などが中止され、地域で交流する機会が少なくなっています。だからこそ、日頃の挨拶や会話を通して地域で支え合う大切さを、たくさんの人に伝えたいです。そして、私に温かく声をかけてくれたり、一緒に喜んでくれたりする団地の人たちに、この主張を通して感謝の気持ちを伝えたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

二度の出会い

島根県 出雲北陵中学校 3年

高橋 ゆかり

え、。

そう心の中でつぶやいてすぐに、声に出なくて良かった、と思いました。

それは、小学四年生の終わりのことでした。終了式を終えて、いつもより早く帰宅した私は、近所のコンビニへ昼食を買いに出かけました。当時は一人で買い物をすることに慣れていなくて、緊張したまま商品を選びレジに並びました。レジで会計をしてくださったその店員さんは、柔和な表情をしたとても優しい方でした。もしも親と来ていたらこの優しさに気づけなかったかもしれないと思うと、勇気を出して一人で来て良かったと感じました。その時でした。おつりの準備をしてくださっているその店員さんの片手をふと見ると指が全て無かったのです。

私の心は一転して、再び緊張に駆られました。はやる鼓動のまま家に帰り、先ほどの出来事について考えました。今まで、「人を見た目で判断してはいけない」と思ってきましたが、いざその場面になると私は「恐怖」を感じてしまいました。その日からしばらく、私はこの事ばかり考え続けていました。

それから月日は流れて、中学生になったある日のことです。学校から自転車で帰宅する途中で声をかけてくださった人がいました。狭い道を工事車両がふさいでいて、別の道へ迂回しようとしていた私に、「通るだわ」と言ってくださった工事現場のおじさん。私が自転車から降りると、重たいリュックを乗せたままの自転車を持ち上げて、工事車両の向こう側まで運んでくださいました。これまで何度も工事現場の近くを通ったことはありましたが、ここまで親切にされたのは初めてで驚くと共に、優しい方だなと温かい気持ちになりました。そしてすぐに、そのおじさんの片手には指が無いことに気がついたのです。とっさに、しまいこんでいた小学四年生の頃の記憶が蘇ってきました。しかし、恐怖などは全く感じず、私の心は温かいままでした。

恐怖心を感じなくなっていたのは、おじさんとの最初の出会いから、人の内面に目を向けることを意識するようになっていたからだと思います。

おじさんとの二度の出会いが私にくれたもの、それは「人を見た目で判断してはいけない」という確信です。

これは、誰もが当たり前のように知っていて、分かっていることかもしれませんが、多様性を表すダイバーシティという言葉が最近よく耳にします。見た目や考え方にとらわれず多様性を受け入れることが本来の社会のあるべき姿だという考えが当たり前になってきています。けれど、自分と違う見た目の方に突然出会った時、驚いてその見た目にはばかり気が向いてしまう方も少なくはないと思います。

実際に、私はそうでした。人と違う見た目を隠すことなく、当たり前の優しさで私に接してくださったおじさんは、当たり前のことを当たり前にする難しさと、その大切さを教えてくださいました。

私は、自分を人間的に成長させてくれたこの出会いにとっても感謝しています。また、月日が経った二度の出会いの両方で、親切に対応してくださったそのおじさんを尊敬しています。

これから先、私は、人を見た目で判断して心を閉ざしたり、差別したりするのではなく、当たり前のことを当たり前でできる人を目指します。

この主張をどんな人に届けたいですか？

二度の出会いと、この大会に出場するという経験をくださった「おじさん」に、この主張を届けたいです。私は今まで、この出会いのこと、学んだことを周囲の人に伝えていなくて、大切なものとして自分の胸だけに留めておこうと思っていました。しかし、自分の考えを言葉にして表現し、改めてこの出来事を振り返ったことで、「おじさん」に感謝を伝えたいという気持ちが強くなりました。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

平和な世界を…

広島県 広島県立広島中学校 2年

中島 千夏

崩れた家屋。煙を上げる民家。助けを求める人々。

今、ウクライナではロシアとウクライナが戦争をしています。私は、これまで生きてきた中で、「戦争」を身近に感じることはありませんでした。

しかし、北京冬季オリンピックの後から、ニュースや新聞では「ウクライナ」という5文字を見ない日はなく、ウクライナの街の衝撃的な映像が私の目に飛び込んできます。

そんなある日、いつものように夕食を食べていると、「今日ね、ウクライナで5,000人くらい亡くなったらしいよ。」

母の言葉に箸が止まりました。

「もう食糧がなくなってきとるけん、餓死なんだって。」

「が、餓死？」

「餓死」という言葉に、私は耳を疑いました。私の目の前の夕食は焼きそば、味噌汁と白米。デザートには真っ赤な苺。ウクライナの子どもたちは、私のように笑顔で食卓につくことができないのです。今の時代に餓死なんてあり得ない。戦争に全く関係のない住民がなぜ、こんな目に遭うのでしょうか。胸が詰まります。

なぜ、戦争をするのだろう。理由がどうであっても戦争はあってはならない。映像を見る度に、強い怒りがこみ上げてきます。私はもちろん戦争に反対です。ずっと平和な世の中であってほしいと強く強く願っています。その理由は、今私がこの世界に生きているからです。

母の母の母、つまり私の曾祖母は広島で被爆したと母が教えてくれました。ものすごい爆風で、家が吹き飛んでいったそうです。幸い、曾祖母は地下に入っていたので、無事でした。原爆投下後は、がれきの中にある瓶や鉄などを拾って生活する、本当に苦しいものだったそうです。曾祖母は、そのときのことをあまり家族にも話しませんでした。きっと、つらくて悲しくて、思い出したくもなかったのでしょう。どれだけ傷つき、そしてどれだけ必死に生き抜いてきたのかは、私には想像がつかみません。曾祖母が生き抜いていなければ、私はこの世界に生まれていなかったかもしれません。その私は、長崎に原爆が投下された、8月9日午前11時2分に生まれました。何か、運命的なものを感じています。だからこそ、曾祖母からつながるこの私の命を大切に思い、ありがたく感じ、毎日生活しています。

私は、まだ14歳。無力な中学生です。「どうすれば、ロシアやウクライナの人々を救えるのだろう。どうすれば世界中の人々が笑顔で暮らせるのだろう。」と日々考えています。今の私が、どうすれば世界のためになることができるのでしょうか。けんかはしないと、友達を大切にすることは、当たり前のことです。私は、過去の戦争について学び、自分の思いを文字に起こし表現すること、そして「戦争はいけない」と友達、学校、地域の人々に、自分の思いを発信し未来につなげることが大切だと考えています。世界平和を願い、自分自身の考えをしっかりと磨き、「戦争はいけない」というこの思いを周りの人に届けることから始めるのです。小さな一歩かもしれませんが、しかし私は、今ここに生かされている命を大切にしながら、確実に自分にできることを行動に移していこうと思っています。さらには、もっと広く発信できる力を付けたいと考えています。

街を歩くと、新緑の木々が揺れています。ピースサインをして自撮りをする学生たちに出会います。ピースサインは、昔は「戦争」という意味があったそうです。でも今は、ピースは平和のシンボルです。世界中の人々が心から笑ってピースサインができる日が早く訪れますように。いつかは平和な世界が訪れると信じて、私は前を向き、自分の一歩を踏み出します。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品は、ニュースや新聞などを見て、現在の世界で起こっている戦争に胸を痛め、「今自分にできることは何か」「どうすれば世界の人々が笑顔で暮らせるのか」と考え、「戦争はいけない」という思いを強く訴えたいと思い表現したものです。これからどんな未来が訪れるかわかりませんが、被爆4世、8月9日午前11時2分生まれの一人の広島人として、私は平和活動に自信をもち、私の言葉が力になると信じて行動していきたいと考えています。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

「雄飛」を「勇飛」に

鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属中学校 2年

川上 悠来

「えっ、三番。早い。」

新年度初日に掲示されたクラス分けの名簿は新鮮だった。それまで男子の後ろに女子の名前が続いていた学校名簿。今年度から男女混合名簿に移行した。私はそれまでどおり、名簿の真ん中あたりに狙いを定めて自分の名前を探したが見つからなかったのだ。無意識の習性とは怖い。それまでの男女別名簿に、違和感を抱いてこなかった自分の意識の低さを思い知ることになった。

1999年に「男女共同参画社会基本法」が施行されてから二十三年。未だに「男女平等を」と叫ばれているのはなぜか。それは実社会において男性と女性の間はまだ壁があるからで、男女平等が十分に実現されているとは言い難いからだろう。

その春休み、新聞の「都道府県版ジェンダー・ギャップ指数」についての記事に目が止まった。行政・経済・教育・政治の四分野における各都道府県の男女平等の度合いを偏差値にした分析結果が掲載されていた。私の住む鹿児島県は全国で唯一、四分野全てが三十台という最低レベルに位置する実態が浮き彫りになった。歴代の知事や市町村長に女性はいない。議員や経済界、学校トップの顔を見渡しても女性割合は少ない。打開策はなんだろう。男性優位の考えは、この土地の時代背景、風習がもたらしたものだろうか。そうであれば、人間性を育む教育に力を注ぐことこそ、時間はかかるが確実に変えられる気がする。今回の混合名簿導入のように、小さくとも出来ることから取り組み、環境を整えることは、ジェンダーギャップの改善につながるはずだ。

私は中学受験を経験し、その時に違和感を覚えたことを思い出した。ある学校の募集要項に、男子は寮に入れるが、女子は自宅通学に限る、と書かれていた。また、別の学校では男女の募集人数に違いがあり、女子の定員は男子の三分之一。学ぶ機会さえ平等ではなかったのだ。

このように、不平等な実態に直面した受験を経て、今の学校に入学した。しかし、今度は私の中にあった無意識の壁を痛感することになる。それは、家庭科の先生が男性という事実。私は、家庭科の先生は女性である、との固定観念にとらわれていた。女性から見た男性優位の景色を打ち破ることばかりに目を向けていたのかもしれない。私の中に潜んでいたこのジェンダーの気付きは、その後の私の考え方を変えた。物事を進める時、前例主義や当たり前だと思っていることを一度疑い、見つめ直す必要性を感じるようになった。これこそがジェンダー教育の成果だろうか。先生から一方的に教わるだけが教育ではない。感性を磨き、自ら課題を見つけ、考えて生み出す答えも生きた学びだ。

実は私には大きな野望がある。私の学校の七つの校訓の一つに英雄の「雄」に「飛ぶ」と書いて「雄飛」とある。「これまで培ったみなぎる力と強い意志を抱いて未来へ羽ばたこう」というエールだ。素晴らしい校訓だが、入学前から心に引っ掛かっていた。なぜ「雄」つまり「オス」という漢字が使われているのか。この引っ掛かりは、私だけの飛躍的な被害妄想だろうか。調べてみると、「メスがひれ伏し、オスが飛ぶ」の四字熟語「雌伏雄飛」から派生したものらしい。人に付き従いながら、活躍できる機会を待つ、の意味。雌鳥が雄鳥に従う様子が語源のようだ。大きな志を抱いて活躍することに、男子も女子もない。私は考えた。「勇気をもって飛び出そう」の造語、「勇飛」はどうだろう。

「校訓のオスが飛ぶ『雄飛』を勇ましく飛ぶ『勇飛』に変えませんか。」

今度、思い切って生徒総会でこう提案しようか。それとも生徒会の選挙演説でこの思いをぶつけてみようか。今、まさに「勇飛」しようか足踏みしている自分がいる。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私の住む鹿児島県内の公立中学校では、「ジェンダー平等」に向けて生徒主体で積極的に動き始めたことを新聞で知りました。私の通っている学校がこの波に乗れているだろうか、と疑問がわいたことがきっかけです。こんな時、この春から混合名簿が導入されました。社会の現状、学校、自身と徐々に視点を絞って私なりに行き着いた考えを述べてみようと思いました。

少年の主張全国大会努力賞受賞作品

【北海道・東北ブロック】

青森県 弘前市立東中学校 3年
工藤 百華 『私なりのウィズ・コロナ』

岩手県 田野畑村立田野畑中学校 2年
三上 結楽 『色を纏うように』

秋田県 仙北市立神代中学校 3年
高田 菜花 『風も月も、人も同じ』

山形県 鶴岡市立櫛引中学校 3年
渡部 香子 『伝えゆく戦争の痕跡』

福島県 小野町立小野中学校 3年
黒田 彩未 『子供が主張できる場所を』

【関東・甲信越静ブロック】

茨城県 筑西市立明野中学校 3年
堀江 乙花 『祖母の目になる』

群馬県 明照学園樹徳中学校 3年
渡辺 紗 『幸せの輪』

埼玉県 越谷市立中央中学校 3年
甲斐 迅翔 『万（よろず）の言葉の力』

千葉県 木更津市立岩根中学校 1年
針山 紗季 『吃音症の自分が思ったこと』

東京都 大田区立大森第八中学校 3年
向井 琴羽 『理解のある未来を信じて』

新潟県 胎内市立築地中学校 3年
阿部 彩実花 『夢に向かって』

長野県 長野県諏訪清陵高等学校附属中学校 3年
國枝 耕之介 『よりよい子育てのためにできること』

静岡県 浜松市立与進中学校 3年
影山 夏希 『意識と行動を変えた先に』

【中部・近畿ブロック】

富山県 入善町立入善中学校 1年
上原 沙弥夏 『今を生きるということ』

石川県 中能登町立中能登中学校 3年
中田 聡音 『これから出会うであろう人たちへ』

福井県 福井県立高志中学校 3年
松下 千佳 『無限の樹形図』

三重県 尾鷲市立尾鷲中学校 3年
北村 遥香 『大切な私のふるさと』

京都府 京都市立桂川中学校 3年
太田 真行 『だったらこうしてみたら？で夢は叶う』

大阪府 守口市立梶中学校 3年
足立 遥 『後悔する前に』

兵庫県 新温泉町立夢が丘中学校 3年
松井 瞬 『見た目問題』

奈良県 山添村立山添中学校 3年
植田 琴羽 『後悔する前に行動しよう』

和歌山県 和歌山県立桐蔭中学校 3年
園部 暢也 『あたたかな輪』

【中国・四国ブロック】

鳥取県 米子市立後藤ヶ丘中学校 3年
大田 星波 『思いやりの花を咲かせましょう』

岡山県 岡山県立倉敷天城中学校 3年
藤原 綾乃 『無知とは』

山口県 山陽小野田市立小野田中学校 2年
河本 芽郁 『未来へのバトンは私達に』

徳島県 阿南市立阿南中学校 2年
讃岐 優奈 『優しい言葉と行動は世界を救う』

香川県 東かがわ市立大川中学校 3年
山口 こゆき 『ちょっとしたことで』

愛媛県 愛南町立一本松中学校 3年
保岡 優奈 『「それはすてきなことだ」』

高知県 南国市立北陵中学校 3年
岡崎 由奈 『さあ、あなたは どうする？』

【九州ブロック】

福岡県 飯塚市立飯塚鎮西中学校 3年
宮城 ひかり 『世界に光を届けたい〜日系四世ルーツをたどって〜』

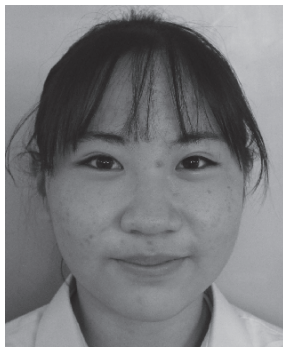
佐賀県 学校法人佐賀学園成穎中学校 3年
篠原 陽菜 『『普通』を変える新たな社会へ』

熊本県 上天草市立大矢野中学校 3年
千原 聖 『次は私の番』

大分県 九重町立ここのえ緑陽中学校 3年
小野 空 『音を楽しむ』

宮崎県 宮崎市立赤江中学校 3年
平屋 丈郎 『これからの防災をどう考えるべきか』

沖縄県 糸満市立西崎中学校 3年
大城 希亜良 『幸せになるチカラ』



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私なりのウィズ・コロナ

青森県 弘前市立東中学校 3年

工藤 百華

新型コロナウイルス感染拡大から三年近かった。新型コロナウイルスに影響を受けたものは数えられないほどある。その中でも私は、部活動で新型コロナウイルスの影響を多大に受けた。

剣道部に入部したころ、まだ青森県はあまり影響がなかった。だが、秋頃から弘前市でも感染者が増えだした。それと同時に部活にも影響が出てきた。防具をかぶると暑い。加えてマスクをしながらの練習のため、息苦しい。そしてさらに、プラスチック製の「マウスガード」を布マスクの上にするようになった。剣道を始めたばかりで慣れないうえに息苦しかった。やがて、青森県にも感染者が増加し、いくつかの大会が中止になっていった。その頃だった。剣道のルールも新型コロナ感染拡大により、少しずつ変化していったのは、例えば「つばぜり合い」。互いに竹刀とこぶしを押しつけ合い、タイミングがきたところでくずし、引き技などにつなげるための技だ。これを長時間行ったり、発声したりすると指導、その後に反則が入るというルールが追加された。仕方ない事だとは思った。だが、当時つばぜり合いからの引き技を得意にしていた私にとっては正直悔しかった。何で新型コロナウイルスに邪魔されなければいけないのだろう。私の必殺技なのに。それでも剣道は楽しかったし、一本決めた時の爽快感や自分が少しずつ強くなっていく達成感が感じられ好きだった。新型コロナウイルスの感染拡大は広まり続け、コロナによる剣道の新たなルールはそのままだ。そんな中、私は最後の大会を迎えた。うれしいことに、地区大会でベスト8入りし、県大会へと進むことができた。緊張の中、気合いを入れて試合場に立った。前に出て決めよう。次こそ！と思った瞬間、「止め！反則一回。」審判が叫んだ。頭が真っ白になった。反則の理由はつばぜり合いの後、相手は下がったのに私は下がらなかったからだった。これも新型コロナ感染拡大によって定められたルールだった。「反則は二回とったら一本技ありになる。落ちつけ。落ちつかないと！」しかし、その時の私は爆弾を抱えているようなものだった。「始め。」試合が再開された。「やばい。動かないと。」その時、右小手に「トン。」と重いものが当たった。「小手あり。」一本とられた。誰もが納得の一本だった。とり返さなければと必死だった。でも、タイムオーバーだった。ポッカリと胸に穴が空いたような気持ちだった。ただただ虚しさだけが残った。反則しなかったら…。新型コロナが広まらなかったら…。自分の未熟さのせいだとはわかっている。だけど、新型コロナ感染拡大のルールがなかったらもう少し戦えていたかもしれない。モヤモヤしたものがしばらく私の心に残った。

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたものは数えきれないほどあるだろう。剣道もその一つだった。しかし、それをどんなに嘆いてもどうにもならない。新たなルールのため今回の試合では反則をとってしまった。だけど、それがあってこそ、さらに剣道への思いは強くなった。これからは新たなルールにのっとり、自分の納得のいく一本を決める。その思いで、新型コロナウイルスと共存して励んでいきたい。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

今回、私は部活動で新型コロナウイルスの影響を多大に受けさせていただきました。ですが、新型コロナウイルスによる影響を受け入れてこれからの剣道を頑張ろうと決めました。これからは、今まで以上にコロナの影響を受けたものに会おうでしょう。その時、今回の経験をつなげ受け入れて自分のものにし、向き合って共存しながら成長していく人生にしたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

色を纏うように

岩手県 田野畑村立田野畑中学校 2年

三上 結楽

「いらっしやいませ！！」

椅子に座った私に、美容師さんはピンクのタオルを掛けた。特に何とも思わなかったが、私の声を聞いた瞬間、驚いた様子で言った。「ごめんねえ～男の子だったんだ。男の子ならピンクの色は嫌だよね～」

……何で？ 何で男の子ならピンクの色は嫌なんだ？

何で【男の子】は、ピンクを身に着けてはいけないのだろう。ピンクが好きな男の子だって当たり前にいるだろう。

何で色で【男】【女】をわかる必要があるんだ？？全員同じ色のタオルじゃ、何がダメなんだ？？

たった一枚のタオルの出来事に、私はずっと悩まされていた。

「(笑笑) お前、男のくせに、こういうキャラクター好きなのかよ (笑笑)」

思い返してみると、私たちも知らず知らずのうちに、こんな風に【男】【女】の括りで物事を判断していないだろうか。好きなものが好きで、何が悪いんだ。

モヤモヤは、募るばかりだった。

そんな時、「アンコンシャスバイアス」という言葉に出会った。アンコンシャスバイアスには、無意識の偏見・無意識の思い込みという意味がある。無意識の偏見・無意識の思い込みが起こる根底には、先入観や固定概念、「この人が言うのであれば、間違いない」と無意識に信じる心理、人数が多い方が正しいと思う集団心理が関係している。

美容師さんの行動をふり返ると、美容師さんに悪意がないことは、わかる。きっと【無意識の先入観】が起こり、あのような判断をしたのだろう。

そう言えば、私も

「えっ！？トラックの運転手は、男の人の仕事じゃないの！？」

「幼稚園の先生になれるのは、女の人だけでしょ？」

と、小さい頃は思っていた。

そうか！私たち人間は、無意識のうちに偏見を持ちやすい生き物なんだ！

だったら、“無意識の偏見”に打ち勝てる価値観を、私たちは持たなければ！

今、日本は多種多様な生き方を認め合おうという動きがある。だが、ふとした時に、自分の生き方の基準や価値観で【らしさ】を決めつけてしまう部分もあると思う。美容師さんのように、声が低いと【男の子】、声が高いと【女の子】と判断する時は、皆さんにもないだろうか。

何気なく言った一言で、

—どうせ、わかってこない—

と、心を傷付けているかもしれない。

私たちは、心を見せ合って生活することはできない。だが、ちょっとした認め合いで

—どうせ、わかってこない—

と、心を痛める人を救うことができるのではないだろうか。

もっと広く世の中を見てもいいのではないだろうか。

もっと自由に人を見てもいいのではないだろうか。

私には強く望むことがあります。それは、それぞれの個性を認め合い、大切にできる、多種多様な価値観が広がっていくことです。

様々な色を自由に纏うように。

私たち一人一人の生き方も、色彩豊かなものに……

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

男らしく女らしくじゃなく、自分らしさを大切にしたい。自分がこれまでの人生でした経験だけを元に「この人はこういう人間だ」と決めつけるような人にはなりたくない。もし今偏見やしさに苦しんでいる人がいるなら、「そんなに思い悩まなくていい。自分は自分のままでいい」と声をかけたい。一刻も早く思い込みや偏見で考える人を減らしたいと思う。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

風も月も、人も同じ

秋田県 仙北市立神代中学校 3年

高田 菜花

北投石。我が仙北市玉川温泉で採掘され、多くの人達を癒やす力をもっている不思議な石です。採掘できる場所は、世界にたった二カ所。玉川温泉と台湾の北投温泉です。台湾との不思議な縁を感じます。

私は台湾の生徒達とオンライン交流会をしました。お互いの国のクイズを出し合ったり、お菓子を贈り合ったり。その中で、台湾の美しい町並みや自然が私の目に飛び込んできました。私の心は躍りました。交流中、一緒に台湾の言葉を使う場面もありました。「ニイハオ」は「こんにちは」、「ハオチー」は、「おいしい」。離れていることを感じさせない台湾の仲間達の笑顔。私たちとそっくりな顔立ち。心の距離がどんどん縮まっていきました。

台湾に魅了された私は中国語に興味を持ち、ちょっとした会話を練習して、いつか旅行に行く日を夢に見ていました。そのためには、台湾の社会の状況、文化などをより深く学ぶ必要があります。私が楽しく学んでいた中国語はもちろん台湾でも通用しますが、「台湾華語」と呼ばれるものなど、台湾独自の言葉があることを知りました。「尊重彼此的文化、相遇。」お互いの文化を尊重しようという意味の中国語です。私は、この言葉を胸に刻みました。きっといつか、使う日がくると思います。

ウクライナとロシアの戦争の新聞記事を読んでいたときの事です。私は大きな衝撃を受けました。東アジアで戦争の火種となり得るほど、中国と台湾の関係が非常に危険な状態だということです。冷や水を浴びせられたような気持ちになりました。

私は中国も大好きです。食べ物、音楽、言語。南京の中国らしい町並み。張家界の幻想的な風景。張家界はたくさんの岩の壁が立ち並び、映画の舞台にもなりました。

その国しかない風景、自然の魅力、豊かな文化。これらの視点で国を見ると、戦争を起こそうなどと考えるほうが不思議です。

でも、今、世界から戦争は無くなっていません。その理由を探っていくと、こんな考え方に問題があるのではないかと思いはじめました。それは、「違い」にばかり目を向けて、一面的な見方になってしまうということです。

遠い国の情報は、自分の国と比較して違うところばかりが目につきます。それは、新鮮で魅力的な部分でもあります。でも、似ているところや通じ合うところを見つけることも意識してみてもはどうでしょうか。例えば、私たちと台湾の生徒達の笑顔のように。お菓子が大好き。きれいな風景も大好き。いつかお互いの国に行ってみたいと思う気持ち。似ているところはたくさんあります。

コロナウィルスの影響でマスクや手袋が不足していた中国へ日本から物資が送られました。そこに、ある漢詩の一節が添えられていました。「山川、域を異にすれども、風月、天を同じゅうす。」これは、「国土は異なろうとも風も月も同じ天の下でつながっている。」という意味です。この詩が中国の方々の心を打ったことに胸のすく思いでした。それと同時に「そうか、どの国の人も、風に吹かれ、月を仰ぐ同じ人間なんだ。国は関係なく、同じ人間同士助け合えばそれでいいんだ。」という当たり前すぎる事実気づかされました。

戦争が起きる原因は、一つではありません。戦争をなくすことは難しいかもしれませんが、でも、同じ人間です。美しい自然や文化を愛する人間のはずなのです。「違い」だけに目を向けてはいけません。お互いの国の似ているところや共通点を見出そうと努力すること。そうすれば、お互いの文化や国、人々を尊重する気持ちが育まれていくと思うのです。「尊重彼此的文化、相遇。」それが今、私たちにできることなのです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

現在、人と人、国と国との交流にはまだまだ制限があります。でも、それによって絆が失われたり、不要な争いが起きたりしては悲しすぎます。こんな状況下でも、お互いが分かり合おうと努力することは、私のような中学生にもできます。国籍や人種を問わず、人間がお互いを尊重し合って生きていくために、多様な視点で物事を捉え、思考する人間でありたいと思います。そして、自分のためだけでなく、多くの人を支えていくような人生を作り上げていくつもりです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

伝えゆく戦争の痕跡

山形県 鶴岡市立櫛引中学校 3年

渡部 香子

映画を見終えた後、私の頬に大粒の涙がこぼれていました。そして、幼いころの記憶がふとよみがえりました。

「香子、この写真はね、おじいちゃんとおばあちゃんが子供の頃の写真なんだよ。」そこには、軍人さんと戦闘機が写っていました。

他にも十歳の男の子が亡くなったことを伝える手紙も見せてもらいました。まだ幼かった私は、祖父母が伝えたかったことがよく分からず、軍人さんを「かっこいいね。」と無邪気に答えただけでした。

その映画は、太平洋戦争末期の沖縄戦を生き抜く家族の様子を描いた「さとうきび畑の唄」という作品です。平和学習の一環として、学年全員で鑑賞しました。それから一年近く経つ今も、映画の内容はもちろん、見終わった時の気持ちやその時の様子が鮮明に思い出されます。

そして、祖父母の話思い出したことをきっかけに私は改めて、家族から戦争について聞いてみました。私の曾祖父も戦場で何度も命の危機を感じた軍人の一人でした。仲間が次々と戦場に倒れながらも死に物狂いで生き抜いたそうです。祖父は、終戦を満州国で迎えました。戦後の混乱を避けるため、子供だった祖父は数年、中国に置いて行かれたそうです。もしあの時、祖父を迎えに行く人がいなければ私はここにいなかったでしょう。また、映画を見た時に思い出した、幼いころの記憶は戦争が他人事ではなく、身近なものなのだとして強く訴えられているように感じ、胸が締め付けられる思いでした。そして、当時を知らせてくれる写真や手紙を残し、幼い私になぜ祖父母がこれらを見せてくれたのか、その意味がはっきりと分かりました。私たちのような戦争を知らない若い世代に、きっと祖父母は戦争のむごさや繰り返してはいけないということを伝えたかったのです。

私は今年の七月、私の住む櫛引地域の戦没者追悼式に参加しました。遺族会の方々の前で平和へのメッセージを発表するためです。祖父母の思いを受け継ぎ、戦争を繰り返さないという強いメッセージを発信しました。追悼式終了後、私は多くの方に声をかけられました。

「あの時から、かなりの時間が過ぎたんだね。それでも当時を忘れることはないし、あなたの平和へのメッセージを聴けて本当に嬉しかったよ。」

「どうかこれからも、戦争を許さないという強い気持ちを持ち続けてくださいね。」

私にとってこの経験は大きなものとなりました。戦争に関わる表面的な記録だけでなく、身の回りに残された戦争の痕跡や戦時中の気持ちも伝えられる人になりたいと、決心した瞬間でした。

世界を見渡すと、今も戦場で苦しんでいる人が大勢います。ロシアとウクライナで一般人が犠牲になった事実を毎日のように報道で知る度に、戦争の悲惨さに胸が痛みます。このようなことが日常にない世界を私たち若い世代がつくらなくてはなりません。

なぜあの「さとうきび畑の唄」は涙を誘ったのでしょうか。私は戦争によって本人の意思に反して多くのものが奪われたからだと思います。だから私は戦争に強く反対します。映画を見た多くの人が泣いたように、人類共通の大切なものが奪われる怖さをすべての人が心の奥底で感じるのだと思います。理不尽な戦争を進めている人たちにもその気持ちが必要は必ずあります。しかし、彼らはその気持ちが隠れてしまっているのではないのでしょうか。世界中の人々の心の奥底にある、理不尽に奪われることへの恐れや怒りを引き出せるよう、戦争の痕跡を伝えられる人になりたいです。

今、ここに生きるすべての人々は先人の犠牲の上にこの生活があることを決して忘れてはいけません。身の回りの戦争の痕跡に触れたり、戦時中の気持ちに思いを巡らせたりといった小さなことが、戦争のない平和な世界をつくるという大きな夢を叶えるきっかけになると、私は信じています。戦争は決して許されるものではありません。私の知る戦争の痕跡を伝え続け、多くの人の心を動かしたいです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

学校での平和学習を経て、地域の戦没者追悼式に参加しないかというお話をいただきました。このときの経験から、私の知る戦争の痕跡をより多くの人に伝えたいという強い気持ちが生まれました。身の回りに残された戦争の痕跡を知ることは、戦争が許されるものではないという今を生きるすべての人々の心にある気持ちを引き出す力がある。だから戦争の痕跡に触れ、そして、次に伝えてほしい。そう思い、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

子供が主張できる場所を

福島県 小野町立小野中学校 3年

黒田 彩未

皆が生きやすい社会を作るには、どうする必要があるでしょうか。不平等をなくすことや、環境を改善することなど、すべきことはたくさんあります。その中でも私が特に大切だと思うのは、誰もが自由に主張できる場所を作ることです。

「誰もが」ということは、大人だけでなく小さな子供にも主張する機会を与えるということです。皆が納得して物事を決めるためには、私は子供の意見にも耳を傾ける必要があると思います。

私がこのように考えたきっかけは、国語の授業で小学生のスポーツの全国大会の廃止について作文を書いたことです。今年、小学生の柔道の全国大会が廃止されました。過度な減量と極端な勝利至上主義に疑問の声が上がったことが背景にあります。そのことについて、賛成か反対かの立場で意見を書くことになりました。

私は、全国大会の廃止に賛成の立場でした。成長期の子供たちに減量やきつい練習をさせ、時に罵声を浴びせてまで勝たせることに価値はあるのかと思ったからです。あくまでスポーツは楽しむもので、勝つためだけに試合のマナーを破ったり、子供を不幸にさせたりする必要はないと思いました。

しかし、今まで行ってきた大会を急に廃止してよかったのでしょうか。子供たちのための大会廃止だったことはよく分かりますが、果たして本当に子供たちのためになっていたのでしょうか。きっかけは勝利至上主義が過熱したことで、勝利にこだわっていたのは子供たちでしょうか。こだわっていたのは指導者や保護者だと思います。大人の勝利に対する思いが強すぎて、子供たちにつらい思いをさせ、ついには全国大会の廃止という、一番つらい結果につながってしまいました。

どうすればよかったのでしょうか。例えばルールを設けることが解決策の一つです。指導者は協会が定める資格を持つ者に限定する。大会で罵声を浴びせる者のための罰則を設ける。こうした対策をすれば、練習のあり方や大会の様子も変わってくるのではないのでしょうか。それでも守れない人が出た場合、そのときに改めて大会を廃止すればよいのではないかと、それが子供の思いに寄り添うということなのではないかと思いました。

子供たちが不幸にならないためにも、極端な勝利至上主義に走った大会を実施するべきではありません。しかし、全国大会に向けて頑張ってきた子供たちの目標を急に奪うのはかわいそうです。急に廃止するのではなく、まずは子供を第一に対策を取ることが大切なのではないかと思いました。

このような文章を書きながら、私は大人たちだけで物事を進めることの身勝手さに気づきました。子供たちのためを思ってやったことが、実は子供たちのためになっていなかったということは、今までにもたくさんあったのだろうと思います。子供たちが関わることなのだから、まずは子供たちの意見を尊重することが大切だと気づきました。そして、その意見を自由に言える環境を整えることが何より大切なのではないかと思いました。

よりよい社会を作っていくために、私たちは建設的な意見をたくさん言い続ける必要があります。また、たくさんの自分とは異なる意見をしっかりと聞く必要があります。そのときに、子供たちが考えた意見を主張できる場所があり、大人たちが真剣に子供たちの意見に耳を傾ける環境になってほしいです。そうすれば、どんな出来事が起きたとしても、大人も子供も皆が納得できる解決策が見つかるに違いありません。それが、誰もが生きやすい、よりよい社会の発展へとつながっていくのだらうと思います。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品を通して、私は自分の意見を主張することにもっと自信を持っていいんだと気づきました。たくさんの物事に疑問を持ち、その思いを正直に伝えることができる人になりたいです。また、一人一人の話にしっかりと耳をかたむけ、真剣に考えられる人になりたいです。そして、大人になったら、大人も子供も皆が自由に意見を言える場所を、私が作っていきたいと思いました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

祖母の目になる

茨城県 筑西市立明野中学校 3年

堀江 乙花

「おとか、見てごらん。きれいな空だね。」

私は、幼い頃、そんな会話をしながら手をつないで歩く、祖母との散歩が大好きでした。しかし、あの頃のようなきれいな景色が祖母の瞳に映ることはありません。

私の祖母は網膜色素変性症という目の病気を患っています。網膜色素変性症とは、暗いところではものが見えにくく、だんだんと視力が低下していく進行性の病気です。祖母の目は、今ほとんど見えていません。

祖母の生活には苦勞がつきまといます。自宅では、これまで積み重ねてきた経験と感覚で必要最低限の生活を送ることができていますが、どうしても人より時間がかかってしまいます。部屋の移動一つをとっても、ものが落ちていたら大きな怪我につながる恐れがあるので、必要以上に気を遣う必要があります。

外出にいたっては困難と危険の連続です。慣れている自宅とは勝手に違うため、誰かの支えなしに行動することは困難です。補助についてくれる人に手を引いてもらい、段差があれば声を掛けてもらい、階段なら一段一段上り下りするので、時間もかかります。

そうすると、人にぶつかってしまうことが度々ありました。一見すると、祖母は健常者のように見えるので、周りを歩く人によってはいぶかしげに見られることもありました。見た目に差がないと、事情をなかなか理解してもらえないこともあり大変です。

目が不自由であることを理由に、祖母は外出を断念してしまうことがあります。祖母の気持ちを思うと、私は悲しくなります。もっと気兼ねなく、祖母が出かけられる場所が増えていくといいのに、と。そう思わずにはられません。

ただ、最近は町のいたるところで「バリアフリー」を目にするようになりました。聞いたことがある人も多い「バリアフリー」とは、文字通り「バリア」、つまり「障壁」を取り除き、生活しやすくすることを意味します。これによって、障害をもつ人や高齢の方の生活が改善されるのです。

祖母の病気をきっかけに、私は様々なバリアフリーについて調べました。駅構内を歩く人のための点字ブロックは、ホーム側と線路側がわかるように「内方線」が付けられています。車椅子を利用する人や階段を上ることが難しい人のために、多くの店でスロープが付けられるようになりました。食品にもバリアフリーがあり、牛乳パックは他の飲み物と区別ができるよう、容器の上部に「切欠き」というくぼみがついています。

調べていくとたくさんのバリアフリーがありました。このようにバリアフリーが社会に増えてきているようでも、それでも祖母の生活はまだまだ不便なことが多いように思えます。祖母との外出で「こんなところが祖母にとっては不便じゃないか。」「もっとこうだったらいいのに。」と思ったのは、一度や二度ではありません。きっと祖母と同じような境遇にいる人はいるはず。祖母と同じでなくても、世の中の何かに対して不便を感じている人もいるはず。誰にとってももっと生きやすい世の中になってほしいのですが……。

祖母は、いつも私に「ごめんね。ありがとう。」と言ってくれます。その顔はとても申し訳なさそうで、なんだがやるせない気持ちになります。体が不自由な人を支えることは、当たり前のことだと、私は思っています。

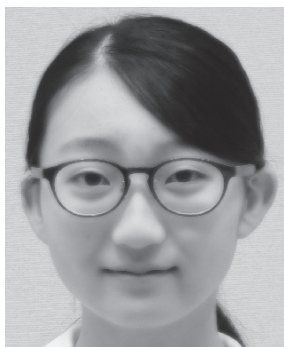
皆さんにお願いします。世の中に不便を感じている人、不自由な思いをしている人を見かけたら、手を差し伸べてもらえないでしょうか。そのうちの一人がきっと私の祖母です。誰もが生きやすい世の中への一番の近道は、世の中の人々が支え合って生きていくことだと思います。

幼い頃、私の手を引いて一緒に歩いてくれた祖母。今は、私が祖母の目となり、隣りを歩き、見える景色を伝えています。「おばあちゃん、きれいな空だよ。」

私が手を引いて。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書くにあたり、はじめに浮かんだのが祖母の顔でした。私の成長とともに、祖母の病気も進行し、一緒に出かけることは格段に減りました。しかし、本当はもっと出かけたり、やりたいことがあったりするのではないかと思い、書いたのがこの作品です。祖母の楽しそうな顔をもっと見たいという思いもありました。この主張を聞いた人に、「自分はこの『おばあちゃん』のような人に何が出来るだろう」と考えてもらえるきっかけになると嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

幸せの輪

群馬県 明照学園樹徳中学校 3年

渡辺 紗

十万円を手にしたらあなたはどうしますか。私は十万円を受け取りました。特別給付金です。「使い道は自由、ただし、本当に必要なことに使ってほしい。」と母から言われました。一瞬欲しかったマンガ本が頭をよぎりました。

しかし、「本当に必要なもの」はそれではありません。このお金の有効な使い道を数日間考えました。その結果、私は未来を担いながらも逆境にいる子どもたちに寄付することに決めました。「フードバンク」と「チャイルドスポンサー」です。

「フードバンク」とは、企業や個人などが施設や団体、困窮世帯に食品を提供する仕組みです。フードバンクの要望を問い合わせ、栄養面や賞味期限、価格などを考慮しながら買い出しをしました。一番大切にすることは、自分が食べたいと思う食品を選ぶことでした。受け取る人たちの笑顔を想像しながらの買い出しは、非常に充実していました。購入品を桐生市役所に持っていくと、職員の方に「ありがとうございます。とても助かります。」と言われ、誰かのために直接支援できる喜びを実感しました。

「チャイルドスポンサー」とは、経済が不安定な国や地域に住む人々の支援や、彼らを取り巻く環境を改善することを目的とした制度です。スポンサーの申請後、どんな子の担当になるのかワクワクしながら待っていると、女の子の顔写真が添えられた返信が届きました。タンザニアに住む八歳のパウリナヤコボちゃんという子でした。早速、彼女の住む町を地図で調べました。この地域に住む人々の80%以上が一日一ドル以下の生活で、年間を通じて十分な食料が得られないそうです。私は毎月定額を寄付しています。とは言え彼女たちが簡単に貧困から解放されるわけではありません。しかし、ささやかではあれ、寄付の継続が彼女たちの境遇をきっと改善させるはずだ、と私は信じています。チャイルドスポンサーはフードバンクとは異なり、自分が選んだ物を直接届ける制度ではありません。しかし、写真や動画などで定期的に相手の情報を受け取ることで、私の思いが確実に届いていることを実感できます。行ったことがない国、会ったことがない人々に、遠く離れている私にもできることがあるという幸せを味わっています。

これらの寄付活動を今後も継続していくためにはどうしたらよいか、家族で話し合いました。そこで決めたことは次の二つです。まず、私のお小遣いやお年玉の一部を寄付にあてること、そして家族にも協力を仰ぎ、セール品やクーポンを利用した際の定価との差額から寄付金を捻出すること、です。

寄付活動を公表することに対して、「偽善者だ」とか「匿名で行うべきだ」と否定的な意見を述べる人もいます。特に日本人は「不言実行」を美德とする感覚が根強く残っています。しかし、私はそうは思いません。人を助けることをあえて公表し、みんなに知っていただくことは重要なことです。なぜなら、ある人の慈善活動の公表が他の人の慈善活動への参加を促すこともあるからです。実際、私のヘアドネーションの経験を話したことがきっかけで、友達がヘアドネーションに挑戦すると言ってくれたのです。うれしかったです。こんな喜びもあるということを知りました。幸せの輪が広がった瞬間でした。実は、自分の労力や時間、お金などのコストを負いながら、他者に利益を与える利他的行動をとると、自分の幸福度が上がるということがわかってきています。私たち一人一人が、無理のないできる範囲の利他的行動を取ることで、周りが幸せになるとともに自分も幸せになれるのです。その「幸せの輪」があちこちで広がっていくことで、社会全体が幸せで満ち溢れるならば、こんなすばらしいことはありません。

みなさん、ぜひその一歩を一緒に踏み出し、「幸せの輪」を広げてみませんか。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

母の献血活動に刺激され、私も誰かのために何かできることはないかと考え、小学5年生の時と中学2年生の時の2度ヘアドネーションを行いました。切った髪の毛を受取った時、この髪の毛が誰かの役に立つと思うと何とも言えない幸せな気持ちになりました。この時の幸せな気持ちをまた味わいたいと思い、母から受け取ったお金を子供たちのために使おう、と思ったことがきっかけです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

万（よろず）の言葉の力

埼玉県 越谷市立中央中学校 3年

甲斐 迅翔

「思い出させてくれて、ありがとう。」

背が高く、格好の良いスーパースターにそう言われて、僕はすごくびっくりした。その人の名は、プロ野球オリックス・バファローズの投手、山崎福也さん。当時、小学校4年生だった僕が、生まれて初めて出会ったプロスポーツ選手だ。僕が書いた読書感想文の表彰式にゲストとして来てくれた福也さんは、僕の書いた文を読んで、そう言ってくれたのだ。いつもテレビで見ている雲の上の人のような存在。でもそんな人が、僕のような子どもに向かって、とてもうれしそうに話してくれた。福也さんは、小児脳腫瘍を発症し、それを克服してプロ野球選手になったすごい人だ。握手をした手は、とても大きくて温かかった。僕の書いた言葉の力が、福也さんを笑顔にしてくれ、結びつけてくれたのだと思うとうれしかった。表彰式で会っただけの福也さんが、1年後の野球雑誌のインタビューに僕の作文の事を話してくれて、それが記事になっていたことを知った時には、さらにびっくりした。僕の書いた言葉が、福也さんの心に残っていたのだとわかり、とてもうれしかった。文を書くことに自信を持つことができたのと同時に、言葉のもつ力の偉大さに気付いた。

言葉には、人を動かす力がある。いつまでも心に残って、人を励まし、支え続ける力もある。がんばる力を引き出したり、あきらめないで、もう一步、前へ進もうとしたりする力もある。その反面、人の心を深く傷付けたり、ずっと心に残って攻撃され続けているような痛みを感じたりすることもある。生きる気力すら、奪ってしまう力もある。言葉は諸刃の剣だ。使い方を間違えると、傷付けてしまうこともある。例え同じ言葉を使ったとしても、相手の考えや気持ちによっては、深く傷付けてしまうこともあるから、口に出す前によく考え、慎重に言葉を選んでいかなければならない。

僕も学校で、友達の言葉に心を動かされたことがある。それは、僕が大切な家族を亡くしたばかりの時の話だ。その頃の僕は、人の生死について、とても敏感になっていた。休み時間に、いつものようにふざけあっていたクラスメイトが言った「死ねよ。」とか「ぶっ殺してやる。」などの言葉に、本気じゃないとわかっていても、聞いているだけで苦しくて暗い気持ちになった。そんな時、「甲斐さんは、おじいさんが亡くなって悲しい気持ちなんだから、生死に関わるような事を言わないで。」と注意してくれた人がいた。うれしかった。マイナスに向かっていく僕の心をプラスに向けてくれたその言葉に、温かい優しさを感じた。誰かの心を思いやる言葉も、人の心を動かしてくれるのだと知った。

言葉の力を考えた時、ふと「言葉」という文字の語源が気になった。調べてみると、面白いことがわかった。「言葉」の始まりは、奈良時代で、当時は「こと」と言われていたそうだ。それを、平安時代に紀貫之が、「やまとうたは 人の心を種として よろづのことの葉とぞなれりける」と詠み、そこから「言葉」という字が定着したと言われているそうだ。人の心を種として、言葉が葉っぱのように生まれていく様子を表しているのだとしたら、それこそが人の思いを表し、言葉に力を与えているのではないだろうか。僕は、まだたくさんの言葉を知らない。本を読み、学び、調べ、考えていくことで、よろずの言葉を使い、人の心を動かす文が書けるようになりたい。人を温かく、優しい気持ちにさせる言葉を使えるようになりたい。言葉の力を正しく理解し、使える大人になりたいと思う。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、この作品に書いた出来事をきっかけに、言葉について深く考えるようになりました。今、社会は多様性を認め合う共生社会の実現が求められています。様々な状況、考えを持つ共生社会を生きる人々の心と心をつなぐものは、やはり相手を思いやる「言葉」であると私は考えます。相手の言葉にしっかりと耳を傾け、思いを理解し、相手の心に響く「万の言葉の力」を使える大人になれるように、これからも努力していきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

吃音症の自分が思ったこと

千葉県 木更津市立岩根中学校 1年

針山 紗季

吃音症とは何か知っているだろうか。吃音症の症状は人それぞれだが、話している途中で詰まったり、なめらかに言えない、言えなくて何回も連呼してしまうということがある。吃音症は発声障害だ。

私は、小さい頃から吃音症を患っている。私は、あ行が言いにくい。あ行が頭の文字にあると詰まったり連呼してしまう。また、吃音症を患っているということで、学校生活でも困ることが、ほぼ毎日ある。発表するとき、人前で話すとき、詰まってしまう、逆にみんなを困らせてしまう。

改めて吃音症だと実感したのは小学五年生のときだ。私は小学五年生の春、大阪府の八尾市というところから、千葉県の木更津市に引っ越してきた。ちょうどコロナ禍で休校の時期だった。やがて、六月になると学校が始まり、委員会を選ぶとき私は放送委員を選んだ。確か、学級内でうまく人数が合わなかったことと、まだ吃音症を発症していなかったことから、自分で進んでこの委員会を選んだ。放送委員の仕事の一つに、昼のコーナーで話す文の原稿をつくるというものがある。私はあ行が言いにくい、五年生のときには気付いていなかった。だから、あ行が頭文字になる「明るい」という単語から始まる文を原稿に書いていた。コーナーが始まり、読もうとする。だが、声が出なかった。何度も何度も読もうとするのだが、最初の「あ」が声にならなかった。泣きそうになりながら先輩に助けを求め、そのあとの放送は無事に終わった。このとき、人前で話すのが苦手になった。言葉が詰まる放送なんて、誰も聞きたくない、と放送委員に入ったことを後悔した。言葉が詰まると、自分が嫌になっていった。そのとき、普通に話せる人が羨ましく感じた。私がもし、吃音症を患っていなければ、もっと充実した毎日になっていたのだろう、と考えもした。吃音症を患っている自分に自信がなかった。だから「私じゃなくても誰かがやってくれるのなら、そっちのほうがいい。やってみようけれど、迷惑になったり困らせてしまうだけだし。」と遠慮してしまうときもあった。けれども、やらないといけないうちもある。それは、小学六年生のとき。私は、運動会で応援合戦の振り付け決めや、前のほうで呼びかけたりする応援係になった。応援係の仕事の一つに、一から六年生に振り付けを教えるということがある。私は正直、嫌だった。上手に教えられるかわからないし、不安で心がいっぱいだった。私は、一年生の担当になった。一年生とは、ペア活動で交流がある。だから、緊張も少しは解けていた。だが、私は吃音症で上手に話せないときがたびたびあった。それでも、一年生は一生懸命に聞いて、振り付けも覚えてくれた。そのことが本当に嬉しく、自信にも繋がった。

私は、過去にこのようなことを言われたことがある。詰まってしまうと上手に話せないときに、「何!? ちゃんと行って! 聞き取りづらい!」

と、ショックだった。そして何より、自分が嫌いになった。相手にも、嫌な思いをさせているかもしれないとわかったからだ。それと同時に私は、「吃音症」というものを知ってほしい。世の中には、吃音症を知らない人が、まだ、たくさんいると思う。吃音症の辛さが知られていないために、私と同じ思いをしている人が少なくはないはずだ。そして、苦しい思いをしていたり、困っていたら、助けてあげてほしい。吃音症を患っている人でも、話すときはその人なりに頑張っているのだ。私が言葉が出ずに泣きそうなのを助けてくれた先輩、そのときに救われた思いは今も忘れない。

私は、吃音症の自分が嫌いだ。やりたいことがあっても、どこか遠慮してしまう。何度、普通に話せたら、と思ったことか。けれども、全て吃音症のせいにして、何もやらないのはもったいない。人生を損してしまう。最近、このことに気が付いた。応援練習のときの小学一年生が私に与えてくれた自信。その自信によって、中学校でも学年の評議会に参加した。吃音症の治し方は、今現在もわかっていない。ただ、大人になるにつれて治っていく人が多いとのことだ。私も実際、昔より症状は断然良くなってきており、詰まることは少なくなった。吃音症の治し方はわからないけど、吃音症との向き合い方は少しわかった気がする。そして、それを乗り越えるために、この文章を書き、前向きに今ここに立っている。

この主張をどんな人に届けたいですか？

この主張は、まだ吃音症を知らない人と吃音症を患っており、苦しい思いをしたことがある、またはしている人に届けたいです。まだ吃音症を知らない人には、まず「吃音症」というものを知ってほしいです。そして、その辛さや苦しみを知ってもらい、私と同じ思いをしている人がこの先、少しでも少なくなっていけばいいと思います。吃音症を患っており、苦しい思いをしたことがある人は、私のこの主張を聞いて、共感してくれたり、私の行動で前向きになってくれる人が1人でも多くいてくれると嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

理解のある未来を信じて

東京都 大田区立大森第八中学校 3年

向井 琴羽

「きもっ」

町を歩いていた時のことです。私の隣で、一人の男の子は言いました。その言葉は目の前にいるゲイカップルに向け、はかれた言葉でした。

LGBT。この言葉に興味を持ったのは、一年前の春頃でした。私の大好きなユーチューバーの方が、同性の方とお付き合いをしているという報告動画をアップロードしたのです。その日から私はLGBTについて調べるようになりました。その知識がつく中で私の目に留まったのは、LGBTについての誹謗中傷でした。「キモい」「理解できない」「不自然だ」など、数々の悪意にまみれた言葉がインターネット上に書きこまれていました。私はそれを見て、言葉が出ませんでした。LGBTに該当している人達は、みんな自分の性と向き合い、やっとの思いで自分の性のあり方について答えを出したのです。その努力の結晶がその人の性なのです。そのどこが気持ち悪いのですか？同性を好きになる。そのどこが不自然ですか？愛の形は様々です。二十歳年上を好きになる人もいれば、同性を好きになる人もいます。人の性を、心を傷つけることは、その人の存在を、あり方を否定するのと同じです。それがどれほどつらく、悲しいことか、改めて考え、実感すべきだと私は思います。

電通ダイバーシティラボのアンケート調査によると、LGBTに該当する人は、2012年は5.2パーセント、2015年は7.6パーセント、2018年は8.9パーセントと年々増えています。では、なぜ増加傾向にあるのでしょうか。一つの要因に、人々のLGBTに対する理解が深まってきたということがあてはまると思います。最近では、ガールズラブ、ボーイズラブなどの漫画が増えており、腐女子、腐男子と呼ばれる人も増えています。ですが、まだまだ理解が足りていないのも現状です。他人からの心ない言葉は人を殺します。理解がない人達が性の多様性を批判し、侮辱し、一人一人の尊い命をうばう原因を創りあげているのです。

先程の男の子はなぜキモいと言ったのでしょうか。原因は学校などで考えを深め、意見を交換する機会が少なかったこと、彼の家族や友人も批判的な考えを持っていたため、正しい理解を伝える人がいなかったことにあると思います。こういった問題を解決するにはLGBTに理解を求める人々が、積極的に声を上げる必要があります。自分自身の言葉で伝えることが、正しい理解を生む、きっかけになるでしょう。

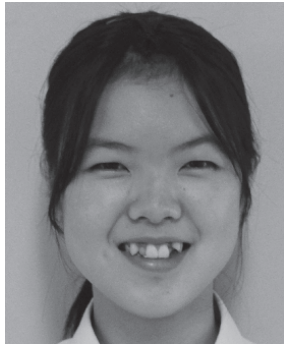
私はまだ気がついていないだけで、LGBTに該当するのかもしれない。それはみなさんも一緒です。決して他人事ではなく、誰しにも起こり得ることです。今、皆さんの身近にある事実です。

私はみなさんに、少しでもLGBTの現状を知ってほしいのです。どれだけの人が言葉によって傷つけられ、否定され、涙を流してきたことか。想像するだけで胸が痛みます。その人の性のあり方を否定しないでほしい。私が今、この話を通して伝えたいことはそれだけです。一人一人が心がけるだけで、現状を変える大きな力になることを知っています。そして、みなさんが、その第一歩を踏み出してくれることを信じています。

今、性の悩みを抱えている人へ。私はあなたの性を認めます。決して否定しません。そして私のような考えを持つ人はあなたの側にいます。一人で抱えこまず、誰かに話してみてください。家族でも、友達でも。インターネットや電話を利用する方法もあります。どうかあなたに向けられた言葉の脅威に負けないでください。理解のある未来を信じて。私はあなたを応援しています。

この主張をどんな人に届けたいですか？

性の多様性を深く知らない人、性自認に悩む人に届けたいと思います。無知により気づかないうちに人を傷つけてしまうこともあります。深く知ることでそのようなことを減らすきっかけになれば嬉しいです。一人で悩んでいる人は抱え込まず、理解してくれる人がいるということを知ってほしいと思います。世の中が互いを尊重し、認め合えるようになることを願っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

夢に向かって

新潟県 胎内市立築地中学校 3年

阿部 彩実花

あなたには将来の夢がありますか？あんな職業に就きたい、幸せな家庭を持ちたい、優しくてカッコいい大人になりたい……。このように就きたい職業や生活の仕方、なりたい人物像など思い描くものは様々です。そして、たとえなんとなくでも、夢を持っているとしたら、その「きっかけ」というものが必ずあります。また、その夢に向かって今どのように生活するのは人それぞれで、多様な考え方があるでしょう。

私には小さい頃からの夢があります。その夢のために今やるべきことは何なのか考えてみました。

私が四歳のときです。ある日高熱が続き、病院に行ったところ、腎臓の病気にかかったことが分かりました。それが原因で入退院を繰り返し、当時は月に一度、検査のために通院していました。そんな生活の中で私はある人に憧れをもちました。それは私を担当してくださった主治医の先生です。その先生は私が診察室に入ると、いつも笑顔で迎えてくださり、優しく、丁寧な口調で接してくださいました。先生と話すとき安心するし、元気が出て、私も自然と笑顔になりました。今思い返してみると、医師という仕事はとても大変で疲れているはずなのに、私に疲れを一つも感じさせず、話すだけで元気を与えられることの偉大さを感じます。小学二年生の頃に手術を受け、病気が完治した今でも、当時のことを思い出して「先生に会いたい」と思うことがあります。それほど、その先生のこと大好きになりました。こうしていくうちに単なる憧れが、いつの間にか、私も将来この職業に就きたい、こんな医師になりたいという大切な夢になりました。

私が医師になりたいと思ったきっかけはこれだけではありません。私の弟は、生まれたあとに脳に障害があることが分かり、この先、車椅子生活になるかもしれないと言われていました。そのことに私の母は自分を責めるほどのショックを受けていました。それでも母が前向きになれたのは、家族、そして医師の方が支えてくれたおかげでした。母は、医師の方の言葉や気遣いに励まされ、希望をもらったそうです。そして、希望を捨てずに、たくさん歩く練習をして、弟は二歳になった頃、自分一人で歩くことができるようになったのです。キラキラとした眼差しで、私と母のもとから父のもとへとまっすぐに自分の足を動かしながら、初めて歩いたあの瞬間は忘れられません。こういった体験を通して、患者さんだけではなく、その家族にも寄り添い、心を救うことができる医師に私もなりたと思いました。

医師という職業をやり遂げるには、専門的な知識とそれを応用する力、リーダーシップやコミュニケーション能力、生涯に渡って学び続ける姿勢などたくさんの力が必要不可欠です。また、医師になるまでの長くて険しい道のりを乗り越えるには、たくさん努力することが大前提になるのではないかと思います。そう考えたとき、私にある一つの疑問が浮かびました。「そもそも、努力とはどのようなことを言うのだろうか」と。元プロ野球選手で監督としても活躍した王貞治さんはこんな名言を残しています。「努力は必ず報われる。もし報われない努力があるのなら、それはまだ努力と呼べない。」私はこの名言から、目標に向かって諦めずに継続して取り組むことでそれが結果として表れ、そうしてはじめて「努力」と呼べるようになるということを知りました。ですので、今のうちから、様々な物事において、自分の目標を明確にしなが、最後まで諦めずに取り組み、「やりきれた」と実感できることを増やしていきたいです。そして、努力できたという経験を自信に変えていきます。

きっと、医師になるまでの過程で辛いことや、挫折そうになることがたくさんあると思います。そんなとき、今まで努力したことを思い返し、自分自身を信じて前に進みます。そして、患者さんと家族に寄り添い、たくさんの人の心と命を救うことのできる医師に私はなります。

この主張をどんな人に届けたいですか？

まだ夢を見つけることができている人や、まだなんとなくでしか自分の将来や夢について考えることができている人に届けたいです。私がもしこの作品の中にも書いた医師の方に出会えていなかったら、医師になりたいという夢を持つことができなくなっていたかもしれないし、この作品を書くこともできていなかったと思います。それほど、「出会い」というものは、人生においてとても大きなもので、誰かとの出会いがきっかけで夢を見つけたり、自分の将来を考えたりできるようになるということはこの作品を通じて伝えたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

よりよい子育てのためにできること

長野県 長野県諏訪清陵高等学校附属中学校 3年

國枝 耕之介

赤ちゃんはどんな時に泣くのか、なぜ泣くのかを考えたことがあるだろうか。

最近、家族で外食に行ったときに大きな声で泣く赤ちゃんを見た。そして、その子をあやすお母さんと申し訳なさそうに頭を下げるお父さんの姿を見た。私がそれを見たとき、これが本当に正しいのかと疑問を持った。確かに赤ちゃんの泣き声は私たちがしゃべる声よりも大きい。しかしながら、頭を下げる必要はないのではないか。私は本当の問題点は「頭を下げさせてしまう」という点にあると考える。

あるとき、テレビでこんなニュースを見た。

「新しく保育園を建てようとしたら、近くの住民に反対されて計画がなくなった」

私は、このニュースを見たときにとてもおどろいた。もちろん、それぞれの理由があって反対していると思うが、その人たちも昔は同じような教育を保育園などで受けていたと考えると解せないのだ。また、その理由の一つに「子供たちの声がうるさいから」というものがあった。確かに、小さい子供が多いとうるさくなるが、その子たちがその場所で学ぶ内容やその重要性を考えれば自分のことよりも子供の将来のことを優先したほうが良いと思うのだ。

このように、子供やそのうるさをまだ受け入れられていない人は多いのが実状だ。

私は、子供のうるさを絶対に受け入れろとは言いたくない。しかしながら、より多くの人に「小さい子がうるさいことはあたりまえ」だと理解してほしい。理解が深まればより多くの人の子育てをしやすくなり、最初の例で言えば、お父さんが頭を下げる必要がなくなるだろう。

理解して受け入れてくれる人を増やすために、私がしていることがある。それは、「赤ちゃんが泣いたらほほえむ」ということだ。これは私の母がいつもしていることを真似してはじめたことだ。最近はマスクをしている人が多いからこそ、相手がどのように思っているかが分からず不安になる人もいるだろう。しかし、少し笑うことで微力ながらも「大丈夫ですよ」と意思表示をすることができると考えている。これをされた人がいつか同じ姿を見たときに、その人に対して同じことをすれば連鎖反動的に次へ次へと繋ぐことができるのではないか。また、もう一つ心がけていることは自分も赤ちゃんだった頃があったということをおぼえておくことだ。あたりまえだが誰もが赤ちゃんだったのだ。その時も誰かが我慢したり、協力したりしてくれていたから今の自分があるのだろう。自分に協力してくれた人がいるのならば自分も誰かに協力する。この意識も大切だろうと思っている。

これまで書いてきたようなことをしてくれる人が増え、いつか社会全体が「優しく見守ってくれる地域」のようになることが私の願いだ。私も将来、子育てに関わることになるだろう。そのときには、もっと子育てのしやすい環境、社会になっていることを強く望んでいる。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

街中のいたるところで赤ちゃんの泣き声を聞くことがあります。そんなとき、頭を下げている人を見たことがある人は多いのではないのでしょうか。私はそんな社会を変えたいです。私たち一人ひとりにできることは本当に小さなことだと思いますが、「塵も積もれば山となる」という言葉の通り一人ひとりがアクションを起こせば、赤ちゃんにもっと寛容な社会に必ずなるでしょう。この作文を通して一人でも多くの方にこのことを考えてもらいたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

意識と行動を変えた先に

静岡県 浜松市立与進中学校 3年

影山 夏希

「信じられない。まだ食べられそうなのに、本当に全部捨てられてしまうのだろうか。」

新型コロナウイルスの影響で延期され、今年の四月に修学旅行先のホテルで行われることになった職業体験。食事の片付けを担当することになった私は、ホテルでの仕事を体験させていただくという初めての経験に心が踊っていました。しかし、いざ行ってみると、目の前の光景に衝撃を受けました。

次々に回収されていく、お皿に残ったおかず。残飯であつという間に一杯になる、大きな青いバケツ。それを黙々と運ぶ、ホテルの従業員の方々。バケツに放り込まれていく料理の中には、ほとんど手がつけられていない物も多くありました。淡々と行われる作業を見つめながら、私はそれまでの自分の価値観が覆されていくような気がしていました。

「出されたものは食べる」。これは、私が幼い頃からの両親の教えです。

「どうして食べないといけないの？」

と尋ねたとき、

「食べ物や、それを作ってくれた人への感謝や敬意を示すための基本だからだよ。」

という両親の言葉に深く納得したのを覚えています。この言葉が胸に焼き付いているからこそ、ホテルでの職業体験で目にした光景がショックでした。私達が楽しく食事をしていた裏側で大変な作業が行われ、大量の残飯が捨てられていたのです。その現実をいざ目の当たりにすると、ホテルの方々に申し訳ないばかりか、食べ物や命を無駄にしてしまったことが苦しくて、目を背けたいという衝動に駆られました。

「どうすれば、こんなふうに捨てられてしまう食べ物を減らせるのだろうか。でも、一人の中学生である私が行動したところで、何も変わらないのではないか。」そう考えていた私を変えるきっかけになったのは、修学旅行から帰って来た後に聞いた母の話でした。

日頃母と二人で買い物に行くと、私が

「手前の賞味期限が短いものを取ったら？」と言っても、母はいつも

「棚に置いてあるということは、好きに選んでいいんだよ。」

と言い、棚の奥にある賞味期限の長い商品を選んでいました。そんな母が最近スーパーで働き始め、がらりと考え方が変わったのです。買い物をするときに、奥ではなく手前の商品を取るようになりました。スーパーでの仕事を通して、奥から商品を取ると、賞味期限の短いものばかりが売れ残り、食品ロスにつながることで、企業が廃棄コストを払わなければならない、お店が大変だということに気が付いたというのです。

「ちょっとしたことで、一人一人の意識改革が必要なんだなとつくづく思ったよ。」

と、母は呟いていました。

その言葉に、私ははっとさせられました。自分一人がやっても意味がないのではない。どんな小さなことでもやってみなければ始まらない、母の何気ない言葉がそう思わせてくれました。

それ以来私は、食品ロスを減らすために何ができるのかを考えて行動し始めました。例えば、カレーを作るときに、いつもは捨ててしまう人参の皮も細かく刻んで一緒に入れるようにしています。また、固くて食べにくいキャベツやブロッコリーの芯は、煮込んでスープに入れていきます。「そんな小さなことをしていても仕方が無い」という人もいるでしょう。しかし、たったそれだけのことでやってみると、本来は捨てられてしまう部分も美味しく食べられたという嬉しさや達成感が湧いてきます。その気持ちが、「またやってみようかな」という意欲や、さらなる行動の変化につながっていくのです。

「塵も積もれば山となる」ということわざのように、小さな行動を積み重ねれば、食品ロスの量は確実に減っていきます。家庭で余っている食品を、NPO等の団体を介して生活の苦しい家庭に寄付するなど、私はこれからも自分のできることを探していきます。意識が変われば、人の行動は必ず変わります。食品ロスと飢餓がとなり合わせのこの世界を、私達の行動で変えていきませんか。一人一人が意識と行動を変えたその先に、誰にとっても幸せな世界が広がっていると、私は信じています。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

ホテルでの職業体験で食事の片付けを行い、残飯の多さに衝撃を受けたことがきっかけです。この体験にただショックを受けて終わりではなく、何か今後に活かしていけないだろうかと思ったことで、食品ロスについて考えるようになりました。食品ロスは、私たち一人一人のすぐそばにある、とても身近な問題です。どんなに小さなことであっても、みんなが食品ロスを減らすための工夫を少しずつ始めていくことが、大きな一歩になるのだと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

今を生きるということ

富山県 入善町立入善中学校 1年

上原 沙弥夏

「髪の毛、無くなっちゃったね。」

ある日、母が父に向かってこう言いました。

触れてはいけない言葉を口にした母。私は居たたまれなくなり、自分の部屋に行こうと席を立ちました。すると父は、自分の頭に手をやり、

「つるっばげ！！」

と、おどけて、触り心地を楽しんでいました。あまりに突然の出来事で、戸惑う間も無く、家族みんなで大爆笑してしまいました。闇から抜け出したような清々しい気持ちになり、私も久しぶりにお腹を抱えて笑い転げました。

昨年の五月、父は「悪性リンパ腫」という血液のガンと診断されました。幸い、ステージⅠでの発見だったため、大事には至らず、今では元気に毎日仕事に行っています。とは言え、手術をし、治療のために入退院を繰り返す日々。薬の影響で髪は抜け落ち、やせてぐったりしている姿を見るのは、とても辛かったです。

ガンだと聞かされてから、父とどう接すればよいか分からず、かける言葉も見付からず、気まずい空気から逃げるように父を避けていました。「死」というものを、初めて身近に感じ、戸惑う自分を受け入れることができず、ただひたすらに平静を保とうと、父の存在を消していたのです。そんな時の母の一言。

「髪の毛、無くなっちゃったね。」

大爆笑の後、父はこう言いました。

「明日はあるかどうか分からない。だから、今を楽しもうと思う。今出来ることを精一杯することが人生だよ。」

病気の父が言う言葉には重みがありました。本当にその通りだと、私の心の深いところにズッパリと響きました。そして、ある詩を思い出しました。

置かれた場所で咲きなさい。

仕方がないと諦めるのではなく、人生の最善を尽くし、花のように咲くことです。

咲くことは、幸せに生きることです。

(中略)

神はあなたを特別なところに植えたのです。

もし、あなたが他の人たちとそのことを分かち合えるのならば、あなたの人柄は輝きます。

「輝く」ということは「笑顔を咲かせる」ことなのです。

神が私を置いた場所で私が花開くとき、私の人生は、人生の庭で美しい花になるのです。

置かれた場所で咲きなさい。

これは、アメリカの神学者、ラインホルド・ニーバーの詩の一節です。初めて読んだ時、感銘を受け、覚えるほど繰り返して読みました。

たくさんの偶然が重なり、この世に生まれてきた「私」という存在。今、こうして生きていることは、奇跡であり、かけがえのない貴重な体験だと思うのです。今を生きるということは、先のこととはわからないけれど、その時々を、悔いのないように、大切に生きることだと思います。

父は病気を機に、生きることに貪欲になり、何事にも全力で取り組んでいます。今まさに、父にしか出せない色の花を咲かせています。

私の置かれた場所は、変えることは出来ません。世の中は日々変化しているけれど、逆らうことが出来ないのであれば、そこでどう生きるか？——それは個人の自由。私は、道端の名も無い花のように、たくましく、「私」という世界に一つしかない花を咲かせられるよう、今を生きていこうと思います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

コロナ禍で、今まで当たり前だったことが出来なくなり、毎日、窮屈な生活を強いられるようになりました。更に、父の病気が分かり、様々なことに戸惑う自分を受け入れることが出来なかつたり、楽しむことを忘れそうになつたりしました。しかし、病気の父の「今を楽しんで、精一杯生きる」という言葉に胸を打たれ、私も父のように今を生きることに価値を見出し、精一杯生きていこうと決めたことをみんなに伝えたいと思ったからです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

これから出会うであろう人たちへ

石川県 中能登町立中能登中学校 3年

中田 聡音

小学三年生のときに、『二日月』という本に出会ったことで、私の考え方が大きく変わりました。

主人公の妹は、病気のため、痩せていて、とても小さいです。ある日、妹を見た、知らないおばさんは言います。「ご病気か何かですか？かわいそうにね」主人公は「かわいそうだなんて、言われたくない！」と心の中で叫びました。

「かわいそうじゃない」こんな考え方があるのだと、私はそのとき、初めて知りました。

私は心臓に病気があります。生まれてすぐに大きな手術をし、そのあともずっと入退院を繰り返していました。

このことを周囲の大人が知ると、彼らは決まてこう言います。「かわいそうに」と。

だからでしょうか。「自分は弱くて、何もできない人間なんだ」と思い込んでいました。周りからの悪意のある言葉にも、心配の言葉にさえも、怯えていました。

そんな中出会った、「かわいそうじゃない」という言葉。

「私は同情されるような存在じゃない。まして、見下される人間でもないんだ！」自分の中の暗い気持ちが、ずっと小さくなりました。

このときを境に、私は人に恵まれていることに気づけるようになりました。

私には運動制限があり、マラソン大会に参加できません。「うらやましい」とよく言われますが、私はそれが嫌いです。

両親に話すと、「気にしなくていいんだよ」と抱きしめてくれました。両親の優しさは、いつも私を救ってくれます。

「自分は長く生きられないのだろうか」という恐怖を打ち明けたとき、ともにその恐怖と向き合ってくれました。「確かに、この先何があるかわからない。でも、何があったって、みんなが守ってくれるよ」と、私を勇気づけてくれました。

マラソン大会当日。応援することしかできず、気持ちが沈んでいくばかりの私が、救われた瞬間がありました。

「応援してくれた聡音さんに、拍手をしましょう」という担任の先生の言葉で、クラスみんなが温かい拍手を送ってくれたのです。

今でも、思い出すたびに心が温かくなります。

「私の周りには、助けてくれる人、大切にしてくれる人がたくさんいる。これってすごく幸せなことじゃないか！」

私を大切にしてくれる人たちに会ったおかげで、今こうして生きていられる。気づいた瞬間、今まで出会ってきた人たちへの感謝の気持ちが、心の中に溢れてきました。

同時に、「自分はこの人たちに、何か恩返しができるのだろうか」そんな気持ちも生まれてきました。

でも、恩返しって、何をしたらいいんだろう？子供の私にできることなんてあるの？

悩んでいたとき、主治医の先生が、教えてくれました。先生自身も耳の病気で手術を繰り返し、お世話になったお医者さんの恩に報いるために医者になったのだ、と。

はっとしました。支えてくれた人全てに、直接恩返しすることは難しい。それなら、これから出会うであろう人たちへ、恩を返せばいいのです。

私には、夢があります。医者になるという夢です。私を救ってくれた小児科の先生方のような医者に、私はなりたい。かつての私がそうであったように、辛い思いをしている子供たちの支えになりたいのです。

医者になるためには、人の何倍も勉強しなければなりません。そのための一歩として、希望の高校へ行けるように、今頑張って勉強しています。

たくさんの人に大切にしてもらえた私が、今度は、これから出会うであろう誰かを大切にするために。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

いつも温かい食事を準備してくれる家族、送り迎えをしてくれる祖父母、私が疲れたときや辛いときに「大丈夫？」と声をかけてくれる友達。周りの人の支えは、身近過ぎてつい忘れがちです。しかし、この作文を書いたことで、改めてそのありがたみを実感しました。これまでに出会い、たくさん大切にもらった人たちへの感謝を込めて、これから出会うであろう人たちへ、このことを伝え、繋いでいきたいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

無限の樹形図

福井県 福井県立高志中学校 3年

松下 千佳

「無限の樹形図」という言葉を聞いたことがありますか。私はこの言葉を、ある医療がテーマの漫画で知りました。その漫画は小児外科医の物語です。無限の樹形図というのは小児医療において、一人の子どもを救うとその子孫、すなわち樹形図までも救うことができる、ということの意味しているそうです。そしてさらに、若手の医師を育成すると、もしくは救った子どもが医師になると、その医師たちが救う子供たちの樹形図も救ったことになる、ということだそうです。

私は斜視という病気を持っています。斜視というのは目の病気です。普通の人の目は両目とも同じ方向を向いています。でも斜視の人は筋肉などに問題があり両目で同じ方向を見ることができません。片目がずれてしまうのです。もしかすると、なんだそれだけか、と思う人もいるかもしれませんが、斜視は放っておくと最悪の場合失明することもある病気です。片目がずれているために、ずれている方の目の情報を邪魔だと判断した脳がその情報をシャットアウトしてしまい、使わなくなってしまうためです。また、片目のみで生活している状態なので、立体的に物を見ることができません。私の場合外斜視といって目が外側にずれる状態で、今でも時々右目がずれてしまいます。私も治療を受けるまでは右目が機能しておらず、立体感覚が無かったため頻りに転んでいました。

そんな私を救ってくださった女医の先生がいます。私の両親は私を日本で一番斜視の手術実績の多い病院へ連れて行ってくれました。その病院で私の手術を担当して下さったのがその先生です。子供の斜視の手術の経験がとても豊富な先生で、手術がとても上手です。私は年長の時と中学一年生の時の二回、その先生の手術を受けました。年長の時の手術は全身麻酔で受けたのですが、中一の時の手術は局所麻酔で受けました。手術が凄く上手な先生と書きましたが、それだけでなく子供と話すのがとても上手な先生でもあります。実は中一の時の局所麻酔での手術はとても緊張していたのですが、手術中も

「今朝福井から来たんでしょ、何時に家出たの？」

「中学校楽しい？」

などとずっと話しかけてくださって、手術が終わるころには笑いながら話ができるほど緊張が解けていました。先生のお蔭で、私は今目に何の支障もなく過ごせています。

先生は私の樹形図を救って下さいました。私は今、先生のような医師になりたいと考えています。先生に感謝すると共に、先生が私の樹形図を救って下さったようにたくさんの樹形図を救えるような医師になりたいです。

でも私が思うに、誰かの樹形図を救えるのは医師だけではないと思うのです。私達にも誰かの樹形図を救えることがあるのではないのでしょうか。ほんの些細なきっかけで人生が変わることはあります。極端な例ですが、例えば放送委員が校内放送で何気なくかけた曲に感銘を受けた生徒が、将来の夢を変えて世界的なミュージシャンになるかもしれません。そのミュージシャンの曲の歌詞に心動かされ、誰かが自殺を思いとどまることだってあるかもしれないのです。でも逆に、ふざけて言っただけの言葉が思いもよらぬ誰かを深く傷つけて、その人を自殺させてしまうこともあり得ます。私達のほんの些細な行動で、誰かの樹形図を救うことができます。その一方で、私達のそのほんの些細な行動で、誰かの樹形図を壊してしまうことだってあるのです。

私達の何気ない言動で壊されていく樹形図があると思うととても胸が苦しい思いがします。でも前述の通り、樹形図を救えるきっかけも身近にたくさん存在します。これから高校、大学と進学し、社会へ出ていく中で、私達はたくさんの人と接することになります。誰かの樹形図を守り、そして救える人がもっと増えて行ってほしいです。勿論自分もその人達の一員であるよう努めたいです。

最後に、今回この「無限の樹形図」という言葉をあなたが知ったことが今後あなたが誰かの樹形図を救うという「無限の樹形図」の出発点となることを願っています。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

現在、新型コロナウイルス感染症や不景気、いじめ等、様々な問題を理由に沢山の人が自ら命を絶っている現状があります。しかしそれぞれの命は未来へと脈々と続いています。自分の命は自分だけの物ではありません。自分の命と他人の命のどちらも大切に人が少しでも増えて欲しいと思い、この作品を書きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

大切な私のふるさと

三重県 尾鷲市立尾鷲中学校 3年

北村 遥香

「尾鷲って田舎でなんもないよな。」

友達と一緒にいる時によく口に出す言葉だ。コンビニやスーパーの周囲には人気がある。それと比べ、昔は栄えていた商店街などはどんどんお店もなくなり、人通りも少なくなってきた。こんなことを考えていると、少子高齢化や過疎化といった授業で学んだことが私達にも関係あることだと実感する。バスの本数も少なく、電車も通っていない。働ける場所も少なくなっていると聞いたことがある。私は「将来は尾鷲を出て都会で暮らして働くのかな。」と何気なく考えるようになっていた。

そんなことを考えていると、東京の大学を卒業した従姉妹が尾鷲に戻ってきた。東京では就職せず、尾鷲に帰ってきたのだ。このことを知ったとき、私は不思議で仕方がなかった。なぜ都会でものがなんでも揃って、楽しいことがいっぱい詰まっている便利な東京から、不便な田舎の尾鷲に戻ってきたのか分からなかったからだ。私は、従姉妹に聞いてみた。すると、こんな言葉が返ってきた。「んー、一度尾鷲離れてみると尾鷲のええとこに気づいたからかなあ」と。東京も楽しいことがいっぱいある。だけど、自然の豊かさや魚のおいしさ、人の優しさ、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかった。とも言っていた。その時、私は名古屋に行った時のことを思い出した。人とぶつかってしまい、「ごめんなさい」と私は言った。だが、相手は無言で通り過ぎていった。こんなこと、尾鷲では経験したことがなかった。名古屋は明るすぎて、星空がくすんで見えた。私は、従姉妹が言った言葉の意味が少し分かった気がした。

ある日、部活の帰り道、友達とゆっくり歩いていた。すると頭上の広々とした空には、とても綺麗な夕日が赤く私を照らしていた。澄んだ明るい春の空には、一番星が輝いたのを覚えている。

その日の夜、私の家の食卓に並んだブリのお刺身とおおさのお味噌汁がとてもおいしかった。脂が沢山のついているブリはとてもツヤツヤしていて、おしょうゆにも沢山の脂が浮かんでいた。静かにおちゃわんを手にとり、はしを口へと運んだ。とろとろですごくおどろいた。魚を食べる時、あまり使わない言葉かもしれないが本当にとろとろだった。おおさのお味噌汁は、飲んだ瞬間磯の香りが広がってきて、おおさってこんなにおいしいものだったんだと改めて感じた。その日食べたブリとおおさが尾鷲でとれたものだとなり、とてもおどろいた。こんなにおいしいものがあったことを知らずにいた自分に対してがっかりした。私のふるさとには、豊かな自然とその恵み、そして優しい人が沢山いるという素晴らしい宝があることに気がついた。改めてふるさとの良さを実感し、尾鷲っていいなと思えるようになった。

尾鷲という小さな街に、なにもないわけじゃなかった。尾鷲を出て、都会で暮らして働くという考えから、一度都会へ出てもう一度尾鷲へ戻ってくる。Uターンするのもいいかもしれないと思った。

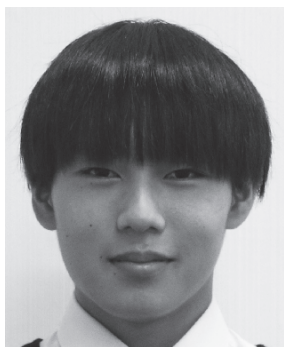
「尾鷲って田舎でなんにもないよな。」と言うばかりで、行動しなければなんにも変わらない。

では、私達が住むこの街の未来をどう構築していけばいいのだろうか。私は自然と食文化、地域行事を大切に守ることが必要だと思う。田舎だからこそできる事を、もっと活用することが大切だ。この事を思っているのは私だけではないだろう。市役所や商工会議所で働いている人達、尾鷲に住んでいる人も思っていると思う。だからこそ、港祭りやヤーヤ祭り、イタダキ市など様々なイベントが行われているのだ。他にもUターン、Uターンして下さった方々が、昔の家屋を改築し、移住、活用して下さった。尾鷲をもっとよりよくしようとしてくれている人がいる証拠だ。私も、尾鷲をもっといい街にしていきたい。

私は今回、ふるさとの良さについて再確認し、将来はこの街で暮らしていきたいと改めて思えるようになった。もし一度都会へ出ることがあったとしても、必ず帰りたい。なぜなら尾鷲というふるさとが大好きだからだ。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

田舎の尾鷲から早く出ていきたいと考えていた私に、東京から戻ってきた従姉妹が、「尾鷲には尾鷲のええとこがあるんやで」と教えてくれた。そこからいろいろな経験をする中で、田舎の尾鷲から早く出ていきたいという考えが私の中で変わっていった。そして、私は田舎には田舎のいいところがあるということに気づき、私のように田舎から出たいと思っている人たちに私の考えを伝えたいと思った。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

だったらこうしてみたら？で夢は叶う

京都府 京都市立桂川中学校 3年

太田 真行

みなさんは「どうせ無理」この言葉を使ったことはありますか？この言葉は人の自信と可能性を奪ってしまう最悪な言葉です。でもとっても簡単で楽になる言葉なのです。この言葉を使えば挑戦しなくてよくなるからです。「どうせ無理。どうせ出来るわけない。」と、挑戦をしなくなります。

これは他人事ではなく、身近にあります。僕の学校でもどうせ無理を耳にすることがあります。生徒総会を行ったとき。クラスで学校に対する要望内容を決めていました。僕たちの学年は入学した時からコロナの影響で様々な行事がなくなってきました。そこでこんな案が上がりました。

「今年は全学年で体育祭をしたい！」

しかし、こんな声も上がりました。

「どうせ無理でしょ。意見上げて実現したことなかったし、これ意味あるの？」

とっても悲しく心が痛くなりました。そして僕は「どうせ無理」という言葉をなくしたいと強く思うようになりました。

遡ること二年。僕はある方に出会いました。それは植松努さんという方です。植松さんはどうせ無理をなくし、だったらこうしてみたら？を広めるため、全国で講演活動をしておられました。僕は植松さんのお話にとても共感し、もっと沢山のの人にこのお話を聞いてもらいたい！と思いました。そして僕は一昨年の八月に植松さんの講演会を開催しました。子どもたちで大人でも難しいような事を0から作り上げ、成功させたのです。開催までには沢山の困難がありました。会場をおさえたり、講演の依頼やチラシ作り。やったことないことに挑戦し、沢山の経験を積んできました。無理かもしれないと諦めなくなった時もありました。ですが、困難を通して僕は気づきました。だったらこうしてみたら？で夢は叶うんだと。

コロナの影響で会場での開催が出来ず、悩んでいた時。

「リアルが無理ならオンラインでしてみたら？」

講演会はオンラインに変更し、無事開催できました。また学校では、コロナによってあいさつ運動が出来ず、悩んでいました。

「じゃああいさつと消毒をまぜてみたら？」そして僕達はOHAPUSHという活動を考え、実行しました。これはあいさつと消毒を同時に行うことで感染対策も挨拶もできる一石二鳥な活動なのです。

出来ない。無理。そこで終わるんじゃない。どうすれば出来るかを考えることが大切だと僕は伝えたいんです。どうせ無理と言って、諦めてしまうのは勿体ないです。やり続けることは大きな力になります。だから誰になにを言われても好きな事や夢を諦めないでほしいです。

学校では、今のところ体育祭を全学年で行う予定です。あの時どうせ無理と言って、提案しなければ全学年ではできなかったかもしれません。出来る可能性が少なくても諦めなければ未来はかわるかもしれません。思うは招く。思ったらそうなるよという意味です。

どうせ無理。どうせ出来るわけない。そこで諦めないでほしい。だったらこうしてみたら？で夢は叶うんです。

ぜひみなさんも、だったらこうしてみたら？を使ってみてほしいです。そうすればきっとどうせ無理がなくなって、みんな夢が叶う素敵な世界になると僕は思います。

この主張をどんな人に届けたいですか？

この主張は子どもから大人まで一人でも多くの人にと届けたいです。子どもの夢をつぶしてしまっている大人もいます。やったこともない大人が出来るわけない、どーせ無理だと。でも、そうじゃなくて、だったらこうしてみたら？とアドバイスしてくれる。背中をおしてくれるような大人を増やしたいです。子どもにも夢をたくさんもってほしいです。小さな夢でもいいんです。叶えられると自信にもなります。子どもが夢をもち、大人が背中をおしていける。そんないい循環を作っていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

後悔する前に

大阪府 守口市立梶中学校 3年

足立 遥

私には、父がいません。今年の二月、この世を去りました。とある病氣にかかり、入院生活を余儀なくされていたのです。父の死はあまりにも突然の出来事でした。

ダメな事をして、いつも優しく注意してくれた私の父。こんな人なかなかいないんじゃないかと思うくらい優しく、大好きな父の死は、私をどん底に突き落としました。

正直、私は父が死ぬことはないだろうと、思い込んでしまっていました。そんな身勝手な思い込みが、「父の死」をより悲しくさせたのだと思います。父の容態はどんどん悪化していき、最終的に「いつどうなるかわからない」とまでお医者さんに言われるほどでした。あまりにも突然だった父の死に、身内だけでなく、その知らせを耳にした人も、驚き悲しんだのではないかと思います。

こんな事はドラマや漫画でしか見たことがなかったので、今後どう過ごせばいいのか、どう生きていけばいいのか、わからないまま毎日を過ごしていました。ただ、一番辛かったのは、母だと今でもずっと思います。母の辛さは、私には想像もできないほどだったことでしょう。母のために、何もしてあげられない自分に対して、やるせない気持ちで溢れていきました。

深い深い海の底にいるように、気持ちは沈んだまま。このままではダメだと分かっているながらも、心は追いつかないまま。そんな状態が続いていました。葬儀をするまでは一。

父の葬儀は、少し期間が空いて行われ、お通夜には沢山の人が来て下さいました。父は昔、社会人のクラブチームでソフトボールをしていたので、職場の人達だけでなく、ソフトボールのチームメイトの方達も来て下さいました。そこで私は気づきました。父のために、多くの人に来て下さり、沢山の人が泣いてくれるほど、父は愛されていたのだと。その瞬間、なぜか私の心に、一筋の光が現れました。父は愛されていた、愛される存在だった。その事実だけで、私にとっては誇らしくとても嬉しく思えました。父は最期まで愛されていたのだから、幸せな気持ちであの世へ行くことができたんじゃないかな、そんな感情が少しずつ心の中を占めていきました。

私は父の影響を受けて、三年ほど前から野球が大好きになっていました。父とテレビで野球を見ては、語り合い、盛り上がるという日々が続いていました。私にとって父と過ごすその瞬間が、何よりも好きで、何よりも幸せでした。

実際、父とはもっとやりたいこと、見たいものもあったし、見せたい姿も沢山あって、後悔ばかりが残っています。

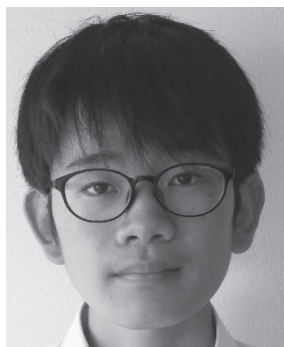
私から一つ、みなさんに言えることは、自分が本当に大切にしたいと思える人に、その日のうちに、感謝の気持ちや想いを伝えることです。その日で無くとも、伝えたいと思う時に伝えて下さい。別れは、ふいに突然やってきます。いつどうなるか分かりません。後悔しても、もう取り戻せないことだってあります。だからこそ、自分の気持ちを素直に伝えるべきです。コロナ禍で、会いたい人になかなか会えない時だからこそ、「伝える」ことの大切さが、より実感できるのではないのでしょうか。これが、今の私がみなさんに言えることです。

周りの人からすれば、「気の毒に」「今でも悲しんでいるんじゃないか」と思われるかもしれません。悲しい気持ちは今でも残っています。正直、父の話をここですべきか、とても悩んだりもしました。ですが今では、父の話をして良かったと思えます。家族全員で前向きに明るく生きて、私の気持ちや感じたことを伝えていく。それが、父の望むことだと思うから。

みなさん、周りの人や周りのもの、何よりあなた自身が本当に大切にしたいと思う人やものをこれでもか、と思うほど大切にして下さい。そう、後悔してしまう前に。

この主張をどんな人に届けたいですか？

世界中の全ての人に届けたいです。今、世界全体を混乱させているコロナウイルス。その影響で、会いたい人になかなか会えない時期にある方も沢山いると思います。そんな時だからこそ、「感謝の気持ちを素直に伝える」ことが、少なくなってきたりするのかもかもしれません。どれだけ大切にしている人でも、気持ちを言葉にしなれば、案外その想いは伝わらないと私は考えます。その考えを、世界中の人々に届けたいと強く思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

見た目問題

兵庫県 新温泉町立夢が丘中学校 3年

松井 瞬

皆さんは「見た目問題」という言葉を聞いたことがありますか。体にある大きなあざや、顔や体の変形、怪我や病気などによるまひや欠損のある人がそのことによって、偏見や差別、いじめを受けていることをさします。日本では約80から100万人の人々が、この問題に苦しんでいます。その見た目から他人からジロジロ見られたり、言動に傷ついたり、他者との関係を築けなかったり、外に出ることをためらい孤立してしまったりします。また誰にも分かってもらえず、自ら命を絶ってしまう人もいます。

僕がこの問題について考えるようになったのは、自分自身がこの問題を抱えている一人だからです。僕には、生まれつき胸から右腕にかけて血管腫という赤いあざのようなものがあります。このあざは、普段の生活では赤色ですが、気温の変化によって紫色にもなります。そのため、プールに入ったときなどは、その色によってさらに目立ちます。僕は、自分のあざによって、いくつかの経験をしました。

腕相撲をしようと僕が腕を出すと、相手は、「それって、うつる？」と言いました。僕は、「やっぱり、そう思うんだな。」と思いました。それとともに、「この人だけではなく、他の人もそう思っているのかな。」と思い、不安になりました。

初対面の人には、「それは火傷の痕？」とよく言われます。何度言われても、その言葉には未だに慣れず、嫌な気分になります。どこかに行ってしまいたいとさえ思うこともあります。時々、自分のあざのことを相手に説明するのも面倒だと感じ、イライラすることもあります。

言葉だけでなく、周囲からの視線も気になります。お店に入ったとき、他人からじろじろ見られ、嫌な思いをすることも多くあります。また、僕のような思いをしている人のことを思うと、さらにつらくなります。

この「見た目問題」によって悩んでいる人をなくすために、皆さんにしてほしいことが二つあります。

一つ目は、本やインターネット、テレビなどで、この問題について詳しく知り、理解することです。そうすることで、顔や体に障がいがある人に出会ったときに、冷やかしたり、冗談を言ったりすることがなくなると思います。何も知らない時よりも相手を思いやることができ、親密な関係が築けると思います。また、理解する人が増えることで、この問題に悩む人々の心の負担も軽くなるのではないのでしょうか。

二つ目は、容姿で人を判断しないことです。私たちは、「外見より中身」とはいうものの、人を見ただ目で判断することが多くないのでしょうか。就職活動には、まだまだ写真付きの履歴書が必要なことが多いですし、テレビやインターネットにも容姿についての情報が多く出ています。良くないことだと分かっている、心の中では差別したり、偏見をもってしまったりするのも事実です。この現実、真剣に向き合うためにも、「僕たちは一人ひとりが違う人間である」という当たり前のことを、誰もが認め合うことが必要です。そして、多様性を大切にして、関わっていくべきだと思います。

僕は今、中学生です。僕の同級生は、僕を理解してくれています。しかし、僕がこれから進学や就職をして社会に出るときには、多くの人たちとゼロから人間関係を築いていくこととなります。そのとき、「見た目問題」は解決しているのでしょうか。

僕は将来、一人ひとりの多様性が認められ尊重される社会になることを願うとともに、その実現を支える一人になりたいです。そして、僕のように、この社会にある差別や偏見に悩む人と出会ったときに、その人のことを理解し、寄り添える存在になりたいです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

僕は自分自身の経験を通して感じた差別や偏見について、考えをまとめました。僕は、前期生徒会長を経験することで、大勢の人の前で発表や発言することが得意になりました。だから、多くの人に僕の考えや思いを聞いてもらうことができる、この機会を大切にしたいと思います。そして、社会にある差別や偏見をなくすために、僕たちが何をすればいいかを、自分の言葉で伝えるとともに、誰もが生活しやすい社会を築き支える一人になりたいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

後悔する前に行動しよう

奈良県 山添村立山添中学校 3年

植田 琴羽

最近、自分専用のスマホやタブレットを持っている、という中学生がかなり増えているようです。私は中学生になった頃に、自分専用のスマホを持ちました。そこで、ある問題が発生していることに気がきました。スマホを持つようになってから、勉強があまりはかどらなくなったのです。私と同じような状態になってしまった中学生は、多いのではないのでしょうか。

なぜ、私は勉強がはかどらなくなったのでしょうか。「それは、まぎれもなく、スマホのせいです。」と言いたいところですが、やはりこれは自分自身に何か原因があるのだと考えました。そう、スマホは何も悪くない、私が悪いのです。

思い返してみれば、常に、と言って良いほど、私の手にはスマホが握られていました。そう、だってあのときは、私にとってスマホは命と同じくらい大事なものでしたから。私は完全にスマホに依存していたのです。

みなさんは、『スマホ依存症』という言葉を知っていますか。簡単に言うと、スマホに没頭し、日常生活に支障をきたすほどになっている状態を示す俗語です。家族で囲む食卓や、お風呂、トイレなどにもスマホを持ち込むようになるのが主な症状です。これによって、昼夜逆転する、成績が下がる、心が乱れてストレスを感じるなどの変化があらわれます。

私は先ほど、体験談として、「スマホを持つようになってから、勉強がはかどらなくなった」と言いましたね。まさに、これは、自分がスマホ依存症だったという証です。

それに、思い返してみれば、スマホを持ち始めたころは、スマホを食卓に持ち込み、通知があるたびに画面をのぞき込んでいました。スマホのことが気になって気になって、しかたなかったのです。それゆえに、両親からは「度が過ぎるぞ。」と注意されました。「ダメだ。私、完全に依存している…。」私は自覚しました。このままではだめだと。どうすれば、スマホから離れられるのだろう。

「スマホから離れたいのなら、スマホを没収してもらえばいいんじゃない。」

友達からは、そうアドバイスしてもらいました。でも、それだけは絶対にイヤでした。冗談じゃない。そんなことされたら、メールのやり取りができなくなるし、SNSを見ることだってできなくなる。私の楽しみがなくなるじゃないか。

その一心で、私はスマホについての自分のルールを作ることを決めました。その内容は、『スマホは基本的に二、三時間までにすること。そして、テスト期間中はスマホを触らないようにして、勉強に専念すること。』といったものです。

最初は難しく感じましたが、定着してくると、それが当たり前になりました。そして何より、このルールは本当に効果があったので、感動しました。私は以前ほどスマホが気にならなくなり、勉強にもしっかり集中できるようになったのです。

このように、自分専用のスマホを持つ中学生が増えている今だからこそ、自分なりにルールを作ることはとても大切なことだと思います。後悔する前に、行動するべきです。ぜひ、みなさんもスマホのルールを作って、充実した生活を送ってください。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は、自分専用のスマホを持つようになってから、勉強がはかどらなくなってしまいました。この作品を書いたのは、「スマホ依存症だった頃の自分を、改めて見つめ直したい」「そんな自分自身をさらけ出すことで、少しでも気持ちを理解してほしい」と思ったのがきっかけです。私と同じような状態になってしまった中学生は、たくさんいるのではないのでしょうか。ひとりでも多くの方が、後悔する前に行動することを意識して、生活を送ってほしいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

あたたかな輪

和歌山県 和歌山県立桐蔭中学校 3年

園部 暢也

みなさんはヤングケアラーという言葉を知っているだろうか。近年、このヤングケアラーと呼ばれる人が増加し、大きな問題となっている。

ヤングケアラーとは、「家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子ども」(厚生労働省)と定義されている。ヤングケアラーは、病気や障害のある家族の介護などで、本来受けるべき教育を受けられなかったり、人間関係の構築がうまくできなかったりすることが多い。また、進学や就職を断念する子どもも多く、将来を大きく左右されてしまうこともあるそうだ。

こう聞いても、この問題を身近に感じる人はおそらく少ないだろう。しかし、昨年行われた厚生労働省の調査によると、中学生で17人に1人が「世話をしている家族がいる」と回答しており、これは僕の通う桐蔭中学校に14人も居る計算になる。

僕も、3年前母がくも膜下出血になってから、介護とまではいかないが、母の手助けをする機会が多くなった。くも膜下出血になって、母は著しく記憶力が低下してしまった。また、一時期は右半身が不随状態になり、立ち上がることはおろか、手助けなしでは歩けなかった。だから、母が助けを必要とする時、僕はどんなに学校の勉強や塾の課題で忙しくても、手助けをしなければいけなかった。自分に余裕がない時や、悲しくて、辛い時でも母に助けを呼ばれる。だから僕は、つい怒ってしまった時もあった。そんな時、母は「ごめんね、もう呼ばないようにするね。」と言った。僕は、母にそう言わせてしまったことがとても悲しかった。どうして、大好きな母が自由を奪われなければいけないのか。どうして、愛情一杯自分を育ててくれた母を助けるという当たり前のことが、辛く思ってしまうのか。自分が情けなくて、やるせない気持ちでいっぱいになった。こうして毎日を繰り返し、今まで友達と遊んでいた放課後も母を助けるため早めに帰るようになり、友達付き合いは自然と減っていった。

今は母もリハビリをして歩けるようになった。しかし、記憶力はまだ戻っておらず、同じ事を3回聞かれることも少くない。

ただ、僕の場合は、母の症状が比較的軽く、歩行の手助けなどが必要だった期間も一年ほど短かったため、こうして学校に通いながら元気に今を生活している。しかしもっと深刻な状態であれば、かなりの長期間家族のケアをする必要があり、その心労は計り知れない。

では、ヤングケアラーが生きやすい社会にするにはどうすればよいだろうか。沢山考えたが、僕は、悩みを打ち明けられることが一番大切だと思う。ただ、自分がヤングケアラーだと気づいていない人もいる。実際、僕もそうだった。この作文に取り組んだとき、先生から自分がヤングケアラーにふくまれると言われて初めて気づいたのだ。これまでは、「もっと大変な介護をしている人がいる」と思って自分はそうではないと思っていた。だから、知らず知らずに、辛いことや悩みを隠していた。どこかで「家族だから当たり前」と思っていた部分も多い。

でも、こうして周りに悩みを打ち明けづらいことが問題を深刻化させている要因にも思う。だから、現在社会的にヤングケアラーに焦点があてられたことは大きな前進だ。また、公的な支援も増えていて、実は和歌山県にも相談窓口が各市町村に存在している。公的な支援をきちんと受けられたら、負担も減るだろう。

自分の悩みを打ち明けられる。そのためには、人間の、あたたかな輪を広げることが必要だ。それは、ヤングケアラーのことを知って理解しようとするのも一つだ。また、身近な友達の些細な変化に気付いたり、心のSOSに寄り添えたりする思いやりの心が何よりも大切である。

僕は、沢山の辛さをわかちあえる人間で在りたい。それは、周りを思いやることだけでなく、自分の辛さを自分自身が気づけるようにすることでもある。しんどい時、辛い時に周りに「助けて」といえるように。自分の弱さを伝えられる強さを持ちたい。

これはヤングケアラー問題に限ったことではない。様々な問題が顕在化した今、全ての人が抱える弱さや辛さを分かち合える社会にしたいと、強く思う。

さあ、あたたかな輪を広げよう。僕と、あなたから。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作文を書いたきっかけは、インターネットで見たヤングケアラーについてのニュースだ。それは母親の介護で自身の生活に支障をきたしてしまっている少年についてのニュースだった。見た瞬間、その少年が過去の自分と重なった。ヤングケアラーの思いを伝えたい。そう感じ、作文の題材をヤングケアラー問題にした。昔の母の介護体験と、その後のヤングケアラーについて調べていくなかで気づいた、自分の弱さ。今だからこそ気づいたヤングケアラーの問題を、この作文には沢山詰められたと思っている。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

思いやりの花を咲かせましょう

鳥取県 米子市立後藤ヶ丘中学校 3年

大田 星波

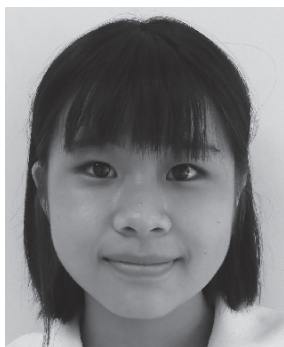
「ありがとう、ありがとう、ありがとう。小さな小さな幸せでいい、僕らにずっと続きますように。」募金活動の朝、校内に流れるSMAPの曲。私の大好きなSMAPにありがとう。そして募金をしてくれた後っ中生に心からの「ありがとう」を呼びかけます。

新型コロナウイルス感染拡大以降、行事も活動も制限され、ずっとマスクを付けたままの学校生活。うつうつとした日々を過ごす中、私は去年、先輩からバトンを受け、福祉委員長になりました。こんな不安定な時期、私に出来る事は何だろうか？と思いあぐね、前委員長の言葉を思い出します。「福祉って聞くと自分とは関係ないと思うかもしれないけど、みんながより良い生活を送るために福祉があり、福祉委員会は他の委員会には出来ない事が出来ると思っています。」私はそれを聞いて胸がギュッとになりました。福祉委員会は正直、地味で目立たない印象がありましたが、後っ中生みんなが思いやりの気持ちを持てば、コロナ禍でも明るく温かい学校が作れるのではないかと、どうせやるなら楽しく前向きにやろう！そう考えた私は、まず募金活動に取り組みました。募金も色々ありますが、例えば緑の羽根募金は国内の森林緑化のために役立てられ、その一部は学校の花だん整備などにも使われます。私はこの募金が学校美化につながる事を知らせ身近に感じてもらえるようチラシを作り、美術部で絵の上手な委員に声をかけ、イラストを入れてもらいました。そして募金活動中は音楽を流して募金活動を知らせました。選曲は迷いましたが、朝にふさわしい爽やかな曲、感謝の気持ちが伝わる曲としてSMAPの「ありがとう」を募金活動のテーマソングに選びました。SMAPのメンバーは、被災地でボランティア活動をしたり多額の寄付をされていることも知られており少しでもあやかれたらという思いもありました。校内に曲が流れるようになると次々とスマップ世代、スマップファンの先生方から声をかけられ反応がとて良かったです。生徒からは、「募金をしようと思っていても忘れていたけど、この曲のおかげで忘れなかった。」とか「募金をしやすかった。」と評判は上々、その結果、募金額は前年度より多く集まり、たくさんの方が募金に協力してくれました。毎朝、募金箱を持って呼びかけをした私達福祉委員も嬉しい気持ちでいっぱいになりました。その後、ペットボトルキャップやベルマーク集めなどをやり、ひとつひとつの活動にはそれぞれ意味があり、人のために役立つだけでなく、自分の心が豊かになることも学びました。後期の活動が終わった時、「思っていたより面白かった。」「達成感があった。」という委員の声が聞かれました。そして受験前にも率先して活動してくれた三年生には感謝をこめた表彰状を渡しました。するといつもポーカークフェイスの男の先輩が顔を紅潮させて笑顔で受け取ってくれた姿は今でもはっきりと覚えています。

今、中学校の玄関には沢山の花がプランターに植えられ、毎日色とりどりの花が生徒や来校者を迎えています。それは、福祉委員が交代で水やり当番をして咲かせたものです。私は心の中でこの花は私達が咲かせた「思いやりの花」と呼んでいます。一人ではなかなか咲かせる事は出来ないけれど、みんなが優しい気持ちを寄せる事によって咲く思いやりの花。これからもずっと花が咲き続けますようにと願いながら私は、後輩達に胸を張ってバトンを渡したいと思います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は福祉委員長として一年間活動に取り組んできました。正直、地味で目立たないと思っていた委員会でしたが、ひとつひとつの活動に意味があり、多くの人の役に立ち、自分の心が豊かになることを実感しました。福祉委員会の活動やエピソードを伝えることによって、福祉活動を知らない人、参加していない人に少しでも興味を持ってもらい、日本中が思いやりの花を咲かせることが出来たらいいなと思ったからです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

無知とは

岡山県 岡山県立倉敷天城中学校 3年

藤原 綾乃

皆さんは「無知とは罪」という言葉を知っていますか。以前、この言葉を本で知ったとき、私は納得がいきませんでした。知識がないことをまるで犯罪を犯したように言われるのはおかしいと思ったからです。しかし結局、納得のいく結論を出せずじまいでした。ところが、私はこの言葉の本当の意味を後に知ることになるのです。

私は一羽のセキセイインコを飼っていました。名前をレモンと言い、その名の通り綺麗なレモン色の羽を持つ、とても可愛い子でした。レモンを飼うことにしたあの日、私はレモンが少しでも長く生きられるようにしようと心に誓ったのです。本やネットで必死に調べ、レモンが快適に過ごせるよう工夫を重ねました。初めて私の名前を呼んでくれたときは嬉しくて、ひたすらレモンの頭を撫でました。そんな幸せな生活が一転したのは三年後のことでした。レモンの元気がないのです。一度病院へ連れていきましたが、病気ではないとのこと。私は不安を抱えつつ、大丈夫だろうと割り切ることにしました。一か月がたったある日、レモンと遊ぼうと思い、小屋を覗いたときのことでした。レモンが地面に倒れ、痙攣を起こしていたのです。小刻みに体を震わせ、口をはくはくと動かしていました。私はパニックになりました。そのとき両親は出かけており、連絡もつかず、時間ばかりが過ぎていきました。やっと親と電話が繋がり、レモンを病院に連れていけたのは四時間後のことでした。初めて会うベテランの医者はレモンを一目見て、「この子は今日を越せないね。」

と言いました。体中がカビや菌だらけ、骨と皮しかない最悪の状態だったのです。さらに先生はこう付け加えました。「日本はインコに関する知識が遅れていて、ネットや本、ましてやペットショップさえもが誤った情報を扱っているのが現状だ。」

と。家に帰ったとき、既にレモンは亡くなっていました。重く沈んだ空気の中、母が放った言葉に私はハッとしました。それは、

「知らないって悪、無知とは罪。」

でした。私はそのとき初めて自分がレモンに対し無知な人間だったことに気がついたのです。

皆さんは自分が知らないうちに失敗を犯してしまったという経験はありませんか。これは正しい情報だろうと鵜呑みにして嘘の情報に踊らされていたことはないでしょうか。三年前、新型コロナウイルスが猛威を振るい、世界中が大混乱に陥りました。現在ではコロナに関する正しい知識が広まっていますが、当時はどうだったのでしょうか。対応に追われる医療従事者に対して、

「コロナがうつる」

などの誹謗中傷をニュースで目にした人も少なくないと思います。また、トイレットペーパーの生産が止まってしまうという誤った情報が広まり、結果としてトイレットペーパーが品薄になってしまうという事態が起きました。実際我が家も余分にトイレットペーパーを購入してしまいました。しかし、その生産が止まることはなく、寧ろ自分達で己の首を絞め、品薄という事態を招いたのです。

「無知は罪なり」という言葉には続きがあります。

「無知は罪なり、知は空虚なり、英知持つもの英雄なり」

です。これはギリシャの哲学者ソクラテスの言葉だと言われています。この言葉を私はレモンの死後に知り、それ以来自分の戒めとしています。知識がないことが無知なのではありません。自分がいかに何も知らないか。それを分かっていることが無知なのです。私達は己の無知を減らすため学ぶことが必要なのです。ですが、ただ知を得ただけではいけません。それを英知まで高めるには行動することが必要なのです。得た知識を行動に起こすことで英雄となれるのです。皆さんも正しい情報を見極めるため、無知が原因で失敗を犯さないようにするため、多くの知識と行動によって英雄となってください。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書いたきっかけは、レモンが我が家の一員だったということを忘れなくなかったからです。レモンと過ごした幸せな日々、自分がレモンに対し無知な人間だったという事実、ただ知識を得ただけではいけないということを身をもって知り、それを自分の言葉で残しておきたいと強く思いました。この作文を通して、得た知識で行動を起こすことの重要性を知ってもらい、英雄となってほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

未来へのバトンは私達に

山口県 山陽小野田市立小野田中学校 2年

河本 芽郁

「地域貢献」「地域との交流」と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。もしかすると、「地域貢献」について深く考える機会があまりない人も多いのではないだろうか。実際、私も中学生になっても、真剣に意識したことがなかった。しかし、生徒会に入り、いろいろな活動を通して、地域の方々の思いを知る機会を得るたびに、地域の一員としての立場を考えることが増えてきた。

今年の五月末、本校の学校運営協議会が開かれ、私達生徒会役員も、生徒代表として「熟議」に参加した。そこでは「小野田中が目指す生徒像」について協議した。参加者は、地域の方々、先生方、そして生徒会役員だ。

最初は、先輩と先生の中、緊張してしまいあまり発言ができなかった。しかし、地域の方の優しい声かけや先輩や先生方の発言のサポートにより、自分の意見を声に出して言うことができた。そして次第に、自分の発言や意見が採用されるととてもうれしく、「より意見を深めたい」という気持ちになった。地域の方々とのコミュニケーションも増え、「難しいですね。」や「どうまとめましょうか。」など、自分の気持ちを伝えることもできるようになっていった。

このように話し合いは深まり、各教科やその他の学校生活、家庭・地域で、「地域を愛し、地域に愛される生徒」「積極的に学習に取り組むことができる生徒」などを目指そうと意見がまとまった。たくさんの異なる意見をまとめるというのが、こんなにも難しいとは思わなかった。しかし、その分、たくさんの難しい話し合いをまとめることができた達成感や、小野田中学校についての協議に、こんなにも一生懸命に考えてくださる地域の方がいるという事実が、こんなにもうれしいのだと思った。

話し合いの後、今日の活動についての振り返りを行った。私はある思いが頭の中に浮かんだ。

「私たちの小野田中学校を、地域の方から愛される学校にしたい！」

と。話し合いで出た意見を、決して無駄にはしてはいけないと思った。振り返りを発表していくとき、地域の方が、「これを実行し、よりよい小野田中学校をつくっていけるよう頑張ってもらいたい。」とおっしゃった。地域の方々の期待をうらぎることは、絶対にダメだと強く思った。そして、私達を支えてくれている方へ恩返しをしなくてはならないと思った。

しかし、私達学生は、部活動や勉強に追われ、地域貢献をするという余裕がないのではないかと。自分の時間を使いたいと思っている人が多いのではないだろうか。しかし、皆がそう思い、やらなかったら、誰がするのか。他の人がするだろうと平気で思ってしまうのか。自分一人ぐらいいいだろう、自分には関係ないと思ってしまうのか。でも、ここは私の町だ。みんなの町だ。私達を日々支えてくださり、見守ってくださる方々に私たちは未来を託されているのだ。あなたの、私達のたった一つの行動により、この町が大きく変わるかもしれない。

私は、これからも地域のことに興味を持ち、進んで地域のイベントやボランティアに参加していきたい。いずれはみな、社会に貢献する時が来るだろう。小さなことでもいい。何事も狭い視野では見えないことでも、広い視野で見れば見えるようになることもたくさんあると思う。

大切なのは、中途半端にせず、一生懸命することだ。まずは、地域のことを知ることから始めてみてはどうだろうか。私は学校運営協議会に参加しての気づきや自分の思いを忘れずに、これからも地域に貢献していきたい。

私たちの手で、私たちに託されたバトンを未来へとつなげていこうと強く思う。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、学校運営協議会の熟議を通して、日々私達を支えてくださり、見守ってくださる地域の方々に、これまでの感謝の気持ちと、これから私達若者が「地域の一員」として目指すべき姿の決意表明として、精一杯想いを伝えたいと考えました。また、同世代の中学生には、一人ひとりが「ここは私達、みんなの町だ」という自覚と関心と責任感をもつことの大切さを伝え、共に積極的に地域のイベントやボランティア活動に参加したいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

優しい言葉と行動は世界を救う

徳島県 阿南市立阿南中学校 2年

讃岐 優奈

みなさんは、言葉の力を知っていますか。そしてその力をいいことに使うことができますか。

私は、中学一年生の後半、少し体調をくずしました。身体のことではなく、心の体調をくずしました。具体的には、過呼吸になったり、涙が止まらなかったりして、一日に一回は保健室に行っていました。結局今でもその原因は分かっていないけれど、すごく辛い体験でした。

その辛さの中で、言葉の力について改めて知りました。それは悪い意味でも、良い意味でも。

この頃、あたり前のこと、普通のことができない私にとって、「あたり前」や「普通」といった言葉を、言われたり、聞いたりするだけでも、すごく辛い思いをしていました。私も、深く考えずによく使うけれど、もしかしたら、誰かを傷つけてしまう言葉だったかもしれないと気づくことができました。

この辛さから抜け出すきっかけとなったのは、先生や友達の言葉や行動でした。

先生は、私が保健室に行くたびに、「大丈夫か。」と優しく声をかけてくださいました。友達も、私が泣いた時には、何も言わずにそばにいて、背中をさすってくれました。部活動の時に泣いてしまった時も、先輩や同級生もみんなそっとしておいてくれました。その優しさが少しずつ私の背中を押してしてくれました。

そして何より、ある二つの言葉が私にとっての心の支えとなっていました。

一つ目は、仲の良い親友が言ってくれた、「逃げないで頑張っているのはすごいことだよ。それに一人じゃない。私がいるよ。泣いてもいいんだよ。」という言葉です。

親友は、どんな時も、私に寄り添ってくれました。私の頑張りを認めてくれたこと、そしていつも隣にいてくれたこと。このことは、私を今もずっと支えてくれています。

二つ目は、担任の先生が言ってくださった言葉です。それは、「誰だってそういう一面を持っています。あまり否定せずに、ありのままの自分を好きになろう。」という言葉です。

その当時は、まだ、先生にも友達にも素直に話をするのができない私に、そう言葉をかけてくださいました。

優しいだけの人間なんていないのだと、そう教えてもらったことで、気持ちがなんだか楽になりました。自分自身に腹が立ってしまったときには、この言葉を思い出すようにしています。

色々なところで、たくさんの人に助けをもらいながら、私はこの辛さを乗り越えることができました。でも、何度も助けをもらったのに、私から、「ありがとう」と言えたことは数えるほどしかありませんでした。だから、私を支えてくれた人たちに、心を込めた、たくさんの「ありがとう」を届けられるよう、これから精一杯生きていきたいです。そして、この人たちのように、人を支えられる人に私もなります。

この辛い体験をしたからこそ、学ぶことができたことを、辛いだけで終わらせるのではなく、自分を成長させるための試練だと考えました。

そして、辛い思いをしている人や、これからそういう体験をするかもしれない人たちに、私のこの体験から学んだことを伝えたいと思います。

世界中の人が、自分らしく生きられるようにするには、困っている人や、いつも周りの人に寄り添う気持ちを持つこと、それから、それを思うだけではなく、行動していかないといいません。

『人は、生きているだけでも、すごいことなんだよ。』

『あなたはあなた。だから人と比べる必要はないんだよ。』

『どんな時も必ずそばにいてくれる人がいるからね。』

優しい言葉と行動は、必ず誰かを救う力になります。私はそう信じて今日も生きていきたいです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、周りの人の優しい言葉と行動で救われました。だから、これからは私が、優しい言葉と行動で誰かを救う番だと思います。そして、人は生きているだけですごいということ。他の人と比べる必要はないということ。どんなときも必ずそばにいてくれる人がいるということ。これらのことを伝えたいです。この体験をしたからこそ、と、辛い体験を辛いだけで終わらせないことは大事だと思います。まずは、私の周りから。この行動が世界を救う第一歩になると信じています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ちょっとしたことで

香川県 東かがわ市立大川中学校 3年

山口 こゆき

私には、小さな不満があった。それは、毎日の登下校時に起こっていることだ。私の通学路には、信号のない横断歩道があるのだが、そこは交通量が多く、なかなか渡ることができないのだ。自転車から降りて、横断歩道の前に立っているのに、車は走り去るばかりで止まってくれない。「急いでいるのに！」と思いながらも、私にはどうしようもないと思い、止まってくれる車を待つことしかできなかった。ある日、母にそのことを話してみた。「お母さん。通学路の信号がないところ、全然車が止まってくれないんだけど。確か、車は歩行者がいたら止まらないとだめだったはずだよ。」と少し怒った口調で母に訴えた。すると母は困った顔をして、「うん。でもね、車を運転する人の立場になるとわかるけれど、意外と歩行者には気が付きにくいの。渡るのかな？と思って止まっても渡らない人だっているし、ややこしいことが多いんだよね。歩行者も手を挙げて待つとか、ちょっとしたことで運転手にも理解してもらえるから、あなたも意識してみたら。」

確かにそうだなと思った。今までの私は、車の運転手に一方的に文句を言っていたが、立場を変えてみると、わかることが幾つもあった。大切なのは、「ちょっとしたこと」なのである。渡りたければ手を挙げる。ほんのちょっとしたことで、運転手側に意思が伝わる。止まってくれたら、ちょっと会釈をして感謝を表すと、止まった運転手もいいことしたなと笑顔になれる。「ちょっとしたこと」は笑顔の輪をつくる、最大の行動なのだ。

では、身のまわりには、どんな「ちょっとしたこと」があるのだろうか。少し考えただけでもたくさん出てくるが、その中でも、社会が明るくなるような三つの身近な「ちょっとしたこと」を紹介したいと思う。

一つ目は、あいさつだ。友達や先生、地域の人や初めて会う人にもするあいさつは、ちょっとするだけで、どちらも笑顔になれるのだ。この大内大川小中学校は、「あいさつの中」として、あいさつに力を入れている。よく、地域の方からも生徒の皆さんの明るい笑顔には元気をもらえるというお手紙が寄せられる。私は以前、地域の方から直接、「いいあいさつね。元気が出るわ。」

と言われたことがあった。いつものようにしただけなのに、こんなにも人に喜んでもらえるなんて！とうれしく感じたことを今も覚えている。生徒会活動の一環として行っているあいさつ運動では、恥ずかしいのか、あいさつを返してもらえないこともあるが、小学生がぺこりとちょっと会釈してくれるだけでもうれしい気持ちになる。しないのと、ちょっとするは、大きな違いだと感じた。

二つ目は、ごみ拾いだ。外に出て、歩道のごみを全部拾うということも大変すばらしいことだが、もっと重要なのは、日頃からちょっとずつすることだと思う。通勤や通学の時、ふと目に入った道ばたのごみをついでに拾う。そう、「ついで」でいいのだ。そういったちょっとしたことを習慣づけることで長く続けられ、それがあたりまえとなる。ごみが少ない町は、犯罪が少ない傾向にあるらしく、みんなのちょっとした行動で犯罪を減らすことのできる、明るい社会への近道になると思った。

三つ目は、注意すること。他人を注意するということは、私にとって勇気のいる行動だ。相手を傷つけないだろうか、嫌われないだろうかと心配になってしまうからだ。でも、ちょっと勇気を出すことで、相手も間違いに気付くことができるのだ。私は注意をし合える関係はとても良い関係だと思う。間違いや、してはならないことに気が付かないままなのは悲しい。しかし、自分で反省したり、他人から注意を受けたりすることで、行動を改めることができるのだ。

今回、私がこの作文を通して考えたのは、「ちょっとしたこと」の大切さである。私が紹介した、三つの「ちょっとしたこと」は人を笑顔にできる。しかし、間違ったちょっとしたこともある。

ちょっとだけならごみを捨ててもいいや。悪いことをしたけれど、ちょっとぐらいならバレないや。といった考え方は絶対にしてはいけないのだ。そういった行動や考え方は人を笑顔にできない。それどころか、間違ったちょっとしたことをしてしまうと、自分自身も笑顔になれないはずだ。ちょっとした意識の違いが大きな違いを生み出してしまおう。

みなさんも「ちょっとした」良いことを探して実践してみよう。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私と同年代の人たちに「ちょっとしたこと」の大切さを知ってもらいたいです。「社会を明るくする」というと、大それたことに聞こえそうですが、実は、ちょっとしたいいことの積み重ねが周りの人を笑顔にしているのです。だから、学校生活の中で、周りの人たちから見たり聞いたりして、「いいな！すごいな！」と感じた行動を、自信をもって真似してもらいたいです。大きなことは難しくても私たち学生ができる、ちょっとした行動を続けていってほしいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「それはすてきなことだ」

愛媛県 愛南町立一本松中学校 3年

保岡 優奈

私は、中学三年生です。学習中はもちろんのこと、友達との会話の中でも、これからの進路について考えている自分がいることに、ふと気がきます。高校等説明会で話を聞いたり、様々な高等学校や高等専門学校が開設しているホームページやパンフレットを見たりする機会が増えたことで、進路選択に対する真剣さも増してきました。中学校を卒業して愛媛県内の高校へ進学。高校卒業は、専門性を身に付けるために大学を目指すのか、就職するのか、新たな選択を迫られることとなります。ただここで私が強く思うのは、よりよい選択をするときに必ず、物理的な壁が立ちはだかるということです。私の場合の物理的な壁とは、通学距離です。私の住む地域には高校は一校しかありません。地域外の高校を選択すると、生活が一変するのは周知のことです。さらに、大学進学や就職、結婚などを考えると、物理的な壁に加えて、精神的な壁が複雑にからみ合ってくるのが予想されます。しかし、私の考えの中心にある家族との生活を取り除けば、もっと楽になるのですが……。

そんなとき、私の悩みを解決し、心が楽になる出来事がありました。それは、スクールカウンセラーの先生との出会いです。私は、幼い頃から、相談は家族にしていました。だから、先生の「悩みなどの相談をできる人はいますか。」という問いに、迷わず、「はい、います。家族です。」と答えました。すると、先生は、「それはすてきなことだ。」と喜んでくださいました。私の予想を越えた先生の反応によって、それ以降の先生との会話は弾みました。緊張がほぐれて、思っていることをすべて吐き出すことができました。先生は、「大学に進学したり、就職したり、結婚したりして県外に住むことになると、なかなか地元に戻れなくなるから、今のうちに、手伝いや話をたくさんして、家族との時間を大切にするといいね。」と、優しく穏やかな声でおっしゃいました。私は、一歩踏み出す勇気をいただいたような気がしました。私は、先生と話をしながら、自分を振り返りました。「私にはすてきな家族がいる。母は、どんなときも私の話を聞き、気持ちに寄り添ってくれる。父は、私のことを自分のことのように考え、間違いは叱って正してくれる。妹は、一緒にいるだけで楽しく癒やしの存在。家族一人一人が私を大切に思い、支えてくれている。」と。自分を振り返ることによって、「家族」の存在は、当たり前のことのようだが、本当は、特別なことなのかもしれないという思いがしました。そして、そんな特別な存在がいることは、幸せなのだと思います。

私は、スクールカウンセラーの先生と話してから、自分から進んで手伝いをするようになりました。母と一緒に料理を作る機会も増え、以前よりも家族との時間を大切にしています。私は、中学校卒業後、自宅から通える愛媛県内の高校に進学することに決めました。物理的な壁や精神的な壁を逃げ道にしないで、自分が今一番大切にしたいことは何かを考え、気持ちが動いた方を選びました。まだまだ決めなければならないことはありますが、そのときも自分の気持ちにしっかり向き合うつもりです。そして、これから先、自分の生活の中心がどこになっても、家族との時間を大切にしていきたいと思います。

中学三年生の私には、家族との時間の他にも、今大切にすべきことがあります。今という時間を共有している級友と語り合うことや遊ぶこと、学び合うことなどです。生徒会長としては、学校行事や日々の活動に全力を注ぎ、一年前に掲げた公約を果たすことで、感謝を伝えることです。これらはすべて、今の私ができることであり、大切にしなければならないことだと、あの日、笑顔の先生に教えていただきました。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

物理的な壁や精神的な壁にぶつかっても逃げないで、真摯に向き合い、そのときの自分に大切なことや大事にしなければならないことは何かを考え、自分の心の動いた方へ進むつもりです。そして、私が持っている「すてきなこと」を大切に、自分にできることを責任を持って全力でやり抜くことで、私を支えてくれている人たちに感謝を伝えていきたいと思っています。これからもずっと、家族との時間を大切にしていきます。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

さあ、あなたは どうする？

高知県 南国市立北陵中学校 3年

岡崎 由奈

今の社会は、私たち学生に、求めすぎている。

「もっと主体性をもって。」

「主体的に取り組んで。」

何度もその言葉を聞いてきた。

令和三年度、私が中学二年生の時、通知表の評価の観点の言葉が変わった。三つになった項目の中で目を引いたのは、「主体的に学習に取り組む態度」である。そこで私は、求められている主体性とはどのようなものなのか調べることにした。主体性とは、自分自身の考えに基づいて行動すること。または、自らの責任のもとで積極的に行動しようとする態度のことだった。

ここで私は疑問を感じた。私たちが受けている学校教育は、本当に主体性を育めるものなのだろうか。調べるうちに、私は主体性の類義語、「自主性」にたどり着いた。自主性とは、ある程度決められていることに対して積極的に取り組もうとする態度であり、今まで私たちは学校で自主性を育んできたのではないかと気付いた。学校の授業の形は大きく変わってきている。先生の指示通りに動くのではなく、プレゼンテーションや議論をする機会も増えた。だが教師は、「みんなが同じように答えてほしい。」

生徒は

「人と違う意見を言うのはこわい。」

という考えから抜け出せない。

社会から求められるのは主体性。学校で育まれるのは自主性。そのため、

「社会からの期待に応えられる気がしない。」

「理想が高すぎる気がする。」

と多くの人が感じるのも、無理はないことである。

しかし、私は現代社会を生きていくために「主体性」をもった人間であることは必要不可欠だと考える。これから先、AIやロボットがさらに進化し、誰でもできるような仕事は奪われていくだろう。ただ暗記した情報をアウトプットするだけでは、人間は絶対に勝てない。だから、一人一人が社会から必要とされる存在である為に、まずは、私たちが「主体性」を育むことができる環境を作らなければならない。

私は、「主体性」を育てるためには、自分の中から答えや疑問を見つけ出し、行動をすることが必要だと考える。海外の教育を調べたところ、日本のような暗記詰め込み型ではなく、考えて自分なりの答えを導き出すことを重視した教育だ。課題なども、複数の解答がある問題や、生徒が考えないと解決できないことが多い。そして、出来ないことを否定せず、それぞれの個性や才能を伸ばすことにも重点をおいている。これらの事を、日本でも取り入れていくべきだと考える。難しいことかもしれないが、これまでの日本のようにみんなが同じであることを目指す教育では、「主体性」は育たない。「主体性」を育てる環境を、一人一人が作っていくのだ。

私は、その重要な役割を担う教師を目指している。物事を考え、自分なりの答えを導き出せるような人になりたい。そんな人を育てられる人にもなりたい。

中学校の卒業が近づき、一年生のときからもっといろいろなことに挑戦すればよかったという後悔がある。だから、二年生の終わりごろから、得意なことを生かして、多くのことに挑戦してきた。授業中は、答えを書いて満足するのではなく、疑問に思ったことはすぐに質問し、授業で扱われる課題について、様々な角度から考えるようにしている。

高校では、国内外の様々な人と関わり、自分の価値観だけにこだわらず、新しいことをどんどん吸収したい。自分の考えを積極的に発表したい。そして考える楽しさをたくさんの人と共有したい。

夢が叶って教師になったら、みんなが同じということが求められる社会を変えたい。それぞれが意見を自由に発表できる。他人任せにせず、自分の人生に責任をもつ。「自ら考える」を第一にする社会を目指す。

これが私の「主体性」だ。

さあ、あなたは どうする？

この主張をどんな人に届けたいですか？

私のこの主張は、学生にむけたものです。「誰か他の人がやってくれるだろう。」「めんどくさいし、やらなくていいや。」と自分で考えることを諦め、経験を得るチャンスを逃していることを自覚し、自分の選択への責任感をもつと欲しているという気持ちを込めています。社会人になってからは、「やればよかった。」という後悔の連続だとよく耳にします。後でやろう、明日やろう、次の機会にやろうでは遅いんです。どんなことでも構いません。どうか今、挑戦してみてください。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

世界に光を届けたい ～日系四世ルーツをたどって～

福岡県 飯塚市立飯塚鎮西中学校 3年

宮城 ひかり

「ひかり Levantate rapid! ハヤク! ハヤク!」日本語交じりのスペイン語で私の一日が始まります。私の両親はペルーの日系三世です。「日系人」とは、日本から外国に移住し、その国の市民権を得ている人と、その子孫のことを言います。父も母も、ペルーで育ち、ペルーの学校に通ったため、スペイン語を話します。働くために日本に来て三十年になりますが、いまだに日本語はとても難しそうでも勉強を続けています。一方、私は日本で生まれ育ち、日本語に不自由しませんが、困っていたことがありました。それは、自分自身、どこの国の人間なのかアイデンティティーがよくわからなかったことです。なぜなら私の見た目はいっばう日本人ですが国籍はペルーで、両親も私も日系人……。なんとなく「日本人のふり」をしているように感じていたからです。私は一体何者なんだろうという疑問が頭の片隅にいつもありました。

そんな時、母と一緒にペルーへ行くことになりました。私にとって初めてのペルー。成田空港からメキシコへ、メキシコからペルーへと、飛行機の旅も到着まで二日間かかりました。空港を出ると、ガソリンのような臭いと、ごった返す人と車、そして暑苦しさに私は包まれました。空港から祖父母の家へと向かっている時、信じられない光景を目の当たりにして、言葉を失いました。土ぼこりの舞う道路を幼い子どもたちが花やお菓子を抱え、車に乗っている人たちに売り歩いているのです。ペルーは経済的に発展しているとは言えず、家族や生活のために働く子どもたちがいることも問題となっています。

ペルーに滞在中、母の提案で、いとこと一緒に現地の学校に通いました。そこで出会った人たちは、人懐っこく、親切で、笑顔が素敵でした。一緒に遊んでくれたり、スペイン語が苦手な私を身振り手振りで助けてくれたりしました。私を「外国人」とか「日本人」とかではなく、「友達」として受け入れてくれました。ペルーという国を、いい国だなと心から思えた瞬間でした。

ペルーへの里帰りがきっかけで、両親から私につながるルーツを教えてもらいました。当時沖縄に住んでいた曾祖父・曾祖母は、ペルーで豊かな生活ができることを信じて、戦争から逃れるように十代で日本を離れました。しかし、現実には、農業を始めるために購入した土地が奪われたり、日系人であることで差別されたりと、ペルーでの生活は苦労の連続だったようです。母も、日本での生活について話してくれました。見た目は日本人なのに日本語が上手に話せず、差別と感じる辛い体験もたくさんあったそうです。そんなときも泣きながら日本語を勉強したという初めて聞く話に胸が苦しくなりました。なぜなら、私は、日本語が苦手な両親のことを友達や周りの人に知られるのを恥ずかしいと思っていたことがあったからです。でも今では、一生懸命に日本語を覚えようと頑張る姿や、苦労を見せず明るく前向きに生きる両親の姿は、私の誇りです。

私はペルーでの経験がきっかけとなり、貧困の中で一生懸命に生きている海外の子どもたちをボランティアとして支援する夢ができました。そのために、海外へ留学し、たくさんのことを学び、世界的視野や公平公正なものを見方を身に付けていきたいと考えています。

私の曾祖父、曾祖母が人生をかけた選択をし、苦労しながらも誇りを持ち続けて生きてきました。私の「ヒカリ・カロリーナ・ミハシロ・チネン」という名前にはそのルーツと受け継がれた絆と愛が詰まっています。私は大好きな日本で、日系人として、優しく、たくましく、誇りを胸に世界中に「ひかり」を届ける人生を歩んでいきます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、自分のルーツ、アイデンティティーがわかったことで、日本人でもペルー人でもない「日系4世」である自分をまるごと受け入れ、自分を好きになれ、そしておおきな夢を持つことができました。日本には、様々なルーツを持つ人、「自分らしさ」を隠している人などもたくさんいると思うので、その人たちに届けることができたらうれしいです。そして、人生を懸けて日本からペルーへと渡った天国の曾祖父、曾祖母に、家族みんな日本で胸を張って、笑顔で楽しく生きてます!と届けて安心させたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

『普通』を変える新たな社会へ

佐賀県 学校法人佐賀学園成穎中学校 3年

篠原 陽菜

そこには、「かっこいい」と言われたい自分がいた。私は髪を短くすることが以前から好きだった。そんな私にある日、「女子用のズボンを履いてみないか。」と提案があったのだ。

私は、その提案を耳にしたとき、正直嬉しかった。髪だけでなく、姿までかっこよくいることができる、と。だが、その反面、酷く恐れている自分もいた。皆と異なる姿でいる自分への冷たい視線や、異様だと思われてしまうのではないかという恐れ、と。

これは私がすべきことだ。恐れている暇はない。そう思い、自分の「着てみたい」という強い意思を貫き、ズボンを身にまとうことにした。

私がズボンをはいて生活を送り始めてから何週間かが経過した。同じ学校で共に生活を送る人達には、あらかじめ私がジェンダーフリーの制服にチャレンジすることについて全校朝会を通して説明がされていた。そのため、皆が私の服装を受け入れてくれた。中には、「似合ってるね」や「かっこいい」などと褒めてくれる人もいた。

私が在学する中学校には隣接する高校がある。その高校の生徒の人達にはもちろん何も伝えられていなかった。そしてある日、高校校舎を歩いていると、高校生の視線を感じた。何か陰口を言われている気がした。他の女子と違う服装をしている私を不思議に思ったのだろう。私はその日から高校校舎に立ち入ることに抵抗を覚えてしまった。自分の意思で着ている服装をバカにされた気がして、悲しくなってしまった。

私はこの体験から女子がズボンをはくことは、まだ普通ではないことを知った。そして、「新たな普通をつくりたい。」そう強く思った。

近い未来、ある女の子は言う。

「自分がかっこいいと言われる存在でありたい。だが、女子は女子らしい服装、男子は男子らしい服装が求められる。それが世で言う『普通』であるから。」

このようなことを言う女の子は、「普通」を変えたいのだと思う。らしさに捕らわれず、自分のありのままにいられる社会にしたいと思っているに違いない。

現実世界にある「普通」。その「普通」から少しでもずれると、暴言を吐かれる、冷たい視線で見られる。そんな世界、何か間違っている。私は誰にでも選ぶ権利があると考え。いつしか、LGBTと呼ばれるものが日常において当たり前、いわゆる「普通」となっていく。女の子がズボンをはき、ネクタイをつけている。男の子がスカートをはき、リボンをつけている。皆、今に生きている私達のように楽しく学び、話し、笑顔で生活を送っている。私はそんな未来になることを、心から願っている。

まだ、LGBTについて正しく理解しているとはいいがたい今の時代。もし、他人のありのままの姿を全員が受け入れることができれば、「普通」は変わるだろう。私がズボンをはいても、恐れることはもうなくなる。自分の意思を最優先にすることが可能になるのだ。また、私以外にも自分の望む姿を表現したいと思う男の子や女の子は大変喜ぶだろう。今という時代を苦しく、辛く生きる子供達の未来が笑顔溢れるものになるのだ。

私達の手で「普通」を変えることは困難かもしれない。だが、何一つできることがないわけではない。私達が未来に向けてできること。それは、一人一人の意見を尊重し、互いに歩み寄ること。共にこれからの未来を生きていく人間として、新たな「普通」いや、新たな社会を共に築いてゆこう。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、この主張を、自分の望む姿を出せずにいる人に届けたいです。LGBTの当事者であることを隠しながら学校生活を送る人は、きっと一人で抱え込み、辛い思いをしていると思います。そんな人に「らしさにとらわれる必要はない。ありのままがいい。」と伝えてあげたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

次は私の番

熊本県 上天草市立大矢野中学校 3年

千原 聖

みなさんにとって地元はどんな場所ですか。

そして、住みやすい場所ですか。

私にとって地元上天草市は、真っ青な海と緑の豊かさ、地元の人の優しさに溢れ、自分が辛い時、心を落ち着かせ、リフレッシュ・リセットさせてくれる場所です。

しかし、「住みやすい場所ですか？」と問われると、自信を持って「はい。」とは答えられません。なぜなら、現在、上天草市は少子高齢化が進み、地元を離れる若い人も多く、活気がなくなっているように感じるからです。そこで、私達はふるさとに誇りを持ち、地域経済の担い手となるため、「起業家体験学習」に取り組みました。その中で、「山・海・食」など様々な視点から、魅力的だと思う旅行プランについて話し合いました。

「次郎丸って山、知ってる？」

「初めて聞いた。一回登って見たかね。」

「海は、ゴミ結構落ちとるし、泳いどる人あんまおらんよね。」

「食べ物ってなんが有名と？」

「魚しか知らん…」

話し合いを進める中で、私達がこれまで地元にあまり興味を持っていなかったことにも気づかされました。

そこで、市役所の方のお話やパンフレットを参考にしながら、上天草市の魅力を再認識し二つのプランを作成しました。

まず一つ目のプランは、上天草市の自然を体験してもらうプランです。サイクリングやパラセーリングなど魅力的なアクティビティを盛り込んだり、自分で釣った魚を調理し、食べてもらう体験を考えたりしました。このプランは楽しみながら自然を満喫でき、リピーターの増加も見込めます。

二つ目のプランは、美味しい物を巡るプランです。車えびやパール柑、渡りガニなど、上天草市ならではの名物を車や自転車で移動しながら、堪能してもらいます。生産地や生産者が分かることで安心して購入してもらうことができます。

しかし、プランを作っていく中で、大変なこともありました。プランの費用計算や移動手段などです。上天草市はバスの本数が少なく、バスの通らない地域もあります。その不便さを改善するために、船を利用する方法も考えました。交通渋滞を避けられ、船から海に浮かぶ島々を眺めることができ、一石二鳥だと思います。

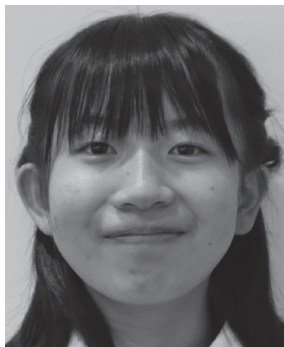
これまでの私は、将来、上天草市を離れるだろうと思っていました。しかし、起業家体験学習を通して、上天草市の良さを知り、将来上天草市を支える仕事に就きたいと思うようになりました。市の魅力を発信し、一人でも多くの人に訪れてもらうのが、目標です。

人口減少や働く場所の少なさなど課題はたくさんありますが、それらの課題一つ一つと向き合い、解決するためのアイデアを私達若い世代も提案していきたいです。テーマパークやビルなどがないからこそ、ひろがる風景や自然がそこにあります。みなさんも海の香りに包まれながらゆっくりとした時間を味わってみませんか。

私は今、上天草市が大好きです。地元について深く知ることで以前よりもっと好きになりました。起業家体験学習で、出会った方々の熱い思いを受け継ぎ、これから上天草市を盛り上げ、貢献できる一人になります。次は私の番です。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、この主張を地元上天草市の方々に届けたいです。なぜなら、上天草市のことを考えて発表した内容で、「最優秀賞」を獲得することができたからです。「上天草市を盛り上げる」ということが私の今後の目標ですが、それを一人で達成させることは難しいと思います。だから、この主張を多くの方に聞いてもらい、若い人達にも協力してもらいながら一緒に地元を盛り上げ、上天草市の発展に貢献していきたいと思っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

音を楽しむ

大分県 九重町立このえ緑陽中学校 3年

小野 空

「吹奏楽はソロプレイじゃない。チームプレイです」

この言葉を聞いた日から私の音楽に対する意識は大きく変わりました。

私が音楽に出会ったのは、保育園に通っていたころ。友達が鍵盤ハーモニカを上手に演奏していたのを見て、「カッコいい、私もやってみたい」と思ったのがきっかけです。それから私はピアノ教室に通い始めました。練習した曲を演奏すると、友達が「すごい」と褒めてくれて、それが自分のやる気や自信につながっていきました。

中学校に入学して、吹奏楽部に入部しました。選んだ楽器はクラリネット。使いこなせたらカッコよさそうだと思うからです。それに曲の中心となるメロディーを担当することが多いので、きっと誰よりも目立てるはずだと思いながら息を吹き込みました。

楽器にも慣れて、一年生の私もある程度音符の通りに曲が吹けるようになったときのことです。私に配られた楽譜は、クラリネットのサードというパートでした。メロディーではなく中途半端なイメージで、あまり目立たず、乗り気にはなれませんでした。合奏練習の音にそういう気持ちが表れていたのかもしれない。突然指導の先生が

「吹奏楽はソロプレイじゃない。チームプレイです。一人でも自分の音を吹かなかつたら曲になりません」

そう指摘したのです。まるで自分に向かって言われたようでした。確かにピアノは奏者が一人だけで、自身が思ったように表現する音楽です。でも、吹奏楽は一人ではありません。みんなで作る音楽です。一人ひとりの違う音を合わせて初めてハーモニーが響きます。先生の言葉を聞いて、私は自分の意識が間違っていたことに気づいたのです。その日から、私の意識が変わりました。「目立たないから」ではなく「目立たないからこそ精一杯やる」自分だけの音を大切に吹くことで、どんなパートになっても自分の奏でる音が音楽になる喜びを知ることができたのです。

三年生になって私はとうとうコンクールに出場する曲のメロディーを担当するファーストになりました。しかし今年の曲は自分のソロから始まり、低い音から高い音をきれいに繋げて吹く連符が難しく、なかなかうまくできずにスランプになってしまいました。一歩も前に進めずにただ楽器を握っているだけの私に、別のパートの同級生が話しかけてくれました。「この連符難しい。どうやって吹いたらいいと思う？」そう言いながら、何度も楽器を吹いている姿を見て、悩んでいるのは私だけではないのだと気づきました。何度失敗してもやり直し、だんだんと上手くなっている様子を見て、私ももう少し頑張ってみようと思えるようになり、一緒に練習してスランプから抜け出すことができました。仲間と助けあって、改めて吹奏楽はチームプレイだと感じることができました。

最後のコンクールは忘れられないものになりました。舞台裏の高い天井、無数に響く息づかい、ドアの向こうから聞こえる前の学校の演奏。そして独特な緊張感。舞台にあがり先生の指揮と同時に会場に私の奏でる音がゆったりと紡がれます。必死に練習したソロの部分もうまくいき、みんなと音があわさる瞬間、パズルが完成した時のようなわくわくした感覚でした。きっとこれが音楽、「音を楽しむ」ということなのだと思えました。コンクールの結果は銀賞。けれど後悔はしていません。舞台の上で感じた感覚は金賞よりもずっと価値があると信じているからです。

これから私は、来年も次のステージで「音を楽しむ」ことができるように、高校受験に全力で取り組みたいです。もちろん、ソロプレイではなく仲間とのチームプレイで。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

「音楽」とは、生きていく中の様々な場面で、常に姿を変えながら私たちと共にあるものです。そして、音楽と関わっていく中で、色々な人や曲に出会い、時にはくじけそうになってそれでも「楽しい」と感じる事ができた吹奏楽のキラキラとした毎日を、少しでも感じてもらえたらと思ったのがきっかけでした。ですが、文章を書く中で三年間の自身の体験をまとめるのはすごくむずかしくて、何度も書きなおしたのを覚えています。それでも最後まで諦めずに書き終えることができたのは、私を支えてくれた皆さんとの「チームプレイ」のおかげだと思っています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

これからの防災をどう考えるべきか

宮崎県 宮崎市立赤江中学校 3年

平屋 丈郎

私たちが生活している宮崎県は、毎年のように自然災害に直面しています。これまでに起こった自然災害には、火山の噴火や大雨による浸水や土砂災害、地震などがありますが、私の記憶に新しいのは、今年1月22日に発生し、最大震度5強を観測した日向灘沖の地震です。この地震の発生時刻は、夜中の1時でした。私が寝室で寝ていた時に地震は発生しました。

そのとき、私は、何をすべきか分からなくなりパニックになりました。揺れがおさまらず不安もつのっていきました。部屋の中も外も真っ暗で、寝室から避難しようとするれば、階段で転倒するかもしれない、暗闇のためガラスや落下物に気付かないかもしれない、避難グッズをすぐに持ち出すこともできないだろう。私は、この経験から、夜の地震は特に怖いと思いました。そして、夜間の災害に対応する力を身につけなければならないと強く感じました。そこで私は、夜間の地震災害から命を守るための備えについて、二つのことを考えたので、みなさんに提案します。

まず一つ目は、家の中での防災に取り組むことです。私は、小学5年の夏休みの自由研究で、「家の防災」というテーマで研究に取り組んだことがあります。そこで私は、災害時に倒れてきそうな家具を調べ、L字金具で固定したり、災害時に家族の避難の妨げにならないように家具の配置を考えたりしました。また、落下物による被害をおさえるために、賞状の額縁のガラス板をプラスチック製に換えました。この研究を通して、家の中にも人命を脅かす危険なものがたくさんあるということに気づきました。自分と家族の命を守るためには、それぞれの家庭が家の中での防災について考え直し、それを実際に実行してみることが大切だと思いました。私は、みなさんの家の中で「防災点検の日」を作って、それぞれの家庭で実際に点検することを提案します。

二つ目は、夜間の避難訓練を行うことです。なぜかという、暗闇の中では、方向感覚が怪しくなり、当たり前に通っている道路や部屋の中などでも、歩くのに時間がかかることが予想されるからです。また、そのような状況では、手助けが必要な災害弱者の存在にも気づきにくいと思います。だから、私は夜間の避難訓練が実施されれば、積極的に参加したいと思っています。暗闇の中で避難の仕方を確かめながら、支援物資を運んだり、避難場所を案内したりするなど、災害時に、一番に地域の力となって活動したいです。また、災害弱者と呼ばれる人と一緒に避難して、不安を少しでも取り除きたいです。ところが、夜間に避難訓練を実施している市町村はまだ少なく、南海トラフ巨大地震で被害が想定される宮崎県の5市は、いずれも実施していないそうです。訓練を通して、昼間と比べて町の様子がどのように変化しているのかを知ること、新たな防災対策を考えることができると、私は考えています。私は、暗闇の中でも住民がスムーズに避難できるように、「夜間避難訓練の実施」を提案します。

私たちの世代は、社会のいろいろな分野において、新しい視点から物事を考え、それを提唱し、実現させていくという役割を担っています。私は今回、防災という分野において意見を提案しました。これらを提案するだけでなく、どのようにすれば行動に移すことができるのかを考えることが大切です。私は、まず、もっと郷土のことを知り、自分が育った地域や宮崎県をリードできるような社会人になりたいと思います。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

日本は、世界の中でも地震大国と呼ばれており、これからの日本で生きる私たちは、地震災害と向き合っていくなければなりません。私は、今回、「家の中での防災」「夜間避難訓練」の実施を提案しましたが、まだまだ、夜間の災害に対応するためにしなければならないことは、多くあると思います。例えば、登下校中の災害から命を守るための行動を考えたり、避難所での生活について考えたりすることです。このような課題を一つずつ解決していくために、私は、将来、現場の意見をしっかりと行政に届けられるような仕事に就きたいと考えています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

幸せになるチカラ

沖縄県 糸満市立西崎中学校 3年

大城 希亜良

「もうゆるしてください」親に甘えたい盛りのわずか五歳の女の子が命乞いのメモを残して亡くなった虐待事件。

我が子を自ら虐待する。その事件から四年、虐待関連の事件は減るどころか、全国の摘発件数は三十年連続で増え続け、過去最多の二十万件を超えるといえます。

親子。生まれてから死ぬまで続く関係。自分という存在の証明。辞書にはそう書いてあります。自分を産み育ててくれた人を「親」だと認識し、その関係性が切れることはないみんなはそう思っているでしょう。

私には両親がいません。生後半年で祖父母の元に預けられたと聞きました。父は仕事の都合で一緒には暮らせず、母の存在はよくわかりません。物心ついた頃から両親がいない生活が当たり前なので、何の疑問も持たず生きてきました。

保育園から小学校に上がるまで、登下校はいつも祖母と手をつないで通い、祖父にはお風呂に入るのが怖い夜は、何時間もドアの前で見張り番をしてもらったりしました。休日には蝉とりやフグを捕まえに行ったり、運転ができない祖母とバスに乗って買い物に出かけたりして毎日が楽しく、不満も寂しさも感じることはありませんでした。

幼い私に寂しい思いをさせまいと、周囲がかなり頑張ってくれていたと、今の私は理解できるようになりましたが、当時は誕生日や運動会に、親戚じゅうが集まりお祭り騒ぎ。いつも話題の中心で「なんて幸せ者なんだ」と能天気な私でした。

でも、高学年に入ると「お友達のお親」の存在を羨ましく思うようになり、私にはなぜ両親がいないのかと祖父母に聞くようになりました。事情があってもどうしても育てられなかったことを聞かされても、わかるようなわからないような何ともスッキリしない気持ちでした。「なぜ、私だけ。」言いたくても祖父母の顔を見ると、それだけは言えず、言葉を飲み込んでしまいます。

親による「虐待」。それは何も暴力的なことに限らないと聞いたことがあります。育児を放棄する、つまり我が子を育てないことも虐待だとすると、私はゾッとします。どんな理由があっても、親から手放されたと知らされた子は、どれほど辛いものなのでしょう。その悲しみや怒りは、どこにぶつければいいのかいのでしょうか。

もしかすると、私自身も生後半年で施設に預けられてもおかしくなかったと思うと、ニュースの中の出来事は、他人事ではなくなりました。

一方で、ひとり親世帯の数が増加し、子どもの貧困増加も問題視されています。そのほとんどの原因が離婚であるといえます。大人たちの様々な理由で、子どもが振り回されるという現実がここにはあるのです。

生後半年の私を施設に預けず必死に育ててくれた祖父母。何かあると、駆け付けてくれる親戚。姉妹のように接してくれるいとこ。常にそばに居て応援してくれるたくさんの人たちのおかげで、私は幸せに生きています。

「親がそばにいるから幸せ」ではなく、たとえどんな環境に置かれたとしても、どれほど愛されて育つかが大事だと思うのです。

私には二つ夢があります。1つは美容師になってたくさんの人を幸せにすること。もう1つは、私自身が幸せであり続けること。子供ができたなら祖父母が私に注いでくれたように愛情いっぱい育てることです。

みんなにももらった幸せになるチカラで、これからも前を向いて歩いていこうと思います。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

自分がおかれた境遇に何の違和感をもつことなく生きてきましたが、この主張に挑戦することをきっかけに思うこともたくさんありました。また、祖父や祖母だけでなく、支えてくれた周りの人たちに愛されて生きてきたことも知ることができました。これからも、支えてくれた方や周囲の人たちに感謝の気持ちを忘れず、私らしく前向きに頑張っていきたいと思っています。

实施概要

第 44 回少年の主張全国大会 ～わたしの主張 2022 ～について

全国大会開催要綱（web 開催）

1. 趣旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張全国大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。

2. 開催期間

令和 4 年 11 月 1 日（火）～ 11 月 30 日（水）

※審査結果は 11 月 13 日（日）に掲載します。

3. 開催方法

上記の期間、少年の主張全国大会 WEB ページに全国大会出場者（12 名）の主張発表動画を掲載し、11 月 13 日（日）に審査委員会で審査した結果を掲載します。

なお、全国大会に選出されなかった作品については作文を掲載します。

【少年の主張全国大会 WEB ページ】 <https://www.niye.go.jp/services/plan/syutyou/>

4. 対象

日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

5. 主催

国立青少年教育振興機構

6. 協力

都道府県、青少年育成道府県民会議、全国青少年育成県民会議連合会、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会

7. 後援

内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

8. 主張発表者（出場者）・発表内容

（1）主張発表者

各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。

（2）ブロック代表定数

全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。

○北海道・東北ブロック・・・ 2 名

○関東・甲信越静ブロック・・・ 3 名

○中部・近畿ブロック・・・ 3 名

○中国・四国ブロック・・・ 2 名

○九州ブロック・・・ 2 名

（3）発表内容

ア、社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

イ、家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

ウ、テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。

（悪い例：○○県にある○○旅館 良い例：○○県にある旅館 など。）

（4）発表時間

5 分程度（400 字詰原稿用紙 4 枚程度）

9. 表彰

- (1) 全国大会出場者全員（12名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35名）に同理事長より努力賞を贈ります。
- (2) 全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。
- (3) 全国大会出場者全員（12名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

10. その他

- (1) 応募は、各青少年育成都道府県民会議等を通して行います。
- (2) 全国大会に応募した作品の著作権は、国立青少年教育振興機構に帰属します。
- (3) 全国大会には、本人の写真と氏名、学校名等を掲載いたします。
- (4) 全国大会実施後に作成する報告書（作品集）について、全国大会に応募（推薦）された47作品全てを掲載し、本人の氏名及び学校名等を公開するとともに、関係機関に配布します。
- (5) 全国大会出場者で希望する方は、受賞した翌年に当機構が実施する「ミクロネシア諸島自然体験交流事業」（7月～8月の10日程度）の参加者（中学生の場合）またはサブリーダー（高校生の場合）として参加（経費は当機構負担）することができます。ただし、新型コロナウイルスの感染状況により、交流事業を中止する場合があります。

少年の主張都道府県代表者の推薦（作品の募集）について

1. 都道府県大会の開催

青少年育成都道府県民会議等主催により開催し、青少年育成市町村民会議、市町村教育委員会、中学校等の協力を得て、広く作品の募集及び市町村大会、地区大会等を開催し、その選考を経た各代表者の中から都道府県大会において最も優秀な者を選考した。

2. 都道府県大会実施概要 69 ページ参照

全国大会出場者選考及び大会審査について

1. 全国大会審査委員会の設置

作品を審査するため、青少年団体、行政、学識経験者や教育関係団体、マスコミ等、複数の分野から審査委員を選任した。

審査委員長	宮崎 緑	千葉商科大学 国際教養学部教授
審査委員	井上 智朗	国立青少年教育振興機構 理事
	今井 純子	日本放送協会 解説委員
	江田 明弘	日本 PTA 全国協議会 副会長
	遠藤 哲也	全日本中学校長会 生徒指導部長
	黄地 吉隆	文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長
	児玉 大輔	内閣府政策統括官（政策調整担当）付 参事官（青少年企画 / 支援担当）
	萩原なつ子	国立女性教育会館 理事長
	平澤 幸芽	第 39 回少年の主張全国大会 内閣総理大臣賞受賞者
	古沢由紀子	読売新聞東京本社 編集委員

2. 審査方法及び審査基準

①事前審査（全国大会出場者選考の為の審査）

事前審査（作文審査・出場者選考審査）は、全国5ブロックごとに協議を行い、全国大会出場候補者を選出。全国大会出場候補者の中から合計12名を全国大会発表者として選考。

<作文審査>（在宅審査）

[日 時] 令和4年9月30日（金）～10月14日（金）

[内 容] 都道府県代表作文を読み、主に論旨について審査を行う

[基 準] 以下の基準について、相対的評価を行う

- ①鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- ②新しい情報や視点があるか
- ③個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- ④提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- ⑤論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

[方法] ①ブロックごとに審査を行う

②評価

全国大会出場者としてふさわしいと思われる作文をブロックごとに5つ選考し、上位から順番に5点、4点、3点、2点、1点を付与する

<全国大会出場者選考最終審査>

[時期] 令和4年10月21日(金)

[場所] 国立オリンピック記念青少年総合センター 大会議室

[内容] 審査委員会での審議により、全国大会出場者12名を決定する

[基準] 以下の基準について、相対的評価を行う

①作文内容が優れており、共感と感銘を与えているか

②説得力のある話し方であるか

③話しぶりに熱意と迫力があるか

[方法] ①ブロックごとに協議を行う

②作文審査集計をもとにした協議により、全国大会出場候補者を絞り込む

③必要に応じ、全国大会出場候補者の動画を視聴し、論調の審査を行う

②全国大会審査

[日時] 令和4年11月9日(水)

[場所] 国立オリンピック記念青少年総合センター 大会議室

[内容] 全国大会出場者12名の動画を視聴し、総合的な審査を行い、協議により内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、国立青少年教育振興機構理事長賞の三賞を決定する

[基準] ①共感と感銘を与えていたか

②説得力のある話だったか

③熱意と迫力があつたか

④落ち着いて話していたか

⑤聴き手に感動を与えていたか

③設置された賞

全国大会出場者	(三賞)	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞	全国大会出場者のうち、優秀な3作品に授与した。
		審査委員会委員長賞	全国大会出場者のうち三賞のほか、審査委員長の評価が高い2作品に授与した。
		国立青少年教育振興機構奨励賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査において選出され、全国大会に出場したことを賞し、全国大会出場者全12名に授与した。
		国立青少年教育振興機構努力賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査に推薦されたことを賞し、都道府県代表者に授与した。

少年の主張大会応募者総数等

応募者数	391,326名
参加学校数	3,748校
全国大会(WEB開催)視聴者数	10,990名

都道府県代表者学年別人数

学年	計
中3	40
中2	5
中1	2
計	47

審査委員の感想



気づきと共感に学ぶ

国立青少年教育振興機構 理事

井上 智朗

長引くコロナ禍の影響で、本年度の全国大会もWeb開催となりました。

今回の作文から、中学生のたくましさや力強さを感じるとともに、誰一人取り残さない持続可能な社会へあらためて「思いやり」の大切さを実感しました。特に印象に残った作文について感想を述べさせていただきます。

前橋さんの「あなたの声、心に届け」

障がいにごこだわっていたのは自分自身だったことに気付いた時の前橋さんの心境が、ストレートに胸に刺さり心が震えました。本当の思いやりとは、自分が思い願う優しさだけではなく、相手の気持ちに気付き、寄り添い、共感することだということをこの作文から痛いほど感じました。

赤川さんの「日本を耕す」

農業に対する考え方の変化が素直に伝わり、清々しささえ感じる素晴らしい作文発表でした。

これまでの自分を見つめなおし、親の背中に学び、これからの課題にチャレンジしていく決意を確かなものとする。まさに赤川さんの農業に対する真つすぐな気持ちと親への尊敬の念がひしひしと伝わってくるものでした。

阿久津さんの「私が育てる『結（ゆい）』」

米作りへの愛が溢れている作文で、揺るぎのない情熱とあくなき探求心を強く感じ、最も心を揺さぶられた作文の一つでした。「小学校六年生の時、小さい田んぼを父から貰いました。」この言葉にすべてが凝縮されていると感じました。米作りに対する作者の熱い思い、父親への感謝と尊敬の気持ち、お父さんのわが子に対する愛情等々、「結」は生まれるべくして生まれたと感動しました。

ここでは、3つの作品について感想を述べましたが、その他のみなさんの作文からも多くの学びと共感があり、多くの感銘を受けました。

最後に、全国大会出場者に限らず、本大会に応募いただいた全国の中学生の皆様に心から感謝申し上げます。皆さん一人一人の声が必ず誰かに届くことを心から願っています。



行動し発信することで、地域や社会を動かす力に！

日本放送協会 解説委員

今井 純子

コロナの影響で、まだ、生活にいろいろな制約がある中、中学生の皆さんは、そんな制約を吹き飛ばし、家族や地域を支えよう、困っている人を助けようと行動し始めている。そんなたくましさを、今回、皆さんの主張から強く感じました。

山梨県の前橋さん。黄色い補聴器をつけ、ひたすら前向きに明るく毎日を生きている聴覚障害の妹さんから、時に教えられ、支えようという思いが、ストレートに伝わってきました。

栃木県の阿久津さん。小学生のころから「自分」の田んぼで、こだわりのお米を育てている。それだけでなく、自然食品を扱う店でパッケージをデザインして販売したり、キッチンカーの料理での提供につなげたり。たくさんの人とながって人と人を結びたいという、夢に向かって、一歩も二歩も歩き出している。その行動力に、脱帽の思いでした。

宮城県の浅野さん。地震の体験から、バリアフリーの大切さに気付き、「手話」を学び始めた。一人一人が誰かを支え合える社会を担う人間になりたいという思いが、手話を交えた主張から、強く伝わってきました。

他にも、挨拶を通じた見守りで、支えあう地域を創っていききたい（岐阜県の平田さん）。地域を盛り上げるアイディアを提案していきたい（熊本県の千原さん）など、中学生のみなさんが、身近な課題を解決するために考え、行動し始めていることに、大人もがんばらなければと、背中を押される思いでした。行動するとともに、自分の言葉で発信していくことが、きっと、多くの人々の心を動かし、地域や社会を動かす力になっていくと信じています。ぜひ、これからも考え、行動し、発信し続けることで、地域や社会を動かしてください！



大会の意義

日本 PTA 全国協議会 副会長

江田 明弘

昨年に引き続き二回目の審査員として関わりましたが、原稿から読みとり感じたことと、子供たちの声を通して受け止めた言葉がこんなにも違うものかと思いました。エッセーとしてではなく、「少年の主張」と名のごとく声にして伝えるその意味を感じたところです。この大会に向け、原稿を何度も何度も繰り返し読みはもちろん発声の練習をしてきたことと思います。自分の力を十分に発揮できた人もいれば、思うように力を出せなかった方もいらっしゃると思います。そこで得た気づきや積んだ努力はきっとこれからの人生の中で活かされることだと思います。

日々の経験から得られた、素晴らしい気づきや学びを思ったまま、感じたままに主張しているのがよく分かりました。中学生らしい様々な視点で問題提起をし、その諸問題に対して何を想い、何を目指すか。私たちもその言葉の意味をしっかりと受け止めなければいけないと思います。より良い未来を創るために熱い想いを持つ皆さんの成長が大変楽しみです。

社会の中で暮らすということは良いこともあれば、悪いこともある。楽しいことばかりではありませんし、面倒だと思ふようなことがたくさんあります。人と人とのつながりの中で生きていくということはそういうものです。多種多様な考えがあれば、そこには変だと感じたり、何かおかしいと思ふ事は当たり前のことです。そんな社会生活で感じたギャップや違和感を中学生らしく違った視点で捉え、自分自身の考えを伝えることに意味があり、これからの国に未来を担っていく皆さんの社会人としての自覚が高まるのではないかと思います。この大会の大きな意義を改めて感じています。



中学時代の思いを大切に

全日本中学校長会 生徒指導部長

遠藤 哲也

全国一斉の臨時休校から3年が経ち、3年生から1年生まで、感染症前の中学校生活を知る在校生はいない。学校における感染症まん延防止は徹底され、「3密回避」や「マスク着用」、そして「黙食」まで学校生活において定着した。一方、1人1台端末に代表されるように校内におけるICT活用は飛躍的に進展したこともあり、感染症まん延前の「当たり前」が当たり前でなくなったことも多い。しかし、今大会では、以前と変わらない中学生の姿があった。新しい気づきに動揺したり、将来への夢や希望を熱く語ったりする、私が教職に就いた30余年前から変わらぬ中学生の思いがあったことに安堵と喜びを感じた。本人の努力はもちろんのこと、ウィズコロナ時代にあって、子どもたちの健全育成を願う各御家庭や地域、そして全国の各中学校における親身な御支援あつてのことと感謝を申し上げたい。

特に印象に残った栃木県の阿久津さんと長崎県の赤川さんについて述べたい。阿久津さんは、祖父と父から指導を受け、自分の田んぼでの米作りや販売を通して、農業の楽しさを実感し、将来のやりたいことを見つける。また、赤川さんは、兼業農家に生まれながらも農業に否定的であったが、ある野菜の成長をきっかけに農業の魅力に気づき、農業に関わっていきたく考えるようになる。阿久津さんは、米作りから人と人を「結ぶ」こと、赤川さんは、ICTやAIを活用した日本の「新しい農家の働き方」を将来の目標として力強く主張してくれた。同じ「農業」というテーマにありながら、両者それぞれの気づきや心の変化は、環境や年代を問わず、多くの人に共感と感銘を与えるものとする。

今大会に応募した40万人に迫る中学生一人一人に敬意を表したい。中学時代に気づき、考えたことを礎とし、これからも続くかもしれない激動の時代をたくましく乗り越え、誰もが幸せを実感できる世界を実現してくれることを心から願う。



大きな一歩を踏み出すために

文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長

黄地 吉隆

長引くコロナ禍により、学校や家庭生活に支障をきたす中、第44回少年の主張全国大会に応募いただきました約39万人の皆様にご心からお礼と感謝を申し上げます。

多くの中学生たちが少しでも未来をよりよくしたいと感じてくれていることに、大変うれしく思います。

今年も全国大会がweb開催となり、発表を直接拝見できず残念でしたが、全国大会に出場された12名の発表は、家庭や学校生活の中での気づきや、未来への希望や提案など、どれもが自分自身で答えを見出したものであり、熱い思いが伝わってくる大変素晴らしい内容でした。

今回、内閣総理大臣賞を受賞された前橋真子さん（山梨県）は、重度の難聴を患う妹との会話から、障がいに対する考え方について深く考えるきっかけを見つけました。ハンディキャップというフィルタを通して世界を見ているのは自分自身だったと感じ、障がいをもった人に寄り添う気持ちが、社会の笑顔を増やすことにつながる、という発表には、前橋さんの温かい心がこもっていました。

また、文部科学大臣賞を受賞された赤川明信さん（長崎県）は、父親が行っている農業の手伝いを通して、自身で植えた作物が大きく成長していく様子から、命について考える機会を得ました。また、農業という職業は、感動や喜びを得ることができ、誇れる仕事であると感じたことで、「新しい農業の働き方」を考え、「日本の未来を明るくすること」に繋げていきたいと発表してくれました。これからの日本の農業だけでなく、日本全体が明るくなっていくように感じました。

中学生の皆さんがこれから歩んでいく時代は、デジタル化やグローバル化の進展等によって、これまでの時代とは大きく異なってきています。本大会を通じて皆さんが体験した、自らの考えを整理し、文章にまとめ、発表するといったチャレンジは、これからの時代を歩んでいく際の、大きな一歩を踏み出す後押しになることでしょう。

社会は課題で溢れています。その課題を、皆さんが、自分なりに考え、答えを見出していくことが、より良い未来に繋がっていくと信じています。皆さんの今後の御活躍を期待しております。



心の中を覗くこと、心の中を晒すこと

内閣府政策統括官（政策調整担当）付参事官（青少年企画 / 支援担当）

児玉 大輔

私たちは社会の中で暮らしています。自分のほかに社会を構成しているのは他人。他人は自分ではないので、黙っていても自分の考えていることはわかりません。以心伝心という言葉がありますが、そうした関係を築くには長い時間を共有することが必要です。また、「忖度」という言葉がネガティブなイメージをまとうようになって久しいですが、他人の思いを押し量ることは決して非難されるべきことではありません。ただ、他人の思いを押し量ることは非常に難しく、ときに的外れだったり、先回りが過ぎたりすることもあります。

そこで、私たちは言葉を使います。ただ、言葉を紡ぐという作業は、とても泥臭く、つらいものです。心の中には、友達には隠しておきたい感情があるかもしれません。嫌気がさすほどの自分勝手さが宿っているかもしれません。それでも、言葉にしなければ伝わらない思いを掬い上げるため、ひたすら自らの心と対話することになります。

「少年の主張」に応募された40万人近い中学生の皆さんが、こうした葛藤に正面から向き合ったことに、心からの敬意を表します。きっかけは単なる学校の課題だったかもしれません。でも、それを踏み台にして自分の心の中を覗き、心の中を晒すことができた。それだけで皆様の挑戦は大きな価値を持つものになったと思います。

そうした思いを含めた言葉を他人に届けるもの。一つは文字ですし、もう一つは声です。審査の過程で、字面を追うだけではそれほど気にならなかった作文が、声を伴う「主張」となることで胸に迫ってくる印象を抱いた場面がありました。書いた言葉は消すことができます、しかし、発した言葉は消えることはありません。声は、その声を発した場の空気感を色濃く纏い、それゆえ、私たちの思いをより鮮明に届ける力がある、そんな思いを抱きました。

だから、審査に携わった者としてささやかな希望を述べておきます。今回は、各ブロックの代表の主張を会場で聴いてみたい、ひりつくような緊張感の中で吐き出される言葉に耳を傾けたい、そして、万雷の拍手の中、緊張が解けて破顔一笑するあなたの姿を見たい、と。



なぜ？ どうして？ を大切に

国立女性教育会館 理事長

萩原 なつ子

今回、初めて少年の主張全国大会の審査委員を務めました。作品を審査するにあたり意識したことは自分自身の中学生の時に思いを馳せながら読むことでした。私の頃はどのような時代だったでしょうか。どのようなことが社会的課題としてクローズアップされていたのでしょうか。そして私自身はそれらの課題に対して日々何を思っていたのでしょうか。自身の中学生時代を思い出しながら、全国5ブロックから推薦された力作揃いの作品を読ませていただきました。いずれも日常生活の営みの中の小さな気づき、発見やどうして？という疑問を“問い”におき、自らの言葉で具体的なエピソードを交えながらしなやかに、軽やかに、時には鋭く論じているものばかりでした。きっと、その思いをしっかりと伝えるために何度も何度も推敲を重ねて書き上げたのでしょう。

最終審査に選ばれた12編の作品には、人権、多様性、平和、共生といった少し重めのテーマにもかかわらず、思わず笑みがこぼれたり、なるほどと感心したり、共感できるエピソードや提言がしっかりと入っていて、一字一句が心に残っています。さらになぜそのような課題が生まれてしまうのか、その背景や仕組みや価値観にまで迫るものが多くみられました。そして各賞を決定するために拝見したプレゼンテーションでは、文字だけではなくみ取れなかった作者のより深くて熱い思い、実感や手触り感が、表情や声からしっかりと伝わってきました。

私は環境社会学者として環境問題について長年調査・研究をしてきましたが、その原点は中学生時代にテレビや新聞に連日のように報道されていた公害問題への関心でした。感受性豊かな中学生時代のなぜ？ どうして？ なんか変？ という思いが基礎となっているように思います。「少年の主張」への参加をひとつの糧として、未来可能性にあふれるみなさんが、「誰一人取り残さない」社会を創る担い手として活躍されることを心から期待しています。



言葉で伝える、ということ

第39回少年の主張全国大会 内閣総理大臣賞受賞者

平澤 幸芽

初めに、各大会に出場された弁士の皆様、大変お疲れ様でした。感銘を受ける主張が多く、貴重な経験をさせていただいたことに改めて感謝いたします。皆様の弁論を読み、聞き、まるで五年前の大会に出場した自分がそこにいるようでした。姿勢をはじめ、声のトーンや間の取り方、総じて伝わりやすさにつながるよう練習したことを今でも覚えています。

さて、自身の弁論と向き合ったこの数か月間は皆様にとってどのような期間になったのでしょうか。言葉を選ぶということは難しくなかったのでしょうか。想いを伝えるということに苦労はしなかったのでしょうか。私は現在、大学で言葉を主専攻とする学科に在籍し、言葉を使うことの責任や想いを伝えるということの難しさに日々頭を悩ませています。その気持ちは、私が弁士として出場した大会においても同じでした。「言葉で伝える」ということ、「想いが伝わる」ということは、いかに難しくいかに工夫が必要か五年たった今も考え続けています。

近年、私たちはSNSを通していつでもどこでも指一本でつながることが出来ます。指一本の手軽さから世界には言葉が溢れすぎて、もしかしたら私たちは、自分たちの使う言葉に少しずつ鈍感になっているかもしれないと考えることがあります。もし、今回の大会で伝えることの難しさを感じたのならば、その感覚を大切に、そして忘れないでいてほしいです。本来、言葉を使い伝えるということは大変難しく、責任が伴うものです。そしてそれと同じくらい、伝わるということは何にも代えがたい喜びです。

顔も本名も隠して言葉を発することが出来る今に、ひとりで壇上に立ち自分の言葉を紡いだ皆様を私は心の底から誇りに思います。この経験が皆様のこれからに生かされることを願っています。



新たな時代の扉を開ける若者たち

読売新聞東京本社 編集委員

古沢由紀子

「少年の主張」の審査担当者としては、いつの間にか古株になってしまった。回を重ねても、そのたびに驚かされるのは、中学生の選んだテーマから、思いがけない新たな時代の潮流や息吹が感じられることだ。それは、大人がステレオタイプな思考から発想する枠組みを軽やかに超えており、若者の鋭敏な感覚にはっとさせられる。

そんな視点で応募作を見ると、明らかに前年と異なるのが、新型コロナウイルスの影響をテーマとしたものが激減していたことだ。会場に集まって全国大会を行うことは今年もかなわなかったが、マスク生活の息苦しさや部活動が思うようにできなかった経験などが目立った昨年と異なり、生徒たちがいつもの日常生活を取り戻しつつある状況がうかがわれ、安心させられた。

今回の審査結果で特筆すべきは、文部科学大臣賞の「日本を耕す」（長崎県の赤川明信君）、国立青少年教育振興機構理事長賞の「私が育てる『結』」（栃木県の阿久津結花さん）の2作品がともに、農業への熱い思いをテーマとしていたことだろう。ここ数年、農業を題材に選ぶ生徒は目立つ傾向にある。過疎化や担い手の高齢化が進み、耕作放棄地が増える現状の中で、若者の関心と地域への愛着が育ってきているのは頼もしい。

赤川君は父の指導で野菜の苗を育てた喜びとともに、AI（人工知能）の可能性にも言及しており、データ分析などが鍵を握ると言われる農業のトレンドも見据えている。阿久津さんは実際に父から小さい田んぼを譲り受け、自ら育てた米に「結」と名付け、出荷まで手がける実践が素晴らしい。阿久津さんも既に、SNSなどを活用したアイデアを膨らませている。こうした活動の背景には、子どもたちの挑戦を温かく見守り、後押しする大人の存在があるのだ。

応募作にはロシアのウクライナ侵攻を憂慮する発言も目立った。沖縄に一時住んだ経験から、戦争体験や平和学習をもっと幅広い地域で行ってほしいと訴えた神奈川県の角野理望さん、ジェンダー平等に関する改革を自校で提案したいと考える鹿児島県の川上悠来さんの主張にも新鮮な印象を受けた。

全国から集まった作品の応募数について言えば、都道府県ごとにかなりの差がある。自分をみつめ、中学生ならではの新たな視点を発信する貴重な機会を、もっと多くの生徒たちに活用してもらいたいと願っている。

少年の主張全国大会を振り返って

<参考資料>

「少年の主張全国大会」応募者数の推移

開催年度	開催回数	参加学校数	応募者総数 (人)	中学校在学者数 (人)	在学者数に対する 応募者の割合
1979 (昭和 54) 年	第 1 回	—	—	約 496 万 7 千	—
1980 (昭和 55) 年	第 2 回	—	—	約 509 万 4 千	—
1981 (昭和 56) 年	第 3 回	—	約 50,000	約 529 万 9 千	0.9%
1982 (昭和 57) 年	第 4 回	—	約 62,000	約 562 万 4 千	1.1%
1983 (昭和 58) 年	第 5 回	—	約 120,000	約 570 万 7 千	2.1%
1984 (昭和 59) 年	第 6 回	—	約 250,000	約 582 万 9 千	4.3%
1985 (昭和 60) 年	第 7 回	3,524	387,272	約 599 万 0 千	6.5%
1986 (昭和 61) 年	第 8 回	3,649	269,518	約 610 万 6 千	4.4%
1987 (昭和 62) 年	第 9 回	4,162	536,526	約 608 万 1 千	8.8%
1988 (昭和 63) 年	第 10 回	4,011	661,234	約 589 万 6 千	11.2%
1989 (平成 元) 年	第 11 回	4,359	774,035	約 561 万 9 千	13.8%
1990 (平成 2) 年	第 12 回	4,103	701,183	約 536 万 9 千	13.1%
1991 (平成 3) 年	第 13 回	4,176	735,862	約 518 万 8 千	14.1%
1992 (平成 4) 年	第 14 回	4,185	846,735	約 503 万 7 千	16.8%
1993 (平成 5) 年	第 15 回	4,166	812,370	約 485 万 0 千	16.7%
1994 (平成 6) 年	第 16 回	4,165	826,575	約 468 万 1 千	17.7%
1995 (平成 7) 年	第 17 回	4,021	757,791	約 457 万 0 千	16.6%
1996 (平成 8) 年	第 18 回	4,333	765,071	約 452 万 7 千	16.9%
1997 (平成 9) 年	第 19 回	4,245	836,467	約 448 万 1 千	18.7%
1998 (平成 10) 年	第 20 回	4,170	858,146	約 438 万 1 千	19.6%
1999 (平成 11) 年	第 21 回	4,213	868,574	約 424 万 4 千	20.5%
2000 (平成 12) 年	第 22 回	4,187	802,185	約 410 万 4 千	19.5%
2001 (平成 13) 年	第 23 回	4,185	790,383	約 399 万 2 千	19.8%
2002 (平成 14) 年	第 24 回	4,059	693,114	約 392 万 9 千	17.6%
2003 (平成 15) 年	第 25 回	3,841	534,730	約 374 万 8 千	14.3%
2004 (平成 16) 年	第 26 回	3,822	551,723	約 366 万 4 千	15.1%
2005 (平成 17) 年	第 27 回	3,944	542,032	約 362 万 6 千	14.9%
2006 (平成 18) 年	第 28 回	4,015	544,120	約 360 万 2 千	15.1%
2007 (平成 19) 年	第 29 回	4,044	510,763	約 361 万 5 千	14.1%
2008 (平成 20) 年	第 30 回	4,018	498,029	約 359 万 2 千	13.9%
2009 (平成 21) 年	第 31 回	4,126	511,519	約 360 万 0 千	14.2%
2010 (平成 22) 年	第 32 回	4,204	515,232	約 355 万 8 千	14.5%
2011 (平成 23) 年	第 33 回	4,142	524,061	約 357 万 3 千	14.7%
2012 (平成 24) 年	第 34 回	4,127	550,112	約 355 万 2 千	15.5%
2013 (平成 25) 年	第 35 回	4,257	565,500	約 353 万 6 千	16.0%
2014 (平成 26) 年	第 36 回	4,172	563,777	約 350 万 4 千	16.1%
2015 (平成 27) 年	第 37 回	4,253	547,977	約 346 万 5 千	15.8%
2016 (平成 28) 年	第 38 回	4,278	555,559	約 340 万 6 千	16.3%
2017 (平成 29) 年	第 39 回	4,188	542,236	約 333 万 3 千	16.3%
2018 (平成 30) 年	第 40 回	4,298	522,229	約 325 万 1 千	16.1%
2019 (令和 元) 年	第 41 回	4,171	496,492	約 321 万 8 千	15.4%
2020 (令和 2) 年	第 42 回	2,660	252,732	約 321 万 1 千	7.9%
2021 (令和 3) 年	第 43 回	3,741	404,266	約 322 万 9 千	12.5%
2022 (令和 4) 年	第 44 回	3,748	391,326	約 320 万 5 千	12.2%

※中学校在学者数は、文部科学省令和 3 年度学校基本調査（確定値）区分「中学校」を参考にしています。

「少年の主張全国大会」三賞等受賞者一覧

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第1回	昭和 54年度	総理府総務長官賞	北海道	利尻町立沓形中学校	3年	池原広文	校門に思う
		総理府総務長官賞	栃木	塩谷町立大宮中学校	3年	小堀芳広	私の希望
		総理府総務長官賞	岐阜	美山町立美山北中学校	1年	尾関良子	私の家庭
		総理府総務長官賞	大阪	豊中市立第5中学校	1年	長岡信男	はばたけ未来に
		総理府総務長官賞	岡山	倉敷市立黒崎中学校	1年	中野恵美	私の訴えたいこと
総理府総務長官賞	佐賀	武雄市立川登中学校	3年	松尾直子	少年として訴えたいこと		
第2回	昭和 55年度	内閣総理大臣賞	新潟	村上市立村上第1中学校	3年	江見寛子	今、私達にできること
		総理府総務長官賞	広島	福山市立城東中学校	3年	森雅子	生きる
		文部大臣賞	香川	三野町立三野津中学校	3年	佐川圭三	「やべち」に学ぶ
第3回	昭和 56年度	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立雄新中学校	3年	早川明美	心の糧
		総理府総務長官賞	鹿児島	鹿児島市立西紫原中学校	2年	寺田美重	身障者として訴えたいこと
		文部大臣賞	大阪	堺市立庭代台中学校	3年	寺西洋子	受験・仲間・心
第4回	昭和 57年度	内閣総理大臣賞	栃木	佐野市立城東中学校	3年	松本由紀子	私は教師になりたい
		総理府総務長官賞	兵庫	神戸市立御影中学校	1年	和田浩介	少年として訴えたいこと～エチオピアで見たことから～
		文部大臣賞	広島	呉市立両城中学校	2年	竹下愛	私の決心
第5回	昭和 58年度	内閣総理大臣賞	高知	伊野町立伊野中学校	1年	山勢憲一郎	心をこめて「ありがとう」
		総理府総務長官賞	栃木	宇都宮市立星が丘中学校	3年	福田寿美江	両親に学ぶ
		文部大臣賞	新潟	六日市町立六日町中学校	3年	関 昭典	今、学校で考えていること
第6回	昭和 59年度	内閣総理大臣賞	長崎	有家町立有家中学校	2年	松島吉宏	鳴らないチャイム
		総務庁長官賞	富山	小杉町立小杉中学校	1年	定司美恵子	私の希望
		文部大臣賞	新潟	巻町立巻西中学校	3年	小林三枝	乗り越えて今
第7回	昭和 60年度	内閣総理大臣賞	愛知	名古屋市立宮中学校	3年	大島幸子	今だから言える
		総務庁長官賞	新潟	黒川村立黒川中学校	3年	中野克英	寺に生まれて
		文部大臣賞 特別賞	長崎	西有家町立西有家中学校	3年	安達かよ	その時私は
		文部大臣賞 特別賞	埼玉	秩父市立大田中学校	2年	中田昌伸	僕の家「酪農家の跡継ぎとして」
第8回	昭和 61年度	内閣総理大臣賞	香川	丸亀市立南中学校	1年	垂水希実枝	ありのままの姿で
		総務庁長官賞	島根	出雲市立出雲第二中学校	3年	米原のぞみ	「のぞみって・・・」母の言葉に生きる
		文部大臣賞	鹿児島	末吉町立末吉中学校	2年	白鳥哲也	手話から学んだこと
		特別賞	山形	長井市立北中学校	3年	佐藤真理	一通の手紙から
		特別賞	沖縄	名護市立東江中学校	1年	大城洋子	目標に向かって
第9回	昭和 62年度	内閣総理大臣賞	長崎	県立野崎養護学校中学部	2年	野田綾子	心で握手
		総務庁長官賞	岡山	倉敷市立新田中学校	1年	岡田良平	僕の弟
		文部大臣賞	福井	武生市立武生第一中学校	2年	谷口敏和	いじめられっ子を救え!
		特別賞	新潟	津南町立津南中学校	3年	小野寺優子	恵福園のおばあちゃん
		特別賞	愛媛	伊予市立港南中学校	3年	一色寿恵	創り出す喜びを胸に
		特別賞	愛媛	松山市立勝山中学校	3年	瀧本則隆	心をみがく～ロシア人基地の清掃活動を通して～
第10回	昭和 63年度	総務庁長官賞	静岡	島田市立島田第一中学校	3年	大石寿宏	国際化を考える
		文部大臣賞	鳥取	東郷町立東郷中学校	3年	石賀正元	生きる幸せ
		特別奨励賞	山形	平田町立飛鳥中学校	3年	富樫美起	国際社会への目覚め
		特別奨励賞	東京	私立桐朋女子中学校	3年	正木綾	勉強より大事な勉強
		特別奨励賞	京都	京北町立周山中学校	3年	山田義治	人間の生き方について思うこと
		特別奨励賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	3年	久富薫	地球にやさしく
		特別奨励賞	福井	鯖江市立中央中学校	2年	吉田正樹	努力のすばらしさ
第11回	平成 元年度	文部大臣賞	山形	鶴岡市立鶴岡第四中学校	3年	阿部幸	生きているということ
		特別奨励賞	千葉	大多喜町立大多喜中学校	2年	張本敏美	私の名前は張本敏美
		特別奨励賞	新潟	枕崎市立松浜中学校	2年	石黒葉子	我が家の驛
		特別奨励賞	和歌山	美里町立美里中学校	3年	今岡万純	祖父の看病を通して
		特別奨励賞	愛媛	今治市立南中学校	2年	馬越裕美	兄貴に乾杯
		特別奨励賞	福島	福島市立福島第一中学校	3年	市原亮	部活動から学んだもの
		特別奨励賞	茨城	水戸市立国田中学校	3年	宮田敦子	自然を大切に
		特別奨励賞	新潟	新井市立新井中学校	3年	伊藤よし子	この手にかける私の願い
第12回	平成 2年度	特別奨励賞	滋賀	栗東町立栗東西中学校	3年	勝西紀之	人のためになること・・・
		特別奨励賞	奈良	明日香町立聖徳中学校	3年	飛鳥朝子	母の言葉を聞いて
		特別奨励賞	島根	三隅町立三隅中学校	3年	吉村幸雄	ぼくの夢
		特別奨励賞	新潟	弥彦町立弥彦中学校	3年	皆川辰男	長男の宿命から
		特別奨励賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	2年	城島澄子	地球のなみだ
第13回	平成 3年度	特別奨励賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3年	佐藤郁子	今、私達が街をつくる
		特別奨励賞	東京	多摩市立貝取中学校	3年	末吉優子	ボランティア活動と本当の目
		特別奨励賞	神奈川	私立函嶺百合学園中学校	1年	早川幸恵	帰りを待つ人々
		特別奨励賞	愛媛	松山市立西中学校	2年	泉正徳	苦しみも悲しみも肥料に
		特別奨励賞	富山	魚津市立西部中学校	2年	高谷朋花	七十点の両親が最高
		特別奨励賞	北海道	弟子屈町立弟子屈中学校	3年	横川心	命、育んで
第14回	平成 4年度	特別奨励賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3年	伊豆田あかり	心と外見
		特別奨励賞	神奈川	横浜市立洋光台第二中学校	3年	山谷明子	私の夢
		特別奨励賞	長崎	福江市立福江中学校	1年	平山長富	心の鐘
		特別奨励賞	宮崎	宮崎市立宮崎東中学校	3年	泉裕一郎	待っていた学校週五日制
		特別奨励賞	青森	十和田市立犬深内中学校	2年	大久保礼子	今を大切に
		特別奨励賞	沖縄	石垣市立石垣中学校	3年	金城紫穂	ぬくもり
第15回	平成 5年度	特別奨励賞	長野	更埴市立屋代中学校	3年	松沢かおる	ブルタブと私
		特別奨励賞	福島	本宮町立本宮第一中学校	3年	国分かおり	「生きる」ということ
		特別奨励賞	和歌山	下津町立下津第二中学校	1年	浜英樹	僕の育った塩津で
		特別奨励賞	岡山	倉敷市立福田南中学校	1年	阪本真一	レイ = アイクマンそれは本当の友達
		特別奨励賞	群馬	県立盲学校中学部	3年	長峰美枝	私の夢
		特別奨励賞	青森	十和田市立犬深内中学校	2年	大久保礼子	今を大切に
		特別奨励賞	沖縄	石垣市立石垣中学校	3年	金城紫穂	ぬくもり

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第16回	平成 6年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	沖縄	沖縄市立山内中学校	3年	稲嶺彩子	夢を持って
			栃木	私立作新学院中等部	3年	高内めぐみ	父が教えてくれたこと
			秋田	平鹿町立醍醐中学校	3年	菅原嘉治	りんご農家に生まれて
			茨城	協和町立協和中学校	3年	河田友里	力強く、わたしは生きたい
第17回	平成 7年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立西中学校	1年	小野めぐみ	私の戦い
			茨城	協和町立協和中学校	2年	中里成喜	自分自身に克つために
			愛知	旭町立旭中学校	3年	安藤佳代子	旭の町に生きる
			東京	荒川区立日暮里中学校	1年	高宗哲	僕たちにできること
福岡	勝山町立勝山中学校	2年	義経千晶	勇気を			
第18回	平成 8年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	東京	台東区立下谷中学校	3年	岡村朋子	蜘蛛の巣
			熊本	山鹿市立鶴城中学校	3年	神崎真由	私の試験
			島根	西郷町立西郷南中学校	1年	常角和代	広い目で
			静岡	沼津市立第五中学校	3年	露木義章	A先輩から学んだこと
三重	私立皇學館中学校	2年	宮本真衣	海の命を守ろう～おばあさんに教えられたこと～			
第19回	平成 9年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山梨	斐崎市立斐崎東中学校	3年	高保かおり	在宅介護から考えたこと
			島根	西郷町立西郷南中学校	3年	吉田修	きゅうり
			鹿児島	有明町立宇都中学校	3年	坂口潤成	僕の町 - 僕の夢
			神奈川	山北町立清水中学校	1年	武尾一興	中学生になって
奈良	生駒市立緑ヶ丘中学校	1年	中地まりあ	自然の魂			
第20回	平成 10年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	山形	長井市立長井南中学校	3年	鈴木智恵	ピナアダム、私の道しるべとして
			山口	徳山市立岐陽中学校	3年	川崎祐樹	同じ人間だから
			茨城	阿見町立阿見中学校	3年	湯原瑞紀	みんなて学校を創ろう
			愛媛	肱川町立肱川中学校	3年	竹本咲子	うちは五人家族
第21回	平成 11年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	栃木	西那須野町立西那須野中学校	3年	松林朝子	家族と支えあう中で
			東京	港区立青山中学校	3年	秋田絵麻	本当の幸せとは・・・
			滋賀	石部町立石部中学校	3年	中川智香子	さわやかな学校をめざして～トイレからの発信～
			岡山	倉敷市立西中学校	3年	花田春香	あなたは、我が日本愛してますか？
第22回	平成 12年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣奨励賞 審査委員会特別賞	鹿児島	喜界町立第二中学校	3年	前泊佑香	鳥うたの心を伝えたい
			新潟	六日町立六日町中学校	1年	天海琢磨	ぼくは僕
			奈良	私立智辯学園中学校	1年	北側真由佳	私のバリアフリーの第一歩
			富山	高岡市立南星中学校	3年	炭谷英信	言葉の思い出から学んだもの
第23回	平成 13年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	東京	足立区立第十四中学校	1年	荒谷真理子	努力が教えてくれた事
			大阪	大阪明星学園明星中学校	3年	植田倫啓	「ケータイ」と「僕」
			鹿児島	志布志町立志布志中学校	2年	西国領君嘉	日本の心を舞う
			静岡	下田市立稲生沢中学校	3年	河井千佳	私の個性
和歌山	和歌山市立東和中学校	3年	岩橋聖恵	妹の笑顔			
第24回	平成 14年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	長崎	島原市立第三中学校	3年	西誠	これから頑張るんだ
			秋田	神岡町立平和中学校	3年	杉澤綾香	ホームステイとホストファミリー体験記
			沖縄	浦添市立港川中学校	2年	渡慶次オースティン誠	ダブルの人生を過ごしたい
			長野	大町市立第一中学校	3年	柴原理志	揺るがない想い
第25回	平成 15年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山形	山形市立蔵王第一中学校	2年	澤田充史	僕の見たヒロシマ
			宮崎	山之口町立山之口中学校	1年	徳留彩乃	私になりたい
			岐阜	七宗町立神測中学校	2年	上野由貴	世界が一つになるために
			福島	霊山町立霊山中学校	3年	佐藤寛和	ハンデなんか怖くない - 僕の挑戦 -
富山	高岡市立伏木中学校	3年	飯田優里香	かつちが支える伏木の絆			
第26回	平成 16年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山口	長門市立深川中学校	2年	中嶋詩織	ともに生きる
			岩手	北上市立南中学校	3年	菅原周平	嘶の言葉と言葉の話
			富山	氷見市立南部中学校	2年	沈道 静	茶道の香りが教えてくれたこと
			栃木	真岡市立真岡中学校	3年	菱沼優希	受け継がれる命 - その重さを・・・
徳島	那賀川町立那賀川中学校	3年	坪井克裕	今、訴えたいこと			
第27回	平成 17年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	宮崎	三股町立三股中学校	3年	福田聖伍	命をつなぐアサガオ
			岩手	盛岡市立上田中学校	3年	坂本潤奈	私は地球人
			東京	墨田区立立花中学校	3年	渡辺隆介	今に生かそう「江戸仕草」を
			山形	南陽市立宮内中学校	3年	平 暁祐	「とんと音」を未来へ
第28回	平成 18年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	鹿児島	始良町立山田中学校	1年	新園祐花	今を生きる私
			熊本	南阿蘇村立白水中学校	3年	後藤奈々	私と沖縄
			愛知	豊田市立崇化館中学校	3年	蔭 裕んてい	為什公、そして謝々
			第29回	平成 19年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	愛知	豊田市立美里中学校
埼玉	加須市立昭和中学校	2年				町田卓哉	何だっていいんだあ
愛媛	内子町立大瀬中学校	1年				東影喜子	猪の涙
第30回	平成 20年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞				熊本	産山村立産山中学校
			沖縄	石垣市立大濱中学校	3年	新城利絵	島の心をメロディにのせて
			富山	高岡市立志真野中学校	3年	小久保緑	田んぼと私
			第31回	平成 21年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	大分	竹田市立竹田中学校
宮城	気仙沼市立気仙沼中学校	3年				志田晶	私も「小さな波」となって
静岡	牧之原市立相良中学校	3年				瀧谷美紀	支えられた私
新潟	村上市立平林中学校	3年				小池尚輝	音のない世界、声のない会話
奈良	智辯学園奈良カレッジ中学校	3年	小川歌穂	スマイルと真心はタダ			
島根	安来市立広瀬中学校	3年	田邊光	故郷を思っ			
第32回	平成 22年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	静岡	沼津市立第三中学校	3年	内村倫笑	命
			愛知	豊田市立足助中学校	3年	藤井成一	父の言葉の意味を知って
			愛媛	新居浜市立西中学校	3年	飯尾まこ	命のチキンカレー
			長崎	佐世保市立黒島中学校	3年	松本朋之	黒島だからこそ
第33回	平成 23年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	福島	いわき市立勿来第二中学校	3年	瓜生健悟	震災を乗り越えて
			新潟	柏崎市立第一中学校	3年	西澤望美	過去と今と未来を生きる
			東京	葛飾区立常盤中学校	2年	齊藤麗香	家族の本当の意味
			岩手	陸前高田市立気仙中学校	3年	小笠原和恵	高らかに 響け

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ	
第34回	平成 24年度	内閣総理大臣賞	千葉	千葉県立千葉中学校	3年	山本恭輔	リアルに人とつながるといこと	
		文部科学大臣賞	福井	福井県立盲学校	3年	山本穰梨	私の夢 私の生き方	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	熊本	宇土市立網田中学校	3年	加来萌	父と私がふるさと網田を愛する理由	
		審査委員会委員長賞	福島	いわき市立中央台北中学校	3年	山野邊のどか	助け合いのバトン	
第35回	平成 25年度	内閣総理大臣賞	宮城	気仙沼市立小原木中学校	3年	梶川裕登	忘れないために	
		文部科学大臣賞	大分	杵築市立杵築中学校	3年	大柳涼子	マイファミリー	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	兵庫	赤穂市立有年中学校	3年	松本優香	十五歳の決意	
		審査委員会委員長賞	愛知	豊田市立石野中学校	3年	安藤明日香	伝統を受け継ぐ	
第36回	平成 26年度	内閣総理大臣賞	福岡	飯塚市立飯塚第一中学校	3年	山本由菜	子は宝～自分の命より大切なもの	
		文部科学大臣賞	山形	酒田市立第六中学校	3年	菅原すみれ	唄い継ぐ想い	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	高知	中土佐町立久礼中学校	2年	林萌桃	いのちの花・咲いて	
		審査委員会委員長賞	島根	吉賀町立柿木中学校	3年	河野鉄太	鬼退治	
		審査委員会委員長賞	沖縄	那覇市立那覇中学校	2年	高橋天洋	「中国人」という名の偏見	
第37回	平成 27年度	内閣総理大臣賞	広島	広島市立国泰寺中学校	2年	藤井志穂	語る思いと聞く思い	
		文部科学大臣賞	東京	板橋区立中台中学校	3年	張哲語	中国と日本の狭間にて	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	大阪	堺市立登美丘中学校	3年	伊勢川翠	素晴らしい奇跡の集合体	
		審査委員会委員長賞	群馬	明照学園樹徳中学校	3年	明照花音	10万の1.5の奇跡	
		審査委員会委員長賞	沖縄	八重瀬町立東風平中学校	3年	河野水穂	乗り越えたからこそ見えたもの	
第38回	平成 28年度	内閣総理大臣賞	岐阜	関市立旭ヶ丘中学校	3年	大見夏鈴	障がいはい個性	
		文部科学大臣賞	広島	広島市立二葉中学校	2年	牟田悠一郎	戦争を知ること	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	三重	四日市市立羽津中学校	3年	中前純奈	伝えたいこと	
		審査委員会委員長賞	新潟	五泉市立五泉北中学校	1年	高橋心太郎	みんなが幸福な社会を	
第39回	平成 29年度	内閣総理大臣賞	新潟	新潟県立燕中等教育学校	2年	平澤芽芽	仲間を守る一言	
		文部科学大臣賞	島根	海士町立海士中学校	3年	井手上漠	カラフル	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	群馬	太田市立南中学校	3年	森田愛美	私は、私の足で生きていく。	
		審査委員会委員長賞	愛知	蒲郡市立蒲郡中学校	3年	荒島彩乃	たった一言が言えなくて	
		審査委員会委員長賞	鹿児島	鹿児島市立坂元中学校	2年	松元一真	本当の平和へ	
第40回	平成 30年度	内閣総理大臣賞	山形	天童市立第三中学校	3年	岩淵礼姫	人生を駆け抜ける	
		文部科学大臣賞	島根	隠岐の島町立西郷中学校	1年	高梨はな	ダブル	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	熊本	御船町立御船中学校	3年	坂本優	響け！幸せのメロディー	
		審査委員会委員長賞	静岡	浜松市立佐久間中学校	3年	内山ほの葉	自分を好きになる	
		審査委員会委員長賞	愛知	豊田市立井郷中学校	3年	富田真亜玖	思いやりは言葉を超える	
第41回	令和 元年度	内閣総理大臣賞	東京	筑波大学附属視覚特別支援学校(中学部)	1年	藤田大悟	心の扉	
		文部科学大臣賞	熊本	熊本大学教育学部附属中学校	3年	廣岡里奈	私が望む優しい未来は	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	山梨	北杜市立甲陵中学校	2年	小松日菜	繋ぐ糸が切れないように	
		審査委員会委員長賞	宮城	登米市立佐沼中学校	3年	加藤海音	十人十色	
		審査委員会委員長賞	静岡	静岡市立清水両河内中学校	3年	望月香琳	地域と共にある生徒会～今、私たちにできること、すべきこと	
第42回	令和 2年度	内閣総理大臣賞	鹿児島	霧島市立横川中学校	3年	池島音羽	言葉を紡ぐ	
		文部科学大臣賞	栃木	大田原市立金田北中学校	3年	荒井千恵理	静から動へ	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	愛知	豊田市立末野原中学校	3年	戸塚優羽	目には見えないもの	
		審査委員会委員長賞	静岡	浜松市立北浜中学校	3年	村松グルン良智美	人生のかけがえのない財産について	
		審査委員会委員長賞	島根	松江市立宍道中学校	3年	武田はぐみ	「らしさ」を輝かせる	
		審査委員会委員長賞	熊本	熊本市立出水南中学校	3年	大田直人	你好ニッポン	
第43回	令和 3年度	内閣総理大臣賞	岐阜	養老町立高田中学校	3年	細川士禾	認め合うことの大切さ	
		文部科学大臣賞	山梨	北杜市立甲陵中学校	3年	平澤朋佳	「心のマスク」をはずして	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	群馬	太田市立南中学校	3年	富田樹香	本物の輝き	
		審査委員会委員長賞	熊本	宇城市立松橋中学校	3年	葛谷護	教室	
		審査委員会委員長賞	沖縄	宮古島市立久松中学校	1年	砂川恵里香	私の挑戦	
		審査委員会委員長賞	山梨	北杜市立甲陵中学校	3年	前橋真子	あなたの声、心に届け	
第44回	令和 4年度	文部科学大臣賞	長崎	大村市立玖島中学校	3年	赤川明信	日本を耕す	
		国立青少年教育振興機構理事長賞	栃木	大田原市立親園中学校	3年	阿久津結花	私が育てる「結(ゆい)」	
		審査委員会委員長賞	宮城	塩竈市立玉川中学校	3年	浅野友希	私のスタートライン	
		審査委員会委員長賞	滋賀	米原市立米原中学校	3年	田島桂	水餃子	
		審査委員会委員長賞						
		審査委員会委員長賞						

令和4年度都道府県大会実施概要

都道府県名	主催者	大会名	
	開催期日	会場	
	発表者数	応募者数	参加学校数
	実施内容		
視聴者数			

北海道・東北ブロック (1道6県 応募者数 56,643名)

1 北海道	北海道、公益財団法人北海道青少年育成協会	令和4年度北海道青少年育成大会 (「少年の主張」全道大会)	
	令和4年9月2日(金)	北海道立道民活動センター(かでの2・7)1階かでのホール	
	16名	26,053名	301校
2 青森県	各総合振興局・振興局地区大会の最優秀者14名及び札幌市代表者2名による北海道大会(動画審査)を開催。 最優秀賞(北海道知事賞)1名、優秀賞(北海道教育委員会教育長賞・北海道PTA連合会会長賞・(公財)北海道青少年育成協会会長賞各1名)、上記4名に北海道コンサドーレ札幌賞を贈呈。審査委員5名*新型コロナウイルス感染症の影響により、WEB開催。	第44回青森県少年の主張大会	
	令和4年9月27日(火)	五戸町立五戸中学校 体育館	
	8名	40名	15校
3 岩手県	青少年育成青森県民会議	県内の中学生から募集し、原稿審査で選考された8名による青森県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞5名を選考。審査員5名	
	わたしの主張岩手県大会実行委員会	第24回わたしの主張岩手県大会	
	令和4年9月14日(水)	いわて県民情報交流センター(アイーナ)7F小田島組☆ほ〜る	
4 宮城県	17名	3,761名	145校
	地区大会より推薦された17名による岩手県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞3名を選考。審査委員7名		
	青少年のための宮城県民会議	令和4年度少年の主張宮城県大会	
5 秋田県	令和4年9月29日(木)	名取市文化会館小ホール	
	13名	11,075名	163校
	12地区で地区大会を実施し、地区大会から推薦された代表者13名(仙台市は各1名、仙台地区は2名、他地区は1名)による宮城県大会を開催。 宮城県知事賞1名、青少年のための宮城県民会議会長賞2名、優良賞(県大会出場者全員)を選考。審査員6名		
6 山形県	公益社団法人青少年育成秋田県民会議	わたしの主張2022(第44回少年の主張秋田県大会)	
	令和4年9月20日(火)	秋田市立土崎中学校	
	13名	2,246名	27校
7 福島県	県内3地区(県北、県中央、県南)で開催する予選大会の優秀者12名及び開催学校推薦者1名の計13名による、秋田県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞4名、優良賞8名を選考。審査委員6名		
	(公社)山形県防犯協会連合会、山形県青少年育成県民会議、 (株)山形新聞社、山形放送(株)	第61回山形県少年の主張大会 〜いま伝えたい 私のメッセージ〜	
	令和4年9月25日(日)	山形国際交流プラザ 山形ビッグウイング 大会議室	
8 茨城県	15名	3,866名	84校
	各ブロック大会において選考された代表者15名(山形6名、最北3名、庄内3名、置賜3名)による山形県大会を開催。 最優秀1名、優秀2名、優良2名を選考。審査委員5名		
	福島県青少年育成県民会議 独立行政法人国立青少年教育振興機構	第44回少年の主張福島県大会	
9 栃木県	令和4年9月22日(木)	御蔵入交流館	
	16名	9,602名	147校
	各青少年育成市町村民会議から推薦された作品の中で、作文審査により選ばれた15名及び開催地の中学生1名による福島県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞5名、優良賞10名を選考。審査員7名		

関東・甲信越静岡ブロック (1都10県 応募者数 122,541名)

8 茨城県	公益社団法人茨城県青少年育成協会	令和4年度少年の主張茨城県大会	
	令和4年9月23日(金・祝日)	神栖市文化センター	
	10名	11,631名	139校
9 栃木県	各中学校2作品以内の推薦された作品を審査委員会において、優秀作品10作品を選出。選出された10作品の作者による茨城県大会を開催。優秀賞(県大会出場者10名)、茨城県知事賞、茨城県議会議長賞、茨城県教育委員会教育長賞、水戸西ライオンズクラブ会長賞(茨城県知事賞受賞者)、鹿島アントラーズ賞(茨城県知事賞受賞者、茨城県議会議長賞受賞者、茨城県教育委員会教育長賞受賞者)を選考。審査委員6名		
	栃木県、栃木県教育委員会、栃木県青少年育成県民会議	第45回栃木県少年の主張発表県大会	
	令和4年9月17日(土)	栃木県総合文化センター サブホール	
10 群馬県	16名	12,337名	162校
	県内8地区で各中学校の代表1名が参加する地区大会を開催し、各地区大会で選出された16名による栃木県大会を開催。 最優秀賞(栃木県知事賞)1名、優秀賞(栃木県教育委員会教育長賞)3名、奨励賞(栃木県青少年育成県民会議理事長賞)12名を選考。審査委員9名		
	群馬県、群馬県教育委員会、群馬県青少年育成推進会議	第44回少年の主張群馬県大会	
11 埼玉県	令和4年9月12日(月)	-	
	16名	41,209名	164校
	市町村大会、教育事務所ブロック大会を経て選出された16名による群馬県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞4名、努力賞11名を選考。審査委員7名*新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。		
11 埼玉県	埼玉県・埼玉県教育委員会・青少年育成埼玉県民会議	令和4年度少年の主張埼玉県大会	
	令和4年8月21日(日)	さいたま共済会館大ホール	
	5名	18,285名	281校
作文審査により選出された5名(中学生の部)による埼玉県大会を開催。 最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(教育長賞)1名、優良賞(県民会議会長賞)3名を選考。審査委員10名			

12	千葉県青少年総合対策本部	第44回「私の思い」～中学生の主張～千葉県大会		
	令和4年9月10日(土)	千葉県教育会館		
千葉県	12名	818名	15校	52名
	応募作文の中から学校長及び団体長推薦作文について、一次、二次の作文審査を行い、選出された12名による千葉県大会を開催。最優秀賞(県知事賞)1名、優秀賞2名、審査員特別賞1名、奨励賞8名を選考。審査委員9名			
13	東京都	令和4年度 中学生の主張東京都大会		
	令和4年9月11日(日)	東京都議会議事堂1階 都民ホール		
東京都	10名	5,647名	39団体	34名
	東京都による作文審査を行い、発表者10名及び奨励賞10名を選出。発表者10名による東京都大会を開催。最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(東京都教育委員会賞)2名、優良賞7名を選考。審査委員6名			
14	神奈川県	中学生の主張 in かながわ		
	令和4年9月25日(日)	神奈川県立青少年センタースタジオ HIKARI		
神奈川県	6名	685名	43校	60名
	作文審査による事前審査会を実施し、発表大会出場者7名、奨励賞(神奈川県立青少年センター館長賞)受賞者10名を選出。発表大会出場者7名による神奈川県大会を開催。最優秀賞(神奈川県知事賞)1名、優秀賞6名(神奈川県教育長賞・神奈川県福祉子どもみらい局長賞・神奈川新聞社賞・NHK横浜放送局長賞・テレビ神奈川賞・神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞各1名)を選考。審査委員5名			
15	新潟県、新潟県教育委員会、新潟市教育委員会、新潟県青少年健全育成県民会議	令和4年度新潟県少年の主張大会～わたしの主張～		
	令和4年9月17日(土)	燕市文化会館		
新潟県	13名	19,331名	143校	100名
	県内を13地区に分け、地区ごとに発表者を選出。各地区大会において選出された14名による新潟県大会を開催。最優秀賞(県知事賞)1名、優秀賞(県教育長賞)2名、奨励賞(県民会議会長賞)11名、奨励賞の中から審査員特別賞2名を選考。審査委員9名			
16	公益財団法人山梨県青少年協会、青少年育成山梨県民会議事業実行委員会	第44回少年の主張山梨県大会～わたしの主張2022～		
	令和4年8月20日(土)	山梨県立青少年センター 別館2階「多目的ホール」		
山梨県	9名	431名	16校	32名
	中学校において校内審査後、校長推薦のうえ、県大会に応募。事前審査において発表者を選出。選出された9名による山梨県大会を開催。最優秀賞(山梨県教育長賞)1名、優秀賞(山梨日日新聞社賞・山梨放送賞・NHK甲府放送局長賞・テレビ山梨社長賞各1名)(青少年育成山梨県民会議会長賞4名)を選考。審査委員7名			
17	長野県将来世代応援県民会議、長野県子ども・若者育成支援推進本部(長野県、長野県教育委員会、長野県警察本部)	令和4年度「少年の主張長野県大会」		
	令和4年9月9日(金)	JA長野県ビル13A会議室		
長野県	10名	703名	18校	36名
	各地域事務局長から推薦された11名(各地域事務局から1名、但し開催中学校がある市町村を所轄する事務局は、開催中学校推薦を含む2名)による長野県大会を開催。県知事賞1名、優秀賞2名、優良賞8名を選考。審査委員6名			
18	静岡県教育委員会、静岡県青少年育成会議	わたしの主張2022 静岡県大会		
	令和4年8月27日(土)	森町文化会館ミキホール		
静岡県	13名	11,464名	143校	290名
	作文審査会により選出された静東・静西教育事務所管内8名、静岡市2名、浜松市2名、開催町1名の13名による静岡県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞9名。審査委員7名			

中部・近畿ブロック(2府10県 応募者数 147,442名)

19	富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議	第44回少年の主張富山県大会		
	令和4年8月19日(金)	パレプラン高志会館カルチャーホール		
富山県	10名	1,964名	23校	82名
	各中学校から3点程度の推薦された作品を市町村教育委員会が10点程度選考・推薦し、審査委員会において作文審査により選出された10名による富山県大会を開催。最優秀賞1名、審査員特別賞2名、優秀賞7名を選考。審査委員8名			
20	石川県健民運動推進本部、石川県、石川県教育委員会	令和4年度少年の主張石川県大会		
	令和4年8月27日(土)	石川県青少年総合研修センター		
石川県	16名	26,585名	72校	90名
	各地区大会から選出された16名(各地区4名ずつ)による石川県大会を開催。最優秀賞(石川県知事賞)1名、優秀賞(石川県教育委員会賞)2名、奨励賞(石川県健民運動推進本部長賞)13名を選考。審査委員6名			
21	公益財団法人青少年育成福井県民会議、福井県青少年総合対策本部	令和4年度「少年の主張」コンクール福井県大会		
	令和4年8月19日(金)	あわら市文化会館		
福井県	8名	5,575名	34校	240名
	ブロック審査で選出された、8名による福井県大会を開催。福井県知事賞1名、(公財)青少年育成福井県民会議会長賞1名、国際ソロプチミスト福井会長賞1名、福井ライオンズクラブ賞1名、福井新聞社賞1名、NHK福井放送局長賞1名、FBC賞1名、福井テレビ賞1名を選考。審査委員10名			
22	愛知県、愛知県青少年育成県民会議	令和4年度少年の主張 愛知県大会		
	令和4年8月23日(火)	刈谷市総合文化センター		
愛知県	14名	39,717名	259校	539名
	各中学校から1名を選出、市町村教育委員会は学校数による規程通りブロックへ推薦。各ブロックより選出された計14名による愛知県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞4名、共感賞1名、奨励賞14名を選考。審査委員7名			

23 三重県	公益財団法人三重こどもわかもの育成財団、紀北地区中学生のメッセージ実行委員会	中学生のメッセージ 2022 (第 44 回少年の主張三重県)		
	令和 4 年 8 月 27 日 (土)	尾鷲市民文化会館 (せぎやまホール)		
	14 名	6,860 名	55 校	310 名
1 次選考は提出された作品の中から 40 作品程度を、2 次選考で「中学校のメッセージ」で発表する 14 名と地域優秀者 26 名程度を選考。選出された 14 名による三重県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 10 名を選考。審査委員 10 名				
24 岐阜県	岐阜県、公益社団法人岐阜県青少年育成県民会議	第 44 回少年の主張岐阜県大会 ～わたしの主張 2022 ～		
	令和 4 年 8 月 2 日 (火)	多治見市笠原中央公民館 アザレアホール		
	17 名	13,423 名	174 校	300 名
市町村単位で審査が行われ、各圏域より推薦された計 17 名による岐阜県大会を開催。県知事賞 1 名、青少年育成県民会議会長賞 1 名、県教育委員会賞 1 名、岐阜新聞・岐阜放送賞各 1 名、優秀賞 13 名を選考。審査委員 7 名				
25 滋賀県	滋賀県青少年育成県民会議	滋賀県第 25 回中学生広場「私の思い 2022」県広場		
	令和 4 年 8 月 20 日 (土)	米原市米原学びあいステーション		
	12 名	24,447 名	97 校	190 名
市町民会議から提出のあった意見作文の中から県広場での発表者 12 名による滋賀県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 9 名を選考。審査委員 10 名				
26 京都府	公益社団法人京都府青少年育成協会、京都府 PTA 協議会、京都市 PTA 連絡協議会	第 44 回「少年の主張京都府大会」		
	令和 4 年 9 月 23 日 (金・祝)	本願寺間法会館「多目的ホール」		
	17 名	5,104 名	31 校	90 名
応募された作文の中から、審査委員会により選出された大会発表者 17 名による京都府大会を開催。京都府知事賞 1 名、京都府青少年育成協会会長賞 1 名、京都府教育委員会教育長賞 1 名、京都市教育長賞 1 名、京都市町村教育委員会連合会会長賞 1 名、京都府公立中学校長会会長賞 1 名、京都府 PTA 協議会会長賞 1 名、京都市 PTA 連絡協議会会長賞 1 名、京都新聞賞 1 名、K B S 京都賞 1 名、京都府青少年育成協会会長奨励賞 7 名を選考。審査委員 9 名				
27 大阪府	青少年育成大阪府民会議、大阪府	第 44 回中学生の主張大阪府大会～伝えよう！君のメッセージ～		
	令和 4 年 8 月 28 日 (日)	大阪府立男女共同参画・青少年センター (ドーンセンター)		
	10 名	1,063 名	13 校	130 名
応募された作品の中から選考委員による作文審査を行い、選出された 10 名による大阪府大会を開催。最優秀賞 (大阪府知事賞) 1 名、優秀賞 (大阪府教育委員会賞・NHK 大阪放送局長賞・国際ソロプチミスト大阪賞) 3 名、審査員特別賞 1 名、優良賞 5 名。審査委員 6 名				
28 兵庫県	公益財団法人兵庫県青少年本部	少年の主張兵庫県大会「中学生のメッセージ 2022」		
	令和 4 年 9 月 24 日 (土)	兵庫県民会館 9 階 けんみんホール		
	10 名	10,378 名	86 校	89 名
県内 10 地区において原稿審査及び地方大会で選出された 10 名による兵庫県大会を開催。知事賞 1 名、青少年本部理事長優秀賞 2 名、青少年本部理事長奨励賞 7 名を選考。審査員 7 名				
29 奈良県	奈良県、奈良県教育委員会、奈良県子ども・若者支援団体協議会	第 44 回「少年の主張 奈良県大会～わたしの主張 2022 ～		
	令和 4 年 9 月 4 日 (日)	山添村 ふれあいホール		
	9 名	2,488 名	17 校	130 名
作文審査により選出された 10 名 (内 1 名動画) による奈良県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名を選考。審査員 8 名				
30 和歌山県	公益社団法人和歌山県青少年育成協会	「少年メッセージ 2022」和歌山県大会		
	令和 4 年 7 月 30 日 (土)	日高川交流センター (日高川町)		
	18 名	9,838 名	105 校	100 名
応募作文から、和歌山市及び各振興局単位で選出された優秀作品各 2 名 (県大会開催地方は 4 名) 合計 18 名による和歌山県大会を開催。金賞 1 名、銀賞 2 名、銅賞 3 名、特別賞若干名を選考。審査委員 8 名				

中国・四国ブロック (9 県 応募者数 45,279 名)

31 鳥取県	青少年育成鳥取県民会議	令和 4 年度「第 44 回少年の主張鳥取県大会」		
	令和 4 年 9 月 15 日 (木)	鳥取県立倉吉未来中心		
	12 名	196 名	11 校	0 名
応募作品の中から書類審査を行い、選出された 12 名による鳥取県大会を開催。最優秀賞 (鳥取県知事杯) 1 名、優秀賞 (県教育長杯、県議会議長杯、県市長会長杯、県町村会長杯、新日本海新聞社長杯) 5 名、優良賞 6 名を選考。審査委員 6 名*新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。				
32 島根県	青少年育成島根県民会議・島根県中学校長会 (主管：出雲市中学校長会)	令和 4 年度 少年の主張島根県大会 (動画審査会)		
	令和 4 年 9 月 28 日 (水)	大社文化プレイスうらら館		
	16 名	17,464 名	96 校	0 名
各学校による 1 次選考後、県内を 13 ブロックに分けた地区大会にて選考され、地区中学校校長により推薦された 16 名による島根県大会を開催。島根県知事賞 1 名、島根県教育委員会教育長賞 1 名、島根県警察本部長賞 1 名、青少年育成島根県民会議会長賞 1 名、審査委員特別賞 2 名、優秀賞 10 名を選考。審査委員 7 名*新型コロナウイルス感染症の影響により、動画審査。				
33 岡山県	公益社団法人岡山県青少年育成県民会議	第 44 回少年の主張岡山県大会「いま、中学生が訴えたいこと」		
	令和 4 年 8 月 18 日 (木)	岡山県天神山文化プラザ		
	14 名	3,913 名	14 校	64 名
応募作品から審査の上、14 名程度の入賞者による岡山県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 4 名、優良賞 9 名を選考。審査員 7 名				
34 広島県	公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟	「少年の主張」・中学生話し方大会 2022		
	令和 4 年 9 月 3 日 (土)	広島県社会福祉会館		
	16 名	2,756 名	45 校	35 名
提出された原稿を主催者において審査し、選考された 16 名による広島県大会を開催。広島県知事賞 1 名、(公社) 青少年育成広島県民会議会長賞 1 名、広島県中学校話し方連盟会長賞 1 名、国際ソロプチミスト広島会長賞 1 名、広島清流ライオンズクラブ会長賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 7 名、基準特別賞 1 名を選考。審査員 11 名				

35	山口県	山口県青少年育成県民会議	少年の主張コンクール山口県大会		
		令和4年8月20日(土)	山口県教育会館(ホール)		
		8名	890名	15校	約90名
一次審査(各市町教育委員会等)及び二次審査(青少年育成県民会議)において作文審査により選出された8名による山口県大会を開催。最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(教育長賞、県民会議会長賞)2名、優良賞5名を選考。審査員5名					
36	徳島県	青少年育成徳島県民会議 徳島県保護司会連合会 徳島県中学校長会	第68回青少年非行防止県下中学校生徒弁論大会		
		令和4年9月7日(水)	徳島県立21世紀館イベントホール		
		10名	7,990名	69校	42名
中学校生徒弁論大会において保護区単位ブロック別で選出された代表10名による徳島県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞第一席1名、優秀賞8名を選考。審査委員10名					
37	香川県	第72回“社会を明るくする運動”香川県推進委員会、青少年育成県民会議、香川県中学校長会、香川県保護司会連合会	第73回香川県中学校生徒弁論大会・第44回少年の主張香川県大会		
		令和4年7月7日(木)	レクザムホール小ホール		
		13名	10,488名	45校	188名
県内9ブロックで開催された地区大会の最優秀賞受賞者(高松地区は5名)13名による香川県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞9名を選考。審査委員6名					
38	愛媛県	愛媛県青少年育成協議会、愛媛県、愛媛県教育委員会	令和4年度「愛媛の未来をひらく少年の主張大会」		
		令和4年9月3日(土)	愛媛県生涯学習センター 県民小劇場ホール		
		10名(1名当日欠席により動画審査)	1,226名	9校	150名
作文審査により選出された10名による愛媛県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員5名					
39	高知県	青少年育成高知県民会議、高知県、高知県教育委員会	令和4年度第44回「少年の主張」高知県大会		
		令和4年9月4日(日)	高知市春野文化ホールピアステージ		
		10名	356名	10校	68名
作文審査により選出された10名による高知県大会を開催。最優秀賞1名、会長賞1名、優秀賞2名、優良賞6名を選考。審査委員5名					

九州ブロック(8県 応募者数 19,421名)

40	福岡県	公益社団法人福岡県青少年育成県民会議	令和4年度少年の主張福岡県大会		
		令和4年9月4日(日)	筑紫野市文化会館		
		14名	369名	53校	153名
応募作品の審査委員の審査により、上位15名程度による福岡県大会を開催。福岡県知事賞1名、福岡県教育委員会賞1名、筑紫野市長賞1名、優秀賞第一席1名、審査委員会特別賞1名、その他の優秀賞を選考。審査委員10名					
41	佐賀県	佐賀県 佐賀県教育委員会 佐賀県青少年育成県民会議	令和4年度「第44回少年の主張佐賀県大会」		
		令和4年8月27日(土)	アバンセホール(佐賀県立生涯学習センター)		
		10名	469名	13校	約120名
各学校において応募者を募集し、推薦されたものを予選審査会により選出、選出者10名による佐賀県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員6名					
42	長崎県	長崎県青少年育成県民会議	第44回(令和4年度)少年の主張長崎県大会		
		令和4年8月24日(水)	佐世保市体育文化館コミュニティセンター5階ホール		
		12名	10,456名	119校	48名(無観客開催、生徒の引率者のみ)
第1次選考は、各市町主管課で、県立・国立・私立の学校について本県民会議で行い、第2次選考は本県民会議が委嘱した審査委員が行い、選出された12名による長崎県大会を開催。最優秀(青少年育成県民会議賞)1名、優秀(長崎新聞社賞、NHK賞、長崎県校長会賞、長崎県PTA連合会賞、ココロねっこ賞)5名、優良賞6名を選考。審査委員6名					
43	熊本県	熊本県、熊本県教育委員会、熊本県青少年育成県民会議	第44回「少年の主張」熊本県大会		
		令和4年9月3日(土)	つなぎ文化センター		
		12名	1,275名	36校	94名
事前審査会での作文審査により選出された各地区等代表の12名による熊本県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、奨励賞3名及び入選6名を選考。審査委員6名					
44	大分県	大分県青少年育成県民会議	令和4年度(第44回)少年の主張大分県大会		
		令和4年8月19日(金)	豊後大野市総合文化センター エイトピアおおの		
		10名	1,004名	26校	250名
各教育事務所等による第1次審査、審査員による第2次審査を行い、県大会出場者10名及び佳作を決定。出場者10名による大分県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名、特別賞(大分県教育長賞1名、共感賞1名)を選考。審査委員5名					
45	宮崎県	公益社団法人宮崎県青少年育成県民会議	令和4年度「青少年の主張」宮崎県大会		
		令和4年7月29日(金)	宮崎市民プラザ オルブライトホール		
		10名	525名	16校	90名
各学校から応募された作品の中から、事前審査により選出された10名による宮崎県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員5名					
46	鹿児島県	鹿児島県青少年育成県民会議	令和4年度「第44回少年の主張鹿児島県大会」		
		令和4年8月7日(日)	鹿児島県青少年会館 大ホール		
		10名	3,275名	45校	80名
各学校から提出された作文を審査、審査委員会により選出された10名による鹿児島県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞7名を選考。審査委員7名					
47	沖縄県	公益社団法人沖縄県青少年育成県民会議	第44回沖縄県「少年の主張大会」		
		令和4年9月29日(木)	(公社)沖縄県青少年育成県民会議 会議室より Zoom 配信		
		12名	2,048名	115校	50回線
校内推薦、市町村大会を経て選出された8~12名の代表で、6地区大会(原稿審査の地区も含む)を行い、各地区より選出された12名による沖縄県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、審査員特別賞2名、優良賞7名を選考。審査委員6名*新型コロナウイルス感染症の影響により、WEB開催。					

第 45 回少年の主張全国大会 開催のお知らせ

○開催日時：令和 5 年 11 月 12 日（日）

○開催場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
（住所：〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号）

○対 象：日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

○主 催：国立青少年教育振興機構

○協 力：都道府県、青少年育成道府県民会議、全日本中学校長会、
（予 定）日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会、
全国青少年育成県民会議連合会

○後 援：内閣府、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、
（予 定）一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会
社会福祉法人全国社会福祉協議会

○主張発表者（出場者）・選出方法：

(1) 主張発表者

各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。

(2) ブロック代表定数

全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、ブロック代表を選出します。

- 北海道・東北ブロック・・・2 名
- 関東・甲信越静ブロック・・・3 名
- 中部・近畿ブロック・・・3 名
- 中国・四国ブロック・・・2 名
- 九州ブロック・・・2 名

※ 新型コロナウイルス感染症等の状況に応じて、開催方法を変更させていただく場合があります。

※ 都道府県大会の詳細につきましては、各主催者にお問い合わせ願います。

第 44 回少年の主張全国大会報告書～わたしの主張 2022 ～

令和 5 年 1 月発行

編集 国立青少年教育振興機構

〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号

<https://www.niye.go.jp>

担当 教育事業部事業課

電話 : 03-6407-7683 FAX : 03-6407-7699

※転載の際は上記へご連絡ください。



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

体験の風を
おこそう